宮城県文化財調査報告書第48集

宮城県文化財発掘調査略報

（昭和 51 年度分）

昭和52年3月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

宮城県は全国でも遺跡の多い県であります。新しく刊行された『宮城県遺跡地名表』に収録された遺跡数は4,231ヵ所と、この数年間に約2倍に増加し、数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在することが明らかとなってまいりました。

今年度は安定成長経済でありましたが、各種の開発事業も進められ、文化財の保護に関して種々の問題が提起され、文化財保護行政をいかに適正に進めていくか問題の多かった年でもありました。こうした中で、宮城県教育委員会では東北自動車道関係3遺跡、東北新幹線関係6遺跡、一般開発関係として11遺跡の調査を実施しました。特に、東北自動車道関係遺跡の古川市宮沢遺跡長者原地区の調査では2本の築地と杭列及び築地を跨ぐ建物跡の発見があり、城柵としての性格を強め、東北新幹線関係遺跡の高清水町東館遺跡では、日本最北限の方形周溝墓、観音沢遺跡では中世建物跡群の検出があり、名取市清水遺跡で木組み井戸より平安時代の木製独楽（こま）、竹製笛などの発見がありました。一般開発関係では、推定色麻柵跡の一の関遺跡で建物跡の確認等があり大きな成果がありました。

この報告書は、そのうち14遺跡と昭和48年より調査してまいりました城館関係6遺跡を加えた22遺跡に関する調査の概略を収録したものであります。

ここに、本書を刊行するに当り、御尽力と御協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼を申しあげますとともに、学界をはじめ、深く関心を寄せられる諸賢に役立つことを切に願うものであります。

昭和52年3月

宮城県教育委員会
教 育 長　津軽　芳三郎

例　言

1. 本書は昭和51年度発掘届一覧表・昭和51年度東北自動車道関係遺跡（3遺跡）・東北新幹線関係遺跡（6遺跡）・一般開発関係遺跡（5遺跡）の調査内容を簡略にまとめたものと昭和48年から測量調査を実施してきた城館跡の実測図に若干の解説を付したものとを収録したのである。後日、これらの遺跡の正式報告書を刊行する予定である。
2. 本書収録の図面・写真は最少限にとどめた。なお、本書第3図はアジア航測株式会社による航空測量図である。第16・21図は東北地形社による測量図である。第18図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1:25000地形図を複製したものである（承認番号昭52東複第49号）。
3. 越戸遺跡の発掘調査は花山村教育委員会が、その他の遺跡の発掘調査は宮城県教育序文財保護課が担当し、各市町村教育委員会・東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所・各学校教職員の協力をいただいた。
4. 本書の作成に際し、東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所の御教示をいただいた。
5. 本書の執筆、編集、図版等の作成及び内容の検討については、宮城県教育序文化財保護課の職員と補助員が全員で担当した。

宮城県文化財保護課審議会委員

東北大学名誉教授	伊東信雄	史跡・埋蔵
東北大学教授	関　晃	古代史
郷土史家	三原良吉	民俗
東北学院大学教授	岩崎俊夫	民俗
仙台美術館長	佐々久	美術
元東北大学教授	小倉強	建築
東北大学教授	佐藤巧	建築
東北大学名誉教授	奥津春生	地質・鉱物
東北大学名誉教授	吉岡邦二	植物（動物）
登録審査員	中川高	刀剣
東北地方建設局規格部長	安岡九寿雄	関係行政機関
宮城県企画部長	鷲尾潔	〃
宮城県環境部長	佐藤卓郎	〃
商工労働部長	麻生卓哉	〃

宮城県教育庁文化財保護課職員（昭和51年度）

課長		千葉与一郎	調査第１係	技術主幹兼係長	後藤　勝彦	調査第２係	技師	佐藤　好一	調査補助員	門間　孝子
課長補佐		木村三智夫		技術主査	高橋　多吉		〃	斎藤　吉弘	〃	門馬　敦子
主幹		佐藤　栄		技師	白鳥　良一		〃	真山　悟	事務補助員	伊東　玲子
総務係	係長	加藤　忠雄		〃	佐々木安彦		嘱託	中島　直	〃	木村美紀子
	主事	矢口セツ子		〃	丹羽　茂		〃	手塚　均	業務補助員	阿部恵美子
	〃	佐藤　博重		〃	高橋　守克		〃	阿部　博志	〃	佐藤　美香
	補助員	山崎くみ子		〃	一場　孝夫				〃	藤野　曜子
				嘱託	熊谷　幹男	築館町派遣	主幹	平沢英二郎	〃	佐藤　幸子
管理係	主幹兼係長	扇　正人		〃	清野俊太郎		技師	後藤　彪	〃	松岡　敦子
	主事	佐藤　信子					〃	小井川和夫	〃	今野　晃
	〃	渡辺　正憲	調査第２係	技術主幹兼係長	斎藤　良治		〃	阿部　恵	〃	高橋　恵
	補助員	鯨井千賀子		技術主査	高橋　多吉	保護協会	書記	安藤マサ子	〃	山内　耕
	〃	真壁由美子		〃	佐々木氏楨		調査補助員	佐藤　房枝	〃	山崎　美幸
				技師	加藤　道男		〃	佐藤　哲雄	〃	庄子いく子

旧職員

総務係補助員　若部　洋子、金野　幸子、針生　好子

挿　図　目　次

第１図　1976（昭和 51）年度発掘調査遺跡分布表..... 1
第２図　東北自動車道関係遺跡位置図..... 5
第３図　宮沢遺跡長者原築遺構配置図..... 10・11
第４図　木戸遺跡遺構配置図..... 13
第５図　御駒堂遺跡遺構配置図..... 17
第６図　東北新幹線関係遺跡位置図Ⅰ..... 21
第７図　東北新幹線関係遺跡位置図Ⅱ..... 22
第８図　東北新幹線関係遺跡位置図Ⅲ..... 23
第９図　飯詰館跡遺構配置図..... 25
第 10 図　清水遺跡遺構配置図..... 32・33
第 11 図　安久東遺跡遺構配置図..... 35
第 12 図　中ノ茎Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡遺構配置図..... 39
第 13 図　観音沢遺跡遺構配置図..... 43
第 14 図　東館遺跡遺構配置図..... 47
第 15 図　横倉大久保遺跡遺構配置図..... 53
第 16 図　梁瀬浦遺跡遺構配置図..... 57
第 17 図　長谷寺横穴古墳群遺構配置図..... 61
第 18 図　越戸遺跡発掘調査区図..... 65
第 19 図　鳴瀬川流域の土地分類図..... 71
第 20 図　一の関遺跡と周辺の遺跡..... 72
第 21 図　一の関遺跡遺構配置図..... 75
第 22 図　建物基壇跡..... 78・79
第 23 図　掘立柱建物跡・土塁状遺構..... 80
第 24 図　瓦模式図Ⅰ..... 81
第 25 図　瓦模式図Ⅱ..... 82
第 26 図　出土遺物Ⅰ..... 84
第 27 図　出土遺物Ⅱ..... 85
第 28 図　出土遺物Ⅲ..... 86
第 29 図　出土遺物Ⅳ..... 87
第 30 図　出土遺物Ⅴ..... 88
第 31 図　長命館跡..... 108・109
第 32 図　赤生津館跡..... 110・111
第 33 図　保呂羽館跡..... 112・113
第 34 図　丸山館跡..... 114・115
第 35 図　岩出山城跡..... 116・117
第 36 図　鶴丸館跡..... 118・119

写 真 図 版 目 次

宮沢遺跡長者原地区第１築地断面..... 8
第１築地杭列..... 9
第１築地杭列..... 9
第２築地張り出し部掘立柱建物跡..... 9
木戸遺跡遠景..... 15
第２住居跡..... 15
第８住居跡..... 15
御駒堂遺跡遠景..... 19
第 22 住居跡..... 19
第 11 住居跡カマド..... 19
飯詰館跡遠景..... 27
遠景..... 27
大溝断面..... 27
清水遺跡第Ⅱ区住居跡..... 30
第Ⅰ区住居跡群..... 31
第 31 土壙（井戸跡）..... 31
井戸跡出土竹製笛..... 31
安久東遺跡全景..... 37
溝状遺構..... 37
古墳石室..... 37
中ノ茎遺跡遠景..... 41
方形周溝状遠景..... 41
方形周溝状遺構遺物出土状況..... 41
観音沢遺跡遠景..... 45
第 11 住居跡..... 45
第 59 土壙（土倉跡）..... 45
東館遺跡遠景..... 49
第１住居跡..... 49
方形周溝墓..... 49
横倉大久保遺跡近景..... 55
塚断面..... 55
出土遺物..... 55
梁瀬浦遺跡住居跡..... 59
住居跡内炉跡..... 59
遺物出土状況..... 59
長谷寺横穴古墳群..... 63
第１横穴古墳..... 63
第１横穴古墳遺物出土状況..... 63
越戸遺跡近景..... 67
発掘状況..... 67
遺物出土状況..... 67
昭和初期の一の関遺跡..... 69
一の関遺跡遠景..... 96
建物基壇跡全景..... 96
建物基壇跡北辺近景..... 96
掘立柱建物全景..... 97
掘立柱建物跡部分景..... 97
土塁状遺構断面..... 97
土塁状遺構断面..... 98
軒丸瓦出土状況..... 98
軒丸瓦出土状況..... 98
軒丸瓦..... 99
軒丸瓦・丸瓦..... 100
平瓦..... 101

表　目　次

第１表..... 2
第２表..... 3
第３表..... 73
第４表..... 89
第５表..... 91
第６表..... 95
第７表..... 105
第８表..... 120・121

目　　次

昭和 51 年度発掘調査一覧

Ⅰ．東北自動車道関係遺跡

(1) 宮沢遺跡（長者原地区）……6

(2) 木戸遺跡……12

(3) 御駒堂遺跡……16

Ⅱ．東北新幹線関係遺跡

(1) 飯詰館跡……24

(2) 清水遺跡……28

(3) 安久東遺跡……34

(4) 中ノ茎Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡……38

(5) 観音沢遺跡……42

(6) 東館遺跡……46

Ⅲ．一般開発関係遺跡

(1) 横倉大久保遺跡……52

(2) 梁瀬浦遺跡……56

(3) 長谷寺横穴古墳群……60

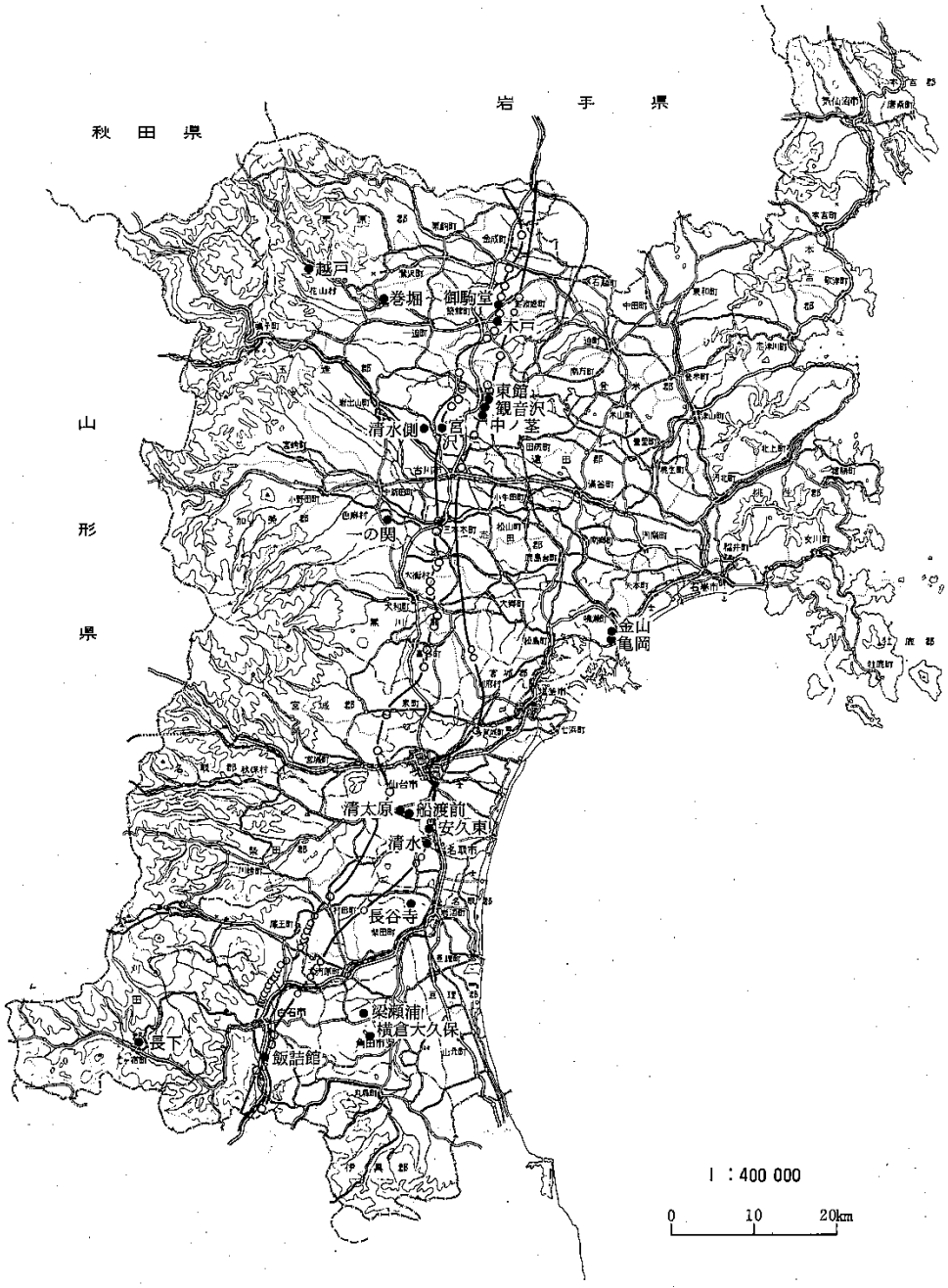
(4) 越戸遺跡……64

(5) 一の関遺跡……68

Ⅳ．城館跡（測量調査）

(1) 城館跡について……104

宮城県文化財調査報告書一覧……120



第1図　1976(昭和51)年度発掘調査遺跡分布図

第1表　1976　(昭和51)年度発掘調査一覧

整理番号	遺跡名	所在地	原因	調査主体者	調査担当者	遺跡の性格
51-1	涌谷城跡	涌谷町	戦没者慰霊碑建立			城館跡
2	神明社東遺跡	涌谷町	土取工事			奈良～平安時代集落跡
3	長谷寺横穴古墳	岩沼市	墓地拡張工事	岩沼市教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	横穴古墳群
4	天狗堂遺跡	田尻町	遺跡発見届			
5	東館遺跡	高清水町	東北新幹線建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	古墳時代～中世集落跡
6	亀岡遺跡	鳴瀬町	体育館建設遺構確認調査	鳴瀬町教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	奈良時代の国府系瓦出土地
7	愛宕山横穴古墳群C地点	仙台市	都市計画道路建設	仙台市教育委員会	仙台市社会教育課	装飾横穴古墳
8	高平遺跡	多賀城市	学校施設の整備工事			奈良～平安時代集落跡
9	舟場遺跡	三本木町	鳴瀬川築堤工事			土師器・須恵器散布地
10	梁瀬浦遺跡	角田市	集落跡範囲確認調査	角田市教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	縄文時代中期～晩期集落跡
11	三居遺跡	名取市	宅地造成			古墳時代の土師器の散布地
12	宇南遺跡	志波姫町	遺跡発見届			
13	田上(三部山)遺跡	白石市	宅地造成			縄文時代の集落跡
14	大栢遺跡	丸森町	岩工採掘			館跡
15	巻堀遺跡	一迫町	範囲・性格確認調査	一迫町教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	縄文時代後・晩期・平安時代の集落跡
16	城生柵跡	中新田町	畜舎増築			古代城柵跡（推定地）
17	上の原遺跡	秋保町	変電所新設機械搬入道路			縄文土器散布地
18	岩切鴻ノ巣遺跡	仙台市	宅地造成			古墳時代～中世の集落跡
19	長命館跡	泉市	宅地造成			館跡
20	金山遺跡	仙台市	遺構確認	東北大学長加藤陸奥雄	芹沢長介	平安時代の集落跡
21	越戸遺跡	花山村	林道改良工事			縄文時代後・晩期の集落跡
22	岩出山城跡	岩出山町	土止め工事			城館跡
23	高畑東遺跡	丸森町	宅地造成			縄文土器散布地
24	梨木畑貝塚	石巻市	範囲確認調査	石巻市教育委員会	石巻市社会教育課	貝塚（宅地内人骨出土）
25	新洞の池遺跡	高清水町	圃場整備			奈良・平安時代の集落跡
26	長下遺跡	七ヶ宿町	宅地造成	七ヶ宿町	宮城県教育庁文化財保護課	縄文時代中期集落跡
27	金山貝塚	鳴瀬町	道路幅員拡張	鳴瀬町教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	縄文時代前期貝塚
28	三部山遺跡	白石市	宅地造成	白石市教育委員会		縄文時代中期集落跡
29	五反田遺跡	仙台市	社宅新築			弥生・奈良～平安時代の集落跡
30	観音沢遺跡	高清水町	東北新幹線建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	縄文・古墳・奈良～平安時代・中世の集落跡
31	御駒堂遺跡	志波姫町	東北自動車道建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	古墳・奈良～平安時代の集落跡
32	大梁川東遺跡 大梁川・鳥川岳	七ヶ宿町	七ヶ宿ダム建設			縄文時代の集落跡

整理番号	遺跡名	所在地	原因	調査主体者	調査担当者	遺跡の性格
51 33	観音崎城跡	白石市	土地区画整理			奈良～平安時代の集落跡
34	福田町遺跡	仙台市	土地区画整理			平安時代の集落跡
35	青島貝塚	南方町	環境基盤整備			縄文時代貝塚
36	紫遺跡	泉市	宅地造成	東北学院大学	加藤孝	縄文時代集落跡
37	八乙女館跡	泉市	土取工事			城館跡
38	土手内遺跡	仙台市	擁壁設置			縄文・奈良～平安時代の遺物包含地
39	今熊野 鴻の巣遺跡	名取市	圃場造成工事			古墳時代の集落跡
40	堀の内 袋東遺跡	仙台市	土地区画整理事業			古墳・奈良～平安時代遺物包含地
41	八幡古墳	川崎町	町道改良工事			円墳（？）
42	一の関遺跡	色麻村	土地改良事業	宮城県農政部	宮城県教育庁文化財保護課	古代城柵跡（推定地）
43	朝来遺跡	米山町	道路改良工事			古代城柵跡（推定地）
44	西の浜貝塚	松島町	住宅新築擁壁工事			国史跡　縄文時代・古墳貝塚
45	小鶴城跡	仙台市	増築に伴う（宅地）造成			城館跡
46	八森遺跡	岩沼市	圃場整備事業			縄文時代の遺物包含地
47	保呂羽館 三の丸跡	登米町	汚泥処理施設工事			館跡
48	座散乱木遺跡	岩出山町	学術調査	石器文化談話会	鎌田俊昭	旧石器～縄文時代の遺物包含地
49	一の関遺跡	色麻村	遺跡の範囲性格確認調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	古代城柵・官衙・寺院跡（推定地）
50	上野遺跡	仙台市	遺跡の範囲性格確認調査	仙台市教育委員会	仙台市社会教育課	縄文時代中期・奈良・平安時代の遺物包含地
51	福田町遺跡	仙台市	宅地造成事前調査	仙台市教育委員会	仙台市社会教育課	平安時代の集落跡
52	西三軒屋遺跡	石巻市	土地造成			古墳・奈良・平安時代近世の集落跡
53	六反田遺跡	仙台市	土地造成事前調査	仙台市教育委員会	伊東信雄	弥生・奈良・平安時代の遺物包含地
54	船渡前・八幡西遺跡	仙台市				
55	木戸遺跡	築館町	東北自動車道建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	縄文時代中期・奈良・平安時代の集落跡
56	安久東遺跡	仙台市	東北新幹線建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	古墳時代～中世の集落跡
57	川袋遺跡	利府町	石室露出に伴う緊急調査	利府町教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	円墳（横穴式石室）
58	清水側遺跡	古川市	大崎広域農道建設事前調査	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	祭祀遺跡
59	羽山館跡	白石市	採石			城館跡
60	白地横穴古墳群	中田町	玄室露出に伴う緊急調査	中田町教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	横穴古墳群の１つ
61	仙台城 二の丸跡	仙台市	東北大学付属施設建設			城館跡
62	北馬場壇遺跡	古川市	養豚施設拡大			旧石器・縄文・弥生古墳時代の遺物包含地
63	安久東遺跡	仙台市	宅地造成			古墳～平安時代の集落跡
64	垂水田貝塚	石巻市	開田工事			縄文時代中期・弥生時代の貝塚・古墳時代の遺物包含地
65	新寺館跡	古川市	墓地整理事業			城館跡

Ⅰ　東北自動車道関係遺跡

第2図　東北自動車動道関係遺跡位置図

(1) 宮沢（みやざわ）遺跡

ー長者原地区ー

遺跡所在地：古川市宮沢字長者原
調 査 機 関：昭和51年4月12日～昭和51年8月11日
調 査 面 積：約10,000m^2
発 掘 面 積：　9,500m^2
遺 跡 記 号：ＡＺ
遺 跡 番 号：27053
協 力 機 関：古川市教育委員会
東北歴史資料館
宮城県多賀城跡調査研究所
協　力　者：三宅宗議（宮城県古川市工業高等学校教諭）
遊佐　五郎（気仙沼市立松岩小学校教諭）
土岐山　武（仙台市立北六小学校教諭）
森　貢喜（河南町立前谷地小学校教諭）

1. 遺跡の立地

宮沢遺跡は古川市の中心部の北西約6kmに位置し、宮沢・川熊・長岡の3地区にわたって所在する。大崎平野の北端は奥羽山脈から派生し、荒雄川（江合川）に沿って東に延びる丘陵群によって画されており、本遺跡はこれらの丘陵の一つである長岡丘陵上に立地している。長者原地区は宮沢地区の北西部にあたり、丘陵裾部と湿地帯の部分からなっている。

2. 調査の概要

今回の調査は、宮沢遺跡の北辺部の東北自動車敷約9,500m^{2}を対象に実施した。その結果、溝・土塁状遺構・築地・杭列・掘立柱建物跡・焼土遺構が発見された。以下はその概略である。

〈溝〉人工的な溝が6本発見された。第1・第2溝は上幅5～6m、広幅1.5～2m、深さ1.5～2mで第3～第6溝は築地・土塁状遺構の両側にあり、上幅3～4m、底幅約1.5m、深さ約1.5mであり、築地・土塁状遺構と密接な関係をもち機能的に一体をなすものと考えられる。第1～第6溝は、いずれも外郭線構成要素の1つであると考えられる。また、第1溝の発見によって従来考えられていた外郭線が長者原地区ではさらに約45m外側を巡ることが判明した。

〈土塁状遺構〉築地と築地の間にあり、これらと併行する。現存部は基底幅3～4m、高さ約1m、断面カマボコ形で、地山と旧表土を削り出して構築し、盛土が残存している部分もある。

〈築地〉土塁状遺構を中に挟み、第1築地(内側)と第2築地（外側）が発見された。旧表土と地山を削り出して基底部を造り、この上に地山土と表土を交互に積み上げた築地本体がのる。

基底幅約2.4～3m、最も保存の良いところで残存高1mを超える。積み土中には遺物が全く含まれていない。本体の両側には大小のピットが多数検出された。なかでも積み土の両側に接しているものは、柱痕跡の判然としているものもあり、その間隔が2.5m前後と規則性がある。このことから、これらのピットは寄せ柱柱痕跡と考えられる。第2築地南側部分ではピットに切り合いが認められる。第1築地は南西部湿地帯で途切れ、この部分に杭列が発見された。第2築地の東端北側には半円形の張り出し部があり、この部分に掘立柱建物跡が発見された。なお、愛宕山地区西隅発見の2つの築地と今回調査の第1・第2築地は連続するものと考えられる。

〈杭列〉ほぼ一直線に並らぶ約80本中からなる杭列が、約20mにわたって発見された。その方向は築地本体外側の延長線上に一致する。杭は直径10～20cm、先端を削って尖らせただけのもので、ほかに特別な加工痕は認められず、なかには樹皮がそのまま残存しているものもある。これらは掘り方を伴わず、深く打ち込まれた杭と浅く打ち込まれた杭とがあり、したがって、杭の先端は不ぞろいである。杭の長さは長いもので約130cm、短いもので約40cmである。杭列の杭の間には築地崩壊土および築地崩壊後流水によって運ばれたと思われる砂が堆積している部分もある。したがって、杭列は築地と同時に存在し、その上端は築地基底部よりは上方にのびていたと考えられる。

〈掘立柱建物跡〉柱穴掘り方の切り合いによって少なくとも4棟の重複が考えられるが、建物の規模が明らかなものは、最も新しいと考えられる1棟だけである。この建物跡は1間（3m）×1間（3m）で、築地本体をまたぎ張り出し部分に対応する位置に構築されている。他の穴は築地南側犬走り部分にのみ検出され、間尺3mで組みあうものが2組あるが北側に対応する柱穴は発見されなかった。また、第4溝（第2築地の南側）に発見された柱穴は同溝よりも古いものであり、この溝と第2築地は同時存在も考えられるから、あるいは第2築地より古い、遺構である可能性もある。なお、この柱穴の1つから、柱の一部および礎板が発見されている。

3. まとめ

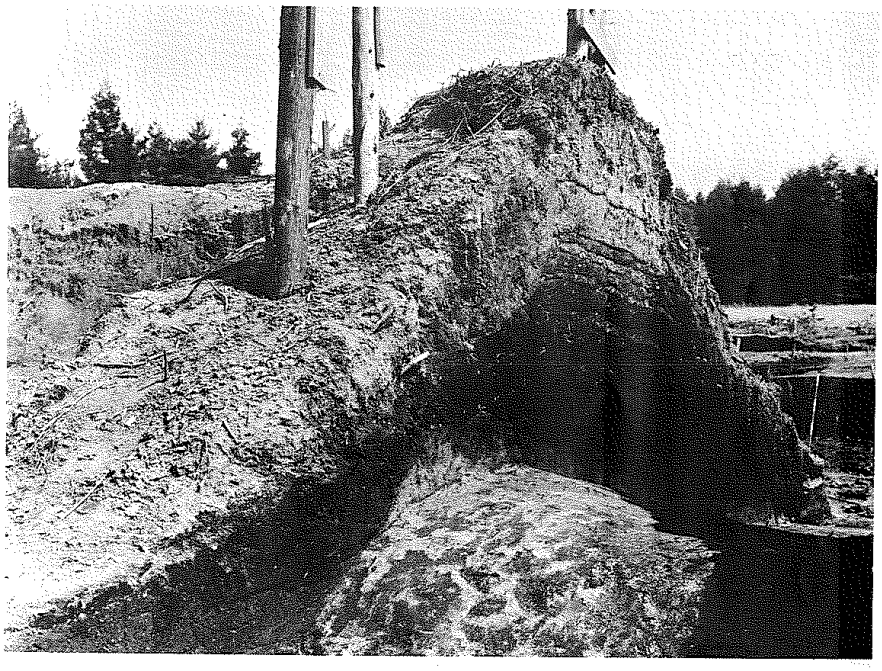
今回の調査で発見された溝・土塁状遺構・築地・杭列・掘立柱建物跡は、いずれも宮沢遺跡の外郭線を構成する要素であり、古代城柵跡の外郭部の研究に好資料を追加するものである。

参考文献　宮城県教育委員会（1974）：「宮城県文化財発掘調査略報（昭和48・49年度分）－愛宕山遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第40集

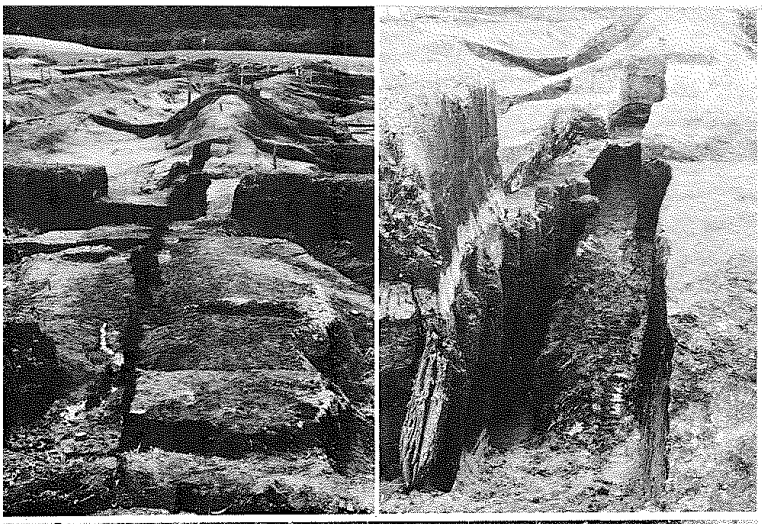
宮城県教育委員会（1975）：「宮城県文化財発掘調査略報（昭和50年度分）－宮沢遺跡（愛宕山地区〈第2次調査〉・川熊地区・長者原地区）－」『宮城県文化財調査報告書』第42集

宮城県教育委員会（1975）：「宮城県宮沢遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No. 116

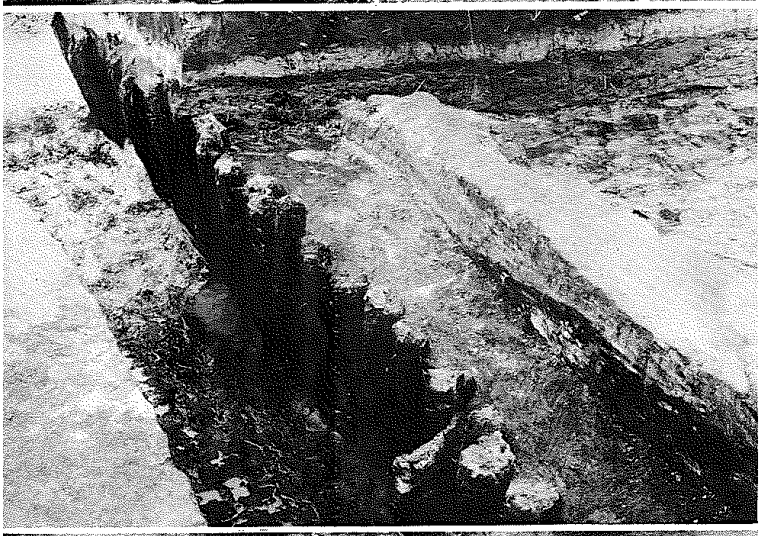
宮城県教育委員会（1975）：「宮城県古川市宮沢遺跡の調査」『日本歴史』第331号



宮沢遺跡長者原地区第Ⅰ築地断面

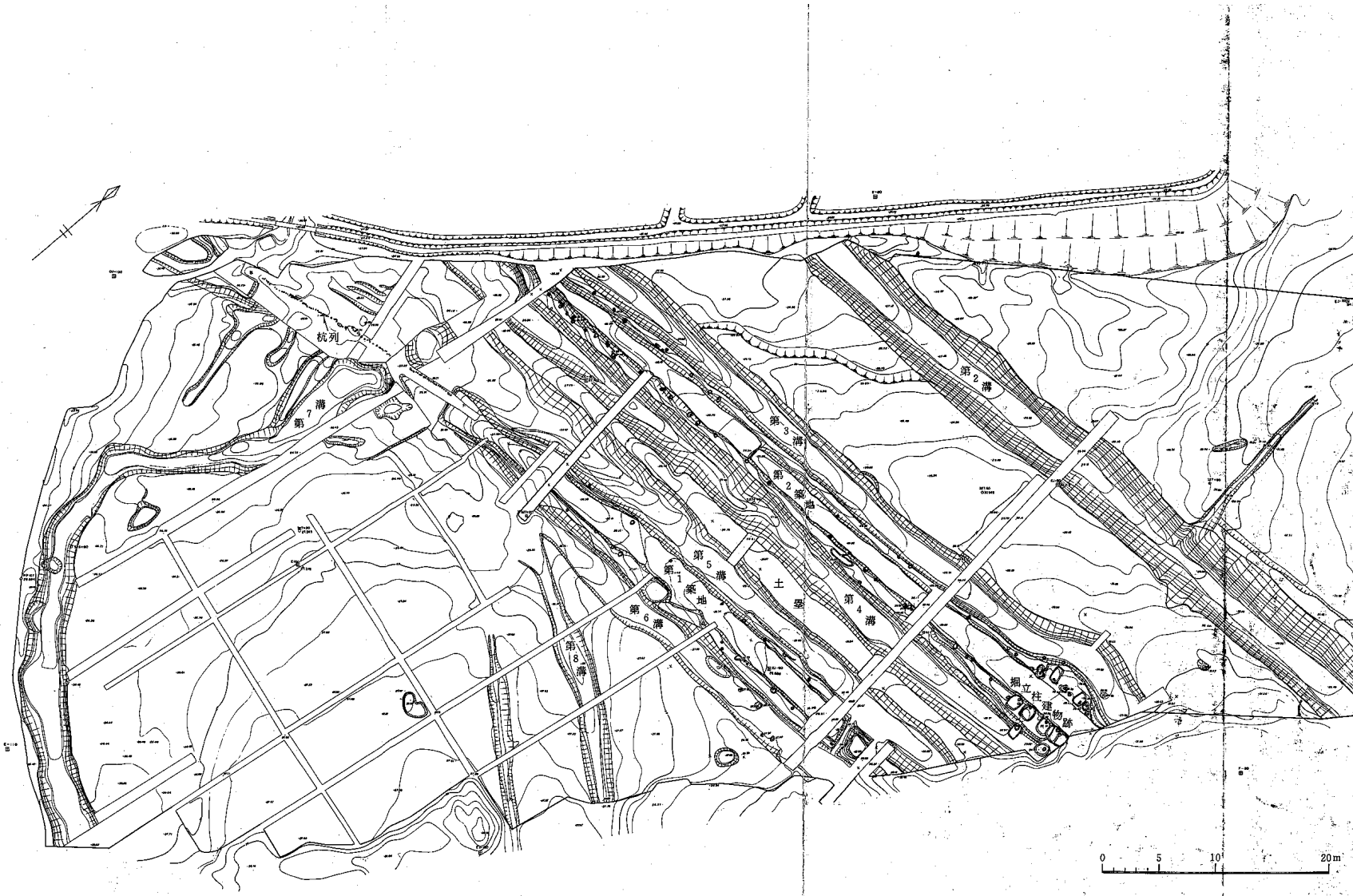


第Ｉ築地杭列



第Ｉ築地杭列細部

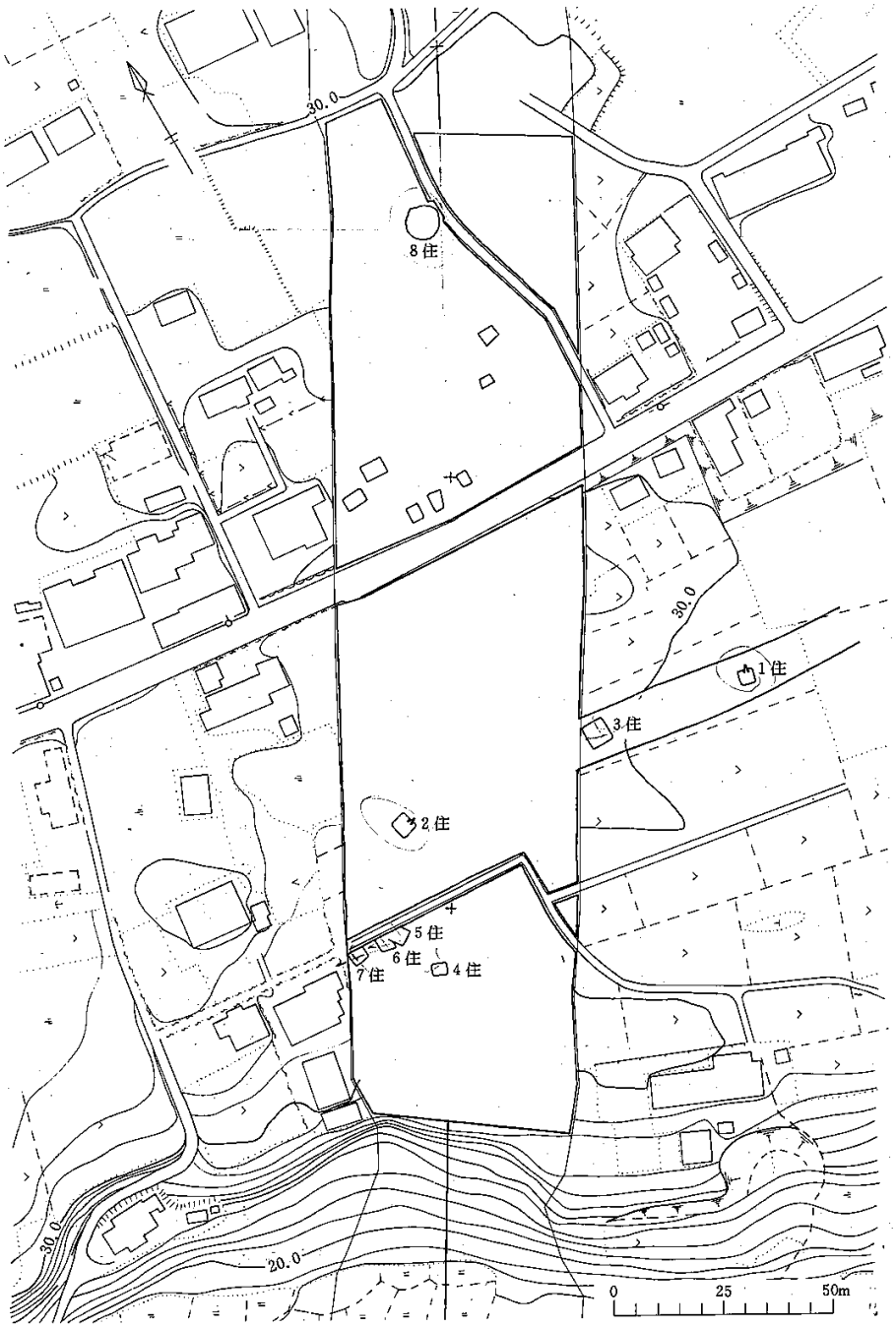
第２築地張り出し
部掘立柱建物跡



第3図　宮沢遺跡長者原地区遺構配置図（航空測量図）

(2) 木戸（きど） 遺 跡

遺跡所在地：栗原郡築館町萩原木戸
調 査 期 間：昭和51年11月8日～昭和51年12月11日
調 査 面 積：約12,000m^2
発 掘 面 積：約12,000m^2
遺 跡 記 号：ＥＦ
遺 跡 番 号：41047
協 力 機 関：築館町教育委員会
協　力　者：金野　正（宮城県築館女子高等学校教諭）
　　佐藤哲雄（東北学院大学卒業生）



第4図　木戸遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

木戸遺跡は築館町の中心部の東約2㎞に位置している。奥羽山脈から派生する築館丘陵は、伊豆沼・長沼を中心とする湖沼地帯へ注ぐ小河川によって開析され、樹枝状のなだらかな台地となって展開している。本遺跡はこれらの台地の1つ標高約30ｍの畑地（一部宅地）に立地する。周囲には縄文時代の貝塚・集落跡、古墳時代～奈良・平安時代の集落跡など多くの遺跡など多くの遺跡の存在が知られている。

2. 調査の概要

調査は路線敷及び県道切り替えの迂回路敷部分計約12,000m^2を対象に行なった。その結果、竪穴住居跡8軒・焼土遺構1基・竪穴遺構7基を確認した。このうち今年度は路線敷内の住居南跡2軒・竪穴遺構7基と迂回道路敷内の住居跡の精査を行なった。以下はその概略である。

〈第1住居跡〉一辺約3.3ｍの方形の竪穴住居跡である。南西部の壁が近世の墓墳によってされているが、全体的に保存が良好である。柱穴は検出されなかった。周溝はカマド部分を除いて壁下を巡っている。カマドは北壁の東寄りの部分に付設されている。側壁は白色粘土で構築されている。長さ約1ｍの煙道が壁外に延びている。北東隅に貯蔵穴があり土師器甕破片が出土した。

〈第2住居跡〉一辺約4.3ｍの方形の竪穴住居跡である。東西に走る後世の溝によって北壁と床面の一部が壊されている。柱穴は床面で4個検出された。周溝はカマド部分を除いて壁下を巡る。カマドは東壁中央部に付設されている。側壁は白色粘土で構築されている。長さ約0.7ｍの煙道が壁外に延びている。住居跡の東南隅に貯蔵穴があり、土師器甕破片が出土した。

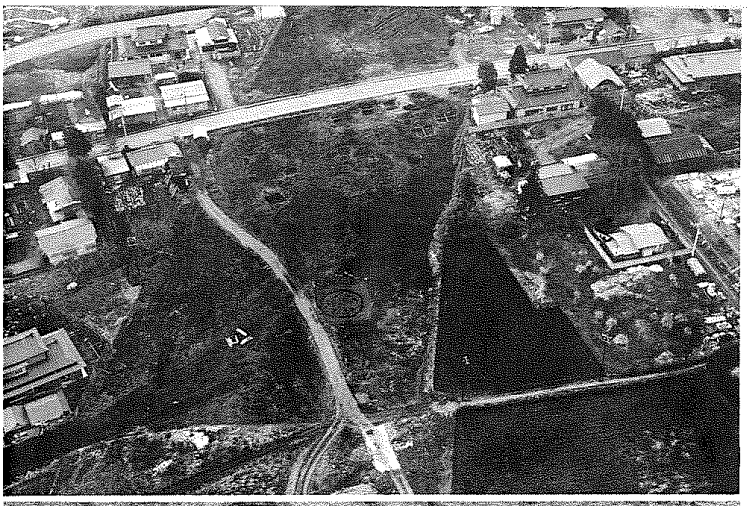
〈第8住居跡〉開田等によって削平され、壁の一部と床面・周溝が残存するだけである。周溝及び床面から平面形は径約9ｍのほぼ円形の竪穴住居跡である。周溝は幅20～40㎝、深さ30～40㎝である。床面は中央に向かって低く傾斜しており多少凸凹である。床面から16個のピットが検出された。そのうちの10個が柱穴と考えられる。住居跡の中央から東寄りの部分に火熱をうけて赤変した焼面があり、これが炉（地床炉）と考えられる。周溝と床面から少量の土器が出土した。これらはいずれも縄文中期末葉に属するものであり、住居跡の年代も同期と考えられる。

〈竪穴遺構〉7基発見された。いずれも出土遺物はなく性格を明らかにできないが、そのうちの3基は近世の厩舎であると伝えられている。

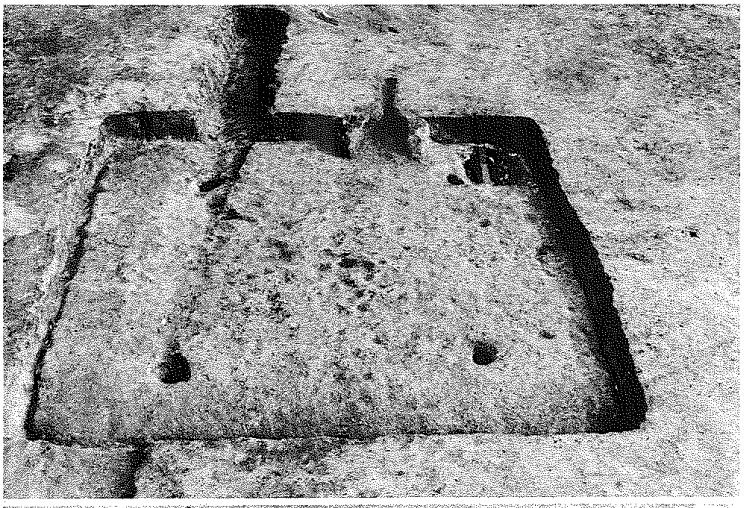
3. まとめ

本遺跡は縄文時代中期末葉・奈良～平安時代の集落跡である。第８号住居跡は昭和49年に調査された鰻沢遺跡発見の住居跡とともに当地方の集落跡の研究に好資料を追加した。第１・２住居跡葉カマドを付設しており、御駒堂遺跡（本書収録）発見の住居跡にその類似性が求められる。

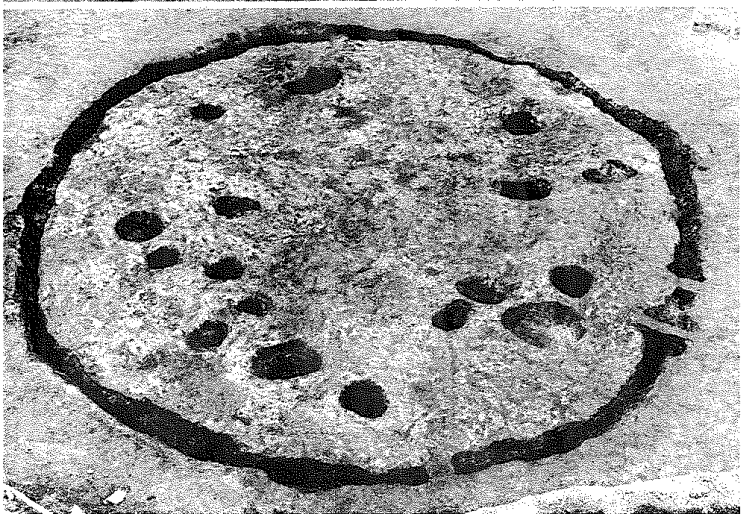
参考文献　宮城県教育委員会（1975）:「宮城県文化財発掘調査略報（昭和48・49年度分）－鰻沢遺跡－」『宮城県文化財調査報告書』第40集



木戸遺跡遠景
（北上空から）



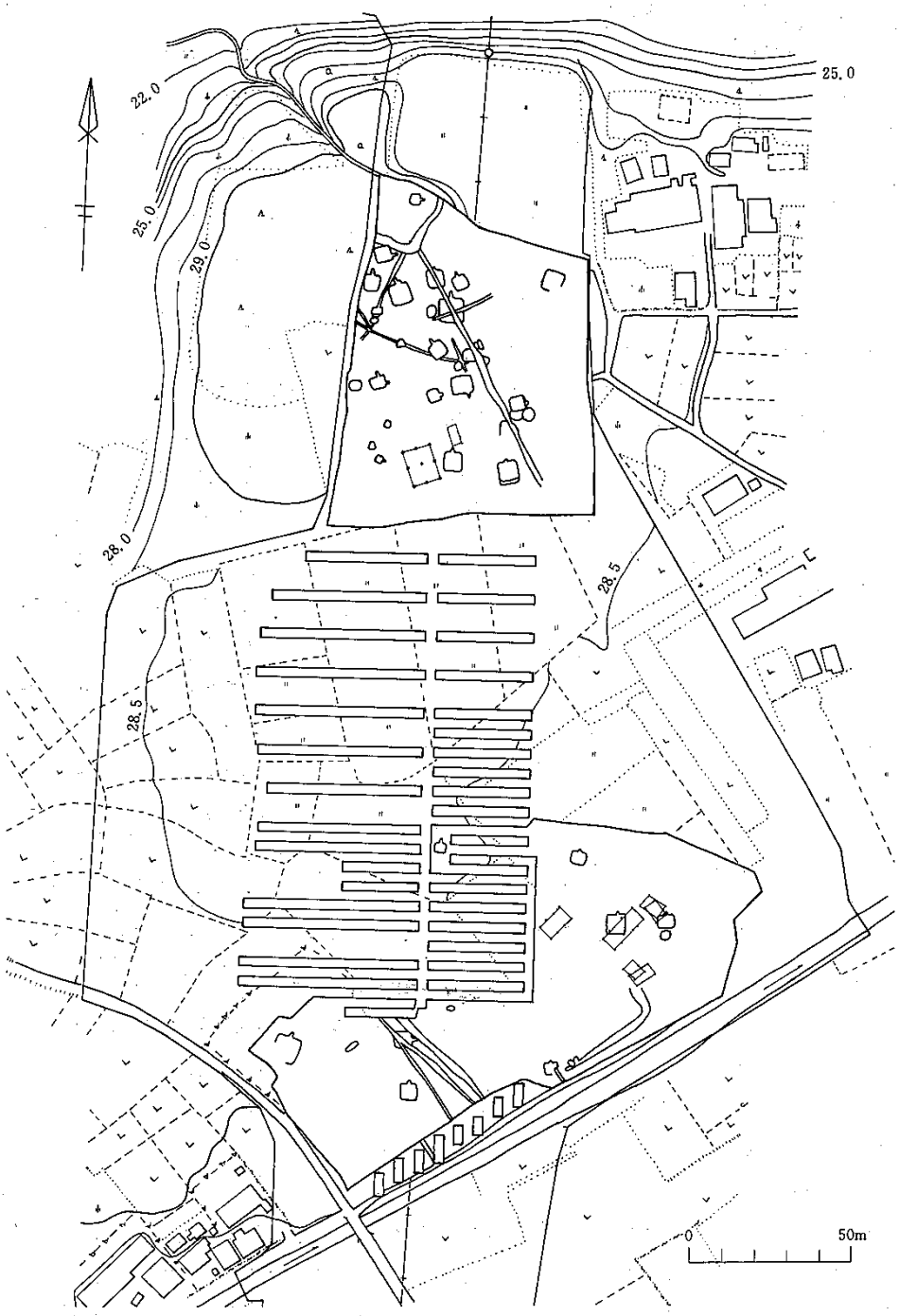
第２住居跡
（西から）



第８住居跡
（東から）

(3) 御駒堂遺跡

遺跡所在地：栗原郡志波姫町堀口御駒堂
調 査 機 関：昭和51年8月11日～昭和51年12月15日
調 査 面 積：約45,000m^2
発 掘 面 積：約22,000m^2
遺 跡 記 号：ＢＪ
遺 跡 番 号：49014
協 力 機 関：志波姫町教育委員会
協力参加者：金野　正（宮城県築館女子高等学校教諭）
千葉宗久（河北町立飯野川第2小学校教諭）
遊佐五郎（気仙沼市立松岩小学校教諭）
後藤幸雄（気仙沼市立浦島小学校教諭）
佐藤哲雄（東北学院大卒業生）



第５図　御駒堂遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

御馳堂遺跡は築館町の中心部の北東約3㎞に位置している。平坦な青地が築館町から志波姫町東部に延びており、その両側には一迫川などによって形成された沖積地（水田面）が広がっている。遺跡はこの台地（標高約29m）上に立地し、水田面との比高は約10mである。

2. 調査の概要

調査は、道路敷とパーキングエリア部分を含む約45,000m^{2}対象とし、約22,000m^{2}を発掘した。その結果、調査区の北側および南側で竪穴住居跡28軒・掘立柱建物跡10棟・土壙7基・井戸跡6基・多数の溝状遺構が検出された。調査区中央部で遺構の検出がなかったのは、この部分が数度の開田によって地山まで削平されているためと考えられる。

〈竪穴住居跡〉28軒検出された竪穴住居跡のうち、1軒はその大部分が路線外に含まれていたので実際発掘できたのは27軒である。住居跡相互の重複は認められない。平面形は方形を基調とし、規模は一辺約3～8mとばらつきがあるが、一辺5m前後のものが多い。いずれもカマドが付設されており、その位置は南壁・東壁のものも一部みられるが、北壁に付設されたものが多い。形態や構築技術の違いから、幾つかに分類可能である。柱穴は住居跡の対角線上に4個配されるものが多い。出土遺物の大部分は土師器・須恵器の坏・甕・蓋である。出土遺物から竪穴住居跡の年代は、古墳時代後期から奈良・平安時代に比定することができる。

〈掘立柱建物跡〉現在までに10棟の建物跡を推定している。柱穴間に重複が多く、建物の時期差が考えられる。廂を伴うと思われる建物もあるが、その性格については、今後の検討が必要である。遺物の出土がなく時期は不明のものが多いが、明治以降と考えられるものもある。

〈焼土遺構〉2基検出された。平面形はほぼ長方形で、規模は長軸約1m、深さ15㎝前後である。壁面・底面が火熱により赤変し硬くなっている。遺物の出土はなく時期は不明である。

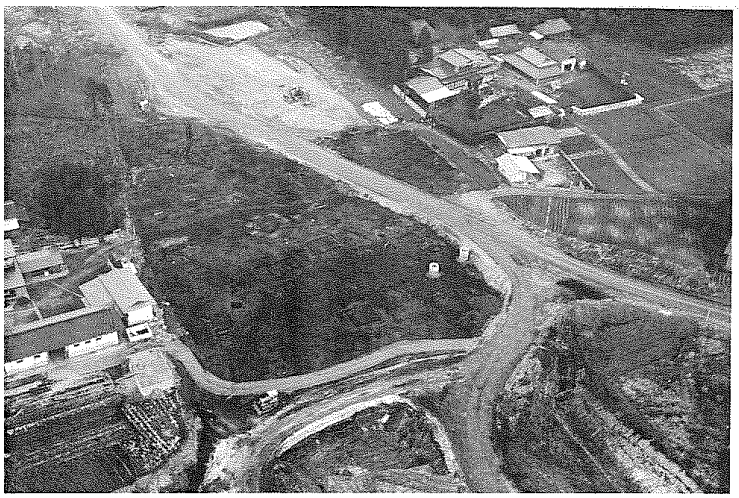
〈土壙〉10基検出された。平面形は円形を基調とし、規模は径3～5m前後、深さは0.4～0.5m前後とばらつきがある。土壙相互の重複もあり、時期差が考えられる。出土遺物には、土師器甕・須恵器長頸壺、寛永通宝、近世陶磁器などがある。

〈井戸跡〉6基検出された。湧水等のため完掘したものはない。平面形は円形を基調とし、規模は径1.5～3m前後である。最近のものも含まれている。

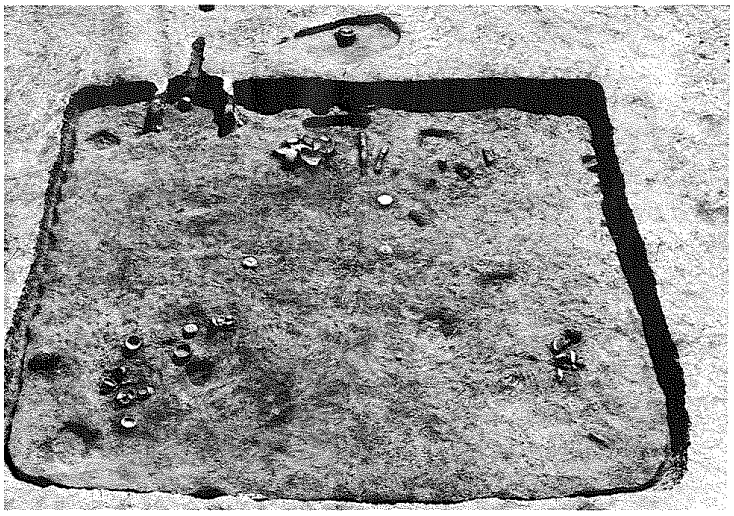
〈溝状遺構〉縦横に走る溝が多数検出されている。規模は大小さまざまで、いずれも住居跡よりは新しい時期のものである。

3. まとめ

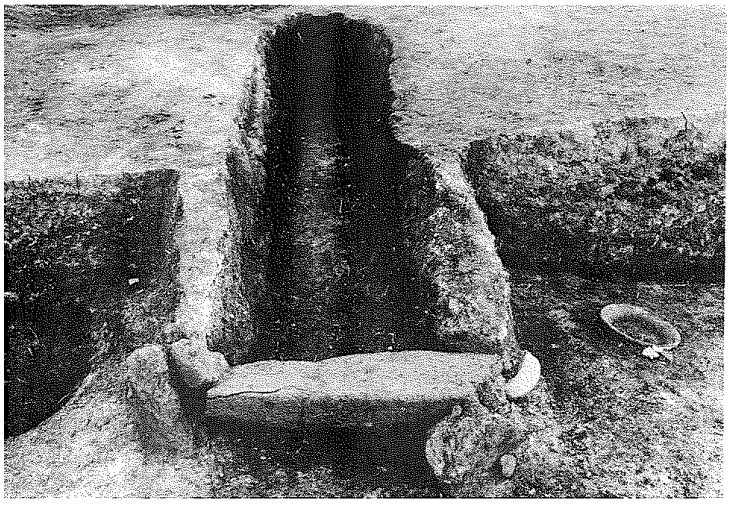
本遺跡は、古墳時代後期から奈良・平安時代に営まれた集落跡で、立地条件等を考慮するとその範囲は、さらに東西に広がるものと思われる。また、住居跡の分布は集落のあり方を考えるうえに、出土土器は編年を組みたてるうえに、貴重な資料を追加するものと考えられる。



御駒堂遺跡遠景
（南上空から）

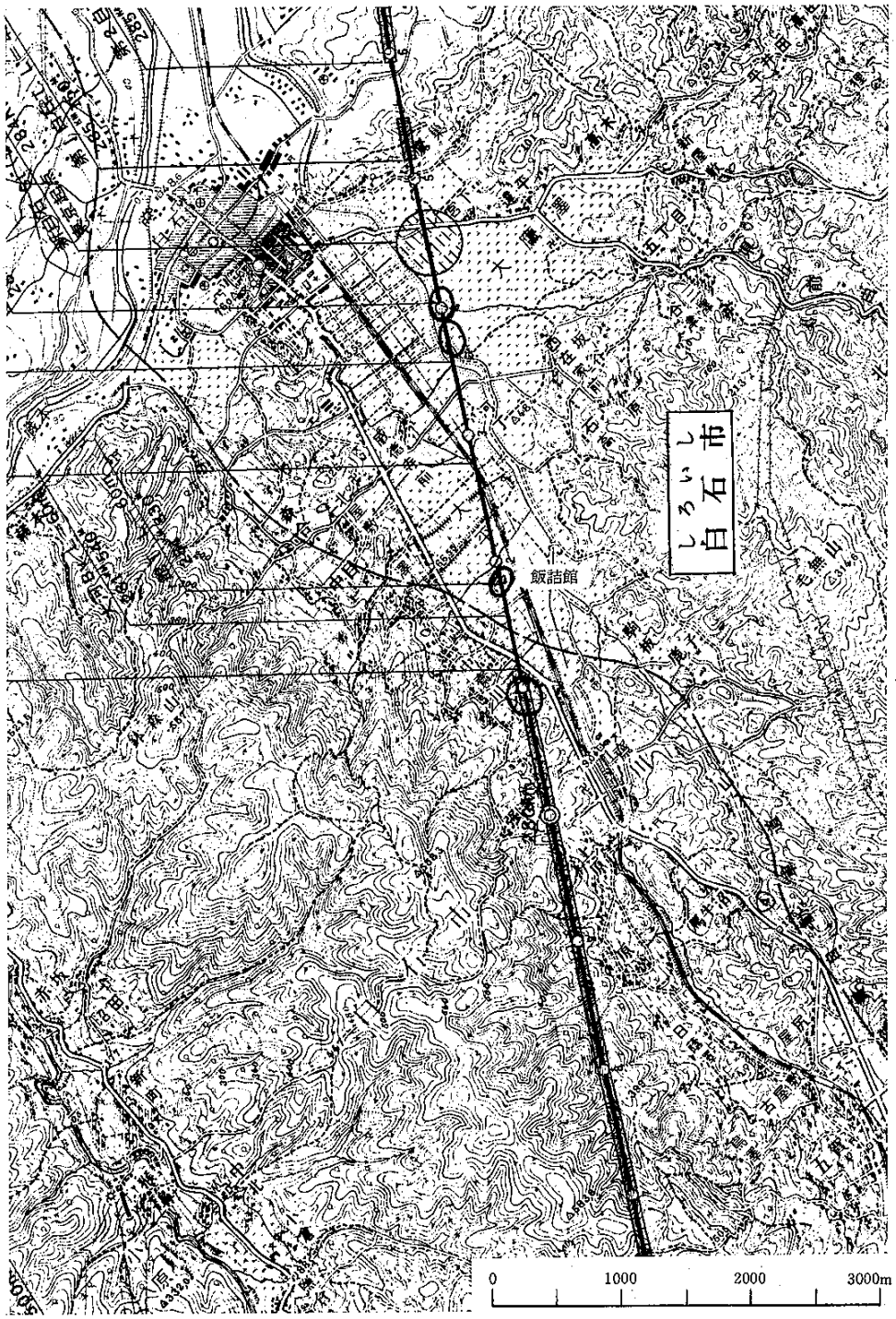


第22住居跡
（北から）

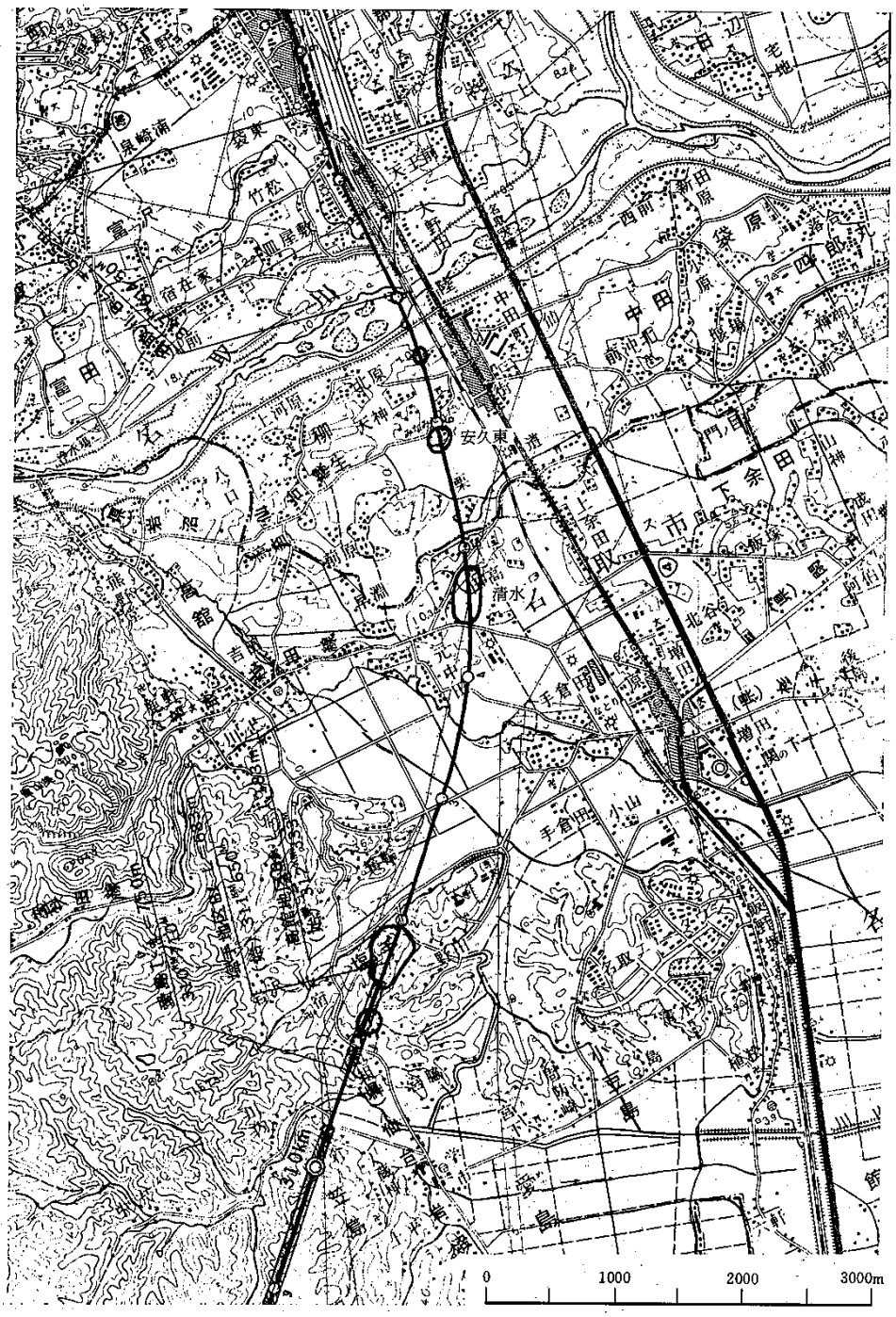


第11住居跡カマド
（南から）

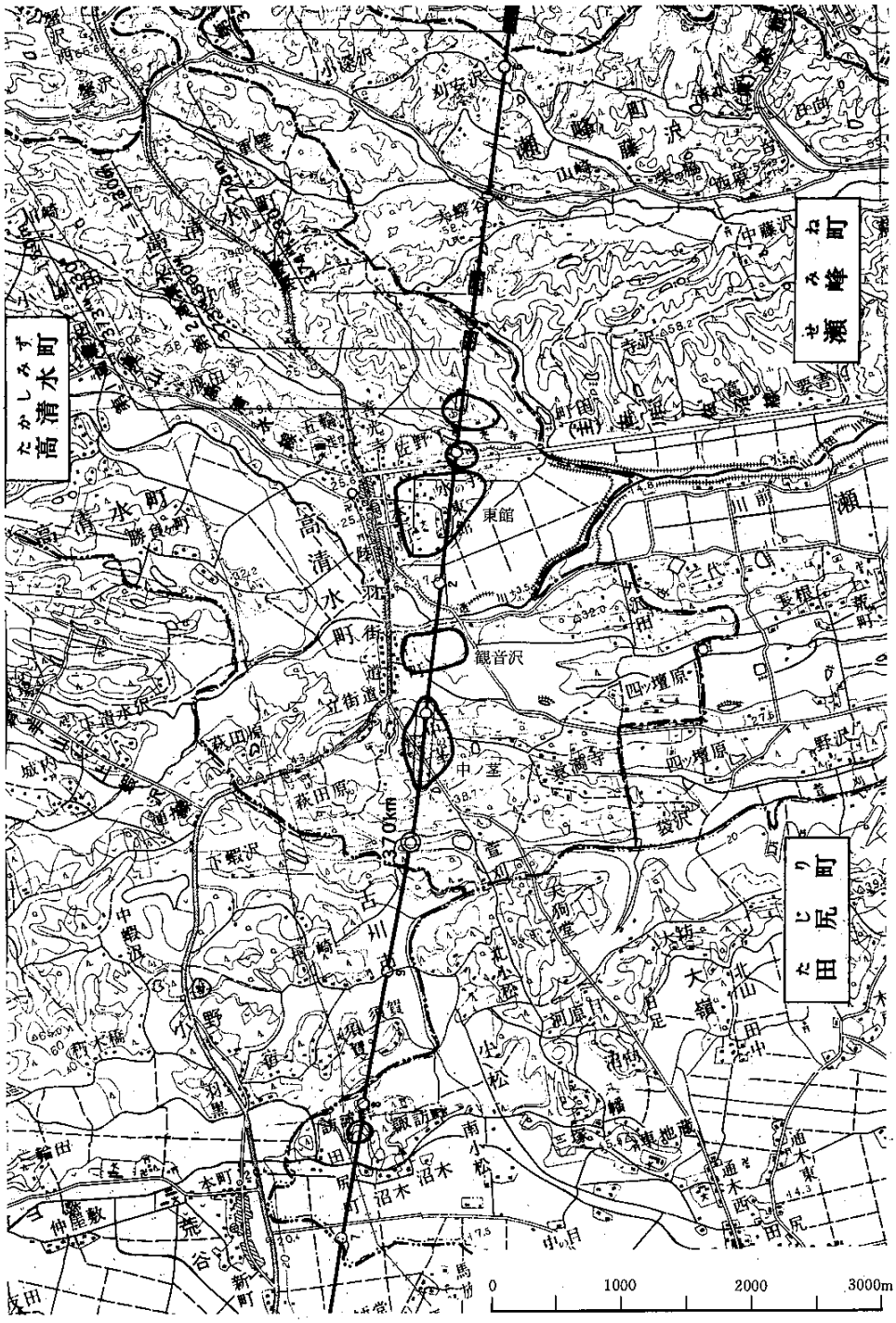
Ⅱ　東北新幹線関係遺跡



第6図　東北新幹線関係遺跡位置図Ⅰ



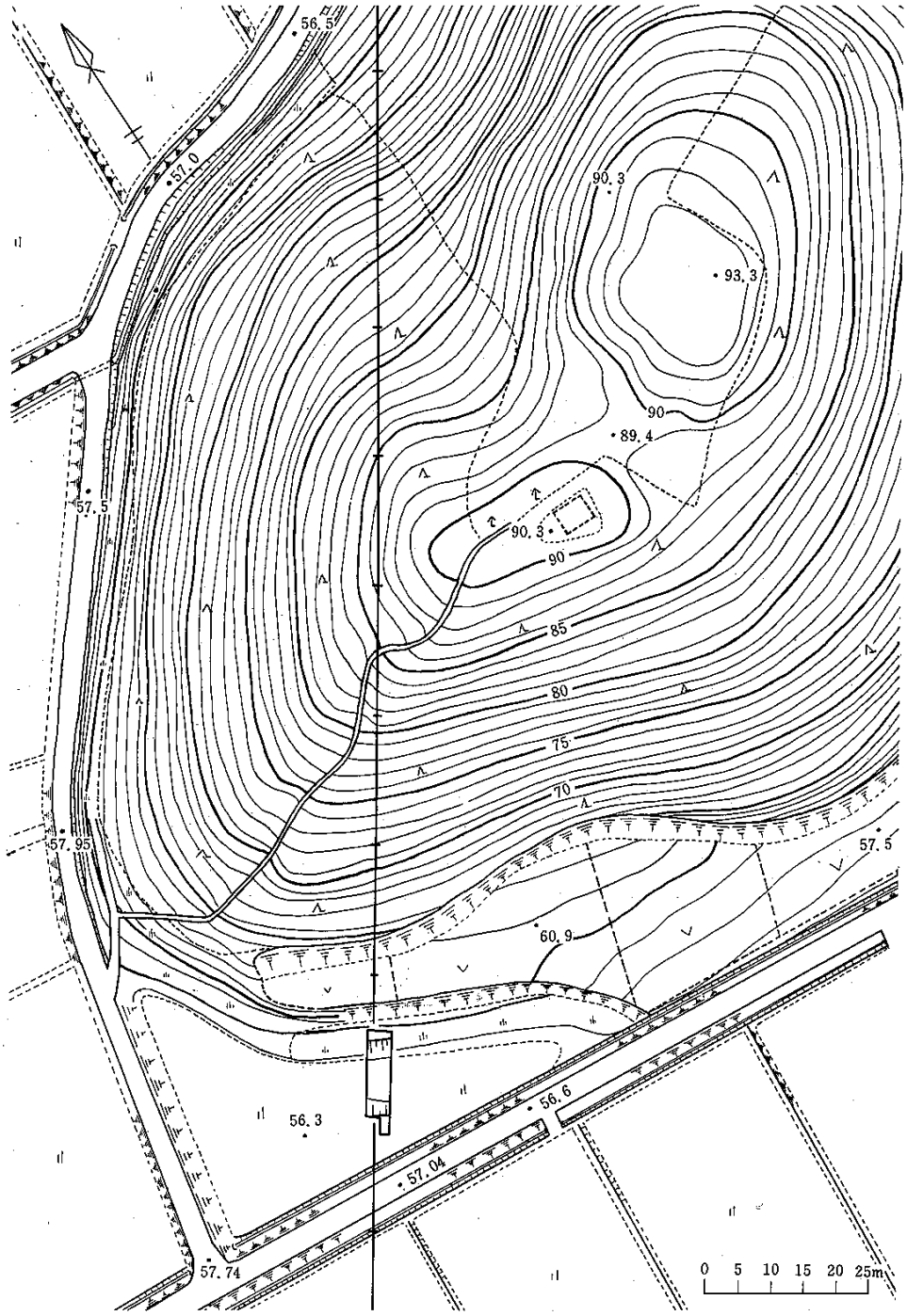
第７図　東北新幹線関係遺跡位置図II



第８図　東北新幹線関係遺跡位置図III

(1) 飯詰館跡（いいづめだて）

遺跡所在地：白石市斉川字飯詰
調 査 期 間：昭和51年3月22日～昭和51年3月25日
調 査 面 積：約30,000m^2
遺 跡 面 積：55m^2
遺 跡 記 号：ＢＮ
遺 跡 番 号：02111
協 力 機 関：白石市教育委員会



第９図　飯詰館跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

飯詰館跡は、白石市の中心部から南約3.5㎞、国道4号線の東側約0.4㎞の位置にある。奥羽山脈と阿武隈山地に囲まれた白石盆地の中心部の南側には、鉢森山火山岩類によって形成された標高約93mの東西に延びる独立丘陵がある、本館跡は、この丘陵の自然地形を利用して築造されている。丘頂平場と水田面との比高は約40mである。館跡は、現在松林･畑地･水田などになっている。周辺には、地蔵院館跡･鹿子館跡･赤館跡・泰平館跡などがある。

2. 調査の概要

昭和46年度の分布調査ならびに昭和47年に実施した測量調査の結果、丘頂部に平場、左隣斜面に腰廓が部分的にめぐることが確認されている。丘陵裾部には水濠がめぐっていたと伝られるが、圃場整備事業で館跡周囲は開田され、当時の地形をとどめている部分は少ない。

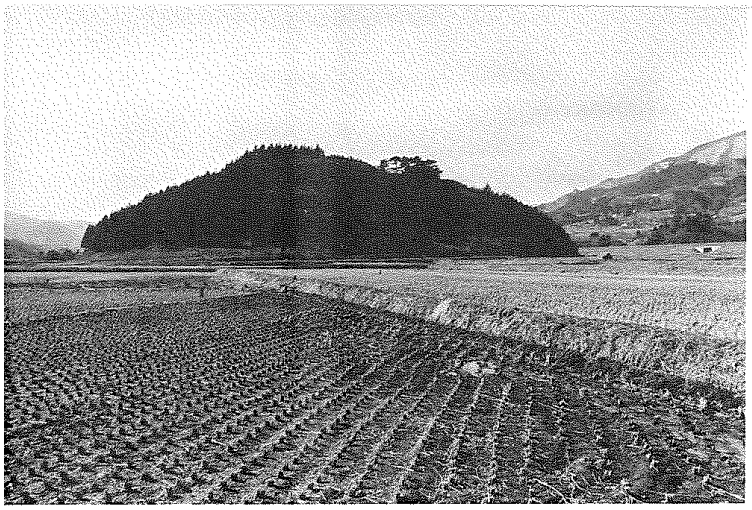
今回の調査は、館跡南側の畑地と水田（圃場整備の未整理部分）部分に調査区を設け、遺構の確認を目的に実施した。新幹線の中心杭281･780㎞を基準とし、4×3m・1×3mの南北に長いトレンチを設定し、計55m^{2}を発掘した。

調査の繕累、水田と畑地の境から北側へ3m、畑地内の地表から深さ約0.4mの部分から溝の落ち込みが認められた。この溝は、東西に延びる幅約11.3m、深さ約1.5m、断面「U」字形をした大溝である。この大溝は、路線外に延びており、館跡の周囲をめぐる可能性がある。堆積土を検討したが、空堀か否かその証拠は見いだせなかった。遺物の出土は認められなかった。

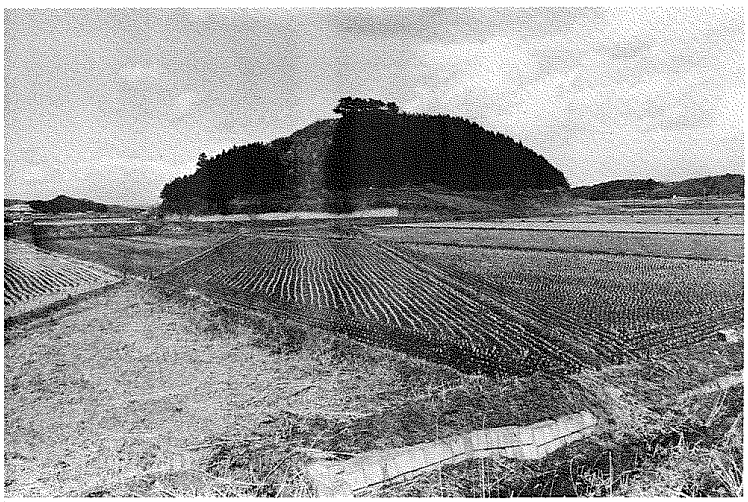
3. まとめ

今回の調査は、東北新幹線路線敷にかかる館跡のごく一部分を対象に実施した。その結果、出土遺物がなく、館跡の時期を推定する資料は得られなかった。しかし、東西にのびる大溝が発見され、この大溝が館跡の周囲をめぐる可能性の強いことが判った。

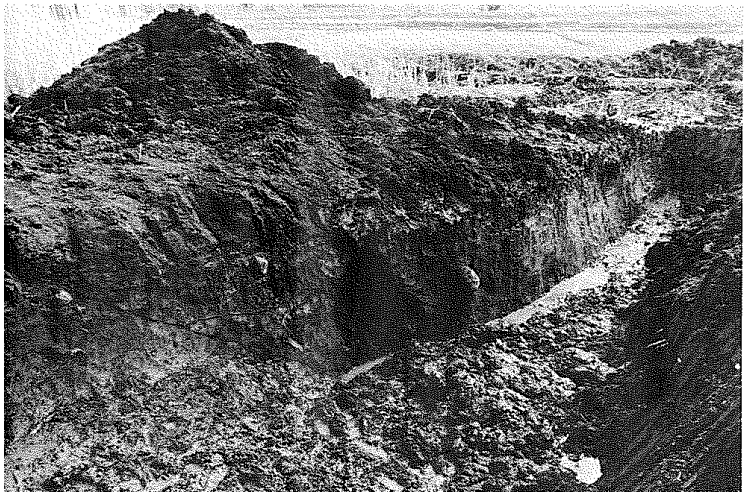
参考文献　宮城県教育委員会（1973）：「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報－飯詰館跡－」
『宮城県文化財調査報告書』第30集



飯詰館跡遠景
（北側から）



遠景（南側から）



大溝断面

(2) 清（し）水（みず）遺跡

―第3次遺跡―

遺跡所在地：名取市田高字清水
調査期間：昭和51年5月2日～昭和51年12月17日
調査面積：約4,300m^2
発掘面積：約2,400m^2
遺跡記号：ＢＵ
遺跡番号：12057
協力機関：名取市教育委員会
協　力　者：佐藤　　隆（川崎町立川崎中学校教諭）
　　新庄屋元春（村田町立田中中学校教諭）

1. 遺跡の立地

清水遺跡は名取市中心部から北北西約1.5㎞に位置している。本遺跡は名取川・増田川によって形成された標高8～9mの自然堤防上に立地している。遺跡の現状は水田・畑地・果樹園で、土師器・須恵器等が散布している。

2. 調査の概要

今回の調査は第3次のものである。Ⅰ区南側（畑地・水田）・Ⅰ区北側（水田）・Ⅱ区（畑地・果樹園）の中で、第1次・第2次において未調査となっていた部分を対象として、調査を実施し、約2,400m^2を発掘した。

第Ⅰ区南側　第1次および第2次で未調査となっていた緩斜面の部分を発掘した。その結果、竪穴住居跡7軒・土壙9基・井戸跡1基・多数の溝状遺構が発見された。

〈竪穴住居跡〉 平面形は一辺2.5～5.0mの方形を基調としている。重複していたり、路線外にのびているものもあったが、保存の良いものでは付設されたカマドが残っていた。

〈土壙〉 平面形は長方形・円形のもの等がある。規模は長軸0.6～0.4mと多様である。

〈井戸跡〉掘り万の平面形は楕円形（長軸約4.2m・短軸約4.0m）で、断面形は逆台形である。深さは約29mである。内部に木製組みものによる井戸側が残っていた。井戸側は内法の部分で長・短軸約1.0mである。

〈溝状遺構〉 住居跡群の南西側に集中して検出された。東西方向に平行なものが多いが、それらに直交しているものもある。

〈出土遺物〉 票囲式・国分寺下層式・表杉ノ入式の土師器（坏・甕）・須恵器（坏・壺・甕）青磁・本製独楽（こま）・竹製笛・曲物容器・各種木器・植物遺存体（木の枝および葉・竹・種子）等が出土している。

第Ⅰ区北側　他の地区に較べ幾分低く、現在水田として利用されている部分を対象として、遺構確認のための試掘調査を行なった。その結果、遺物包含層・溝状遺構の存在が明らかとなった。遺物としては土師器・須恵器の他に中世陶器が出土した。

第Ⅱ区　第2次調査区の北側を対象として発掘を行なった。その結果、竪穴住居跡35軒・土壙4基・井戸跡1基・多数の溝状遺構が発見された。

〈竪穴住居跡〉 平面形は一辺約5.0～7.0mの方形を基調としている。狭い範囲に密集しているため、重複しているものが多い。したがって、全体の形が残っているものは少ない。保存の良いものには付設されたカマドが残っていた。カマドには粘土だけで構築しているものと、粘土担と石の両者で構築しているものがある。後者には円礫と凝灰岩切石の場合がある。

〈土壙〉 平面形は正方形・長万形・円形と多様であるが、規模は長軸約0.6～0.8mである。堆積土には焼土を多量に含むものと、地山と類似した土のブロックを含むものがある。

〈井戸跡〉掘り方の平面形は楕円形（長軸約4.9m・短軸約4.2m）で、平面形は上部が逆台形、下部が長万形である。深さ1.5mを越えると、湧水が著しく、完掘できなかった。内部から井戸側は検出されなかった。

〈溝状遺構〉規模・形態とも多様であるが、いずれも竪穴住居跡より新しい。

〈出土遺物〉住社式・栗囲式・国分寺下層式・表杉ノ入式の土師器（坏・甕・甑）・須恵器〈坏・高坏・蓋・甕〉・土錘・土玉・土製勾玉・砥石・石製模造品（剣・有孔円板）・鉄製品、（刀子・鎌・鏃）等が出土している。

3. まとめ

1. 竪穴住居跡が新たに42軒発見された。第1次・第2次調査で発見されたものとあわせる84軒になり、清水遺跡が大規模な遺跡であることが明らかとなった。

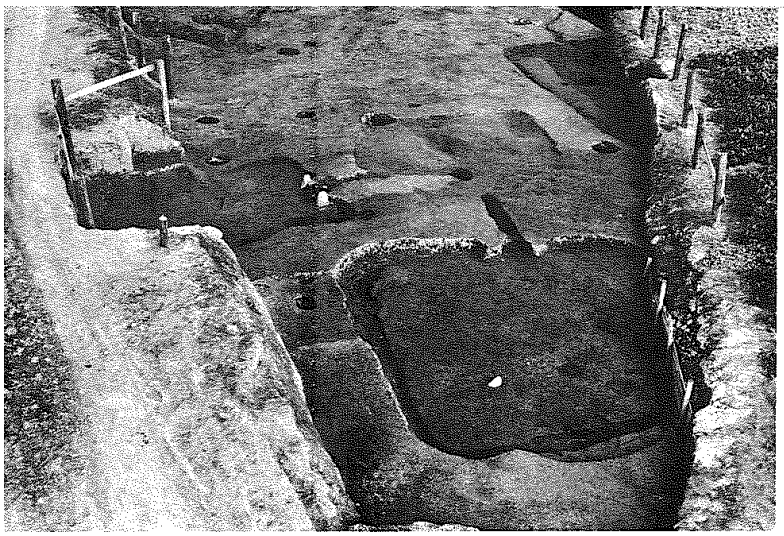
2. 出土遺物によって、今回の調査区は古墳時代後期から平安時代（一部中世）におよぶものであることが判明した。

3. 土器類の他に農具・漁具・笛・独楽（こま）等、当時の生活を知る上で貴重な資料が発見された。

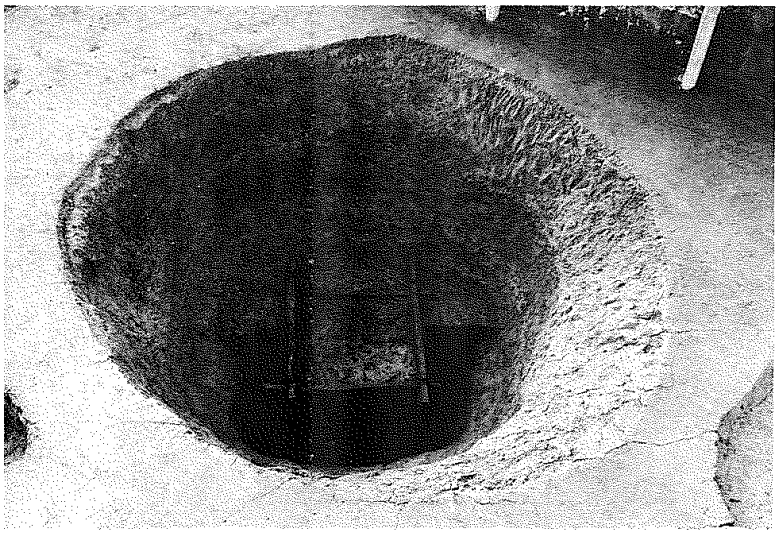
参考文献　宮城県教育委員会（1975）：「宮城県文化財発掘調査路報（昭和48・49年度分）ー清水遺跡ー」『宮城県文化財調査報告書』第40集

宮城県教育委員会（1976）：「宮城県文化財発掘調査略報（昭和50年度分）ー清水遺跡（第2次調査）ー」『宮城県文化財調査報告書』42集

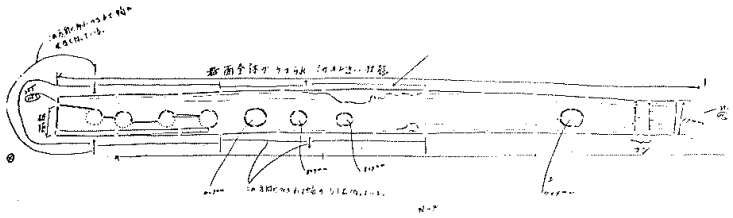
清水遺跡第Ⅱ区住居跡群



第Ⅰ区住居跡群

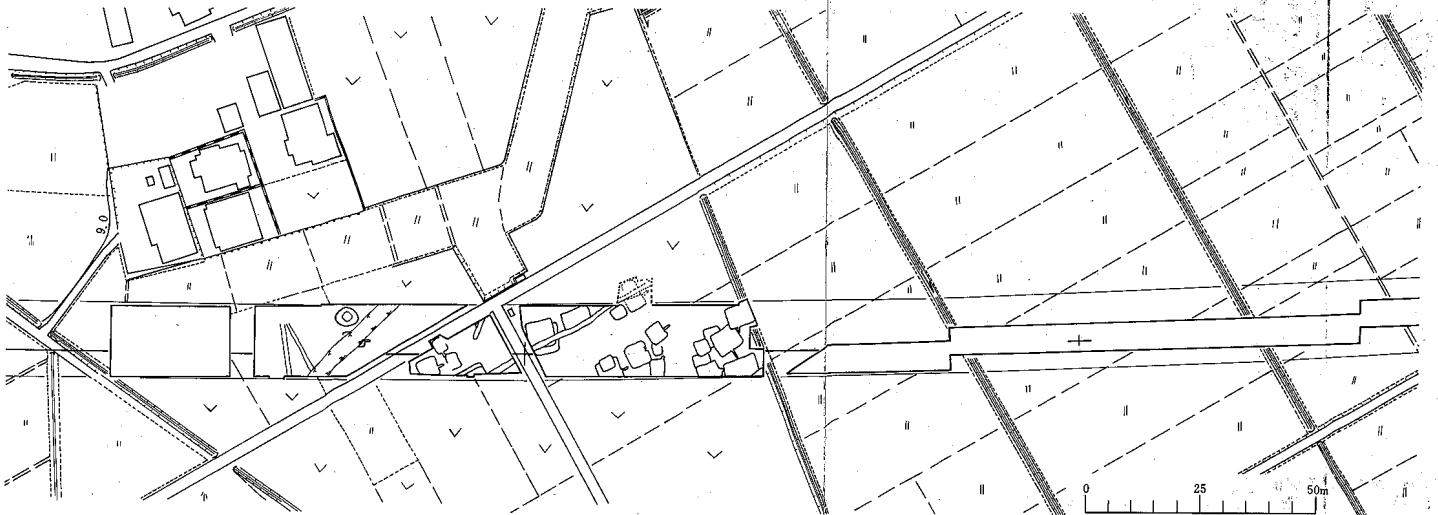


第31土壙（井戸跡）



井戸跡出土竹製笛

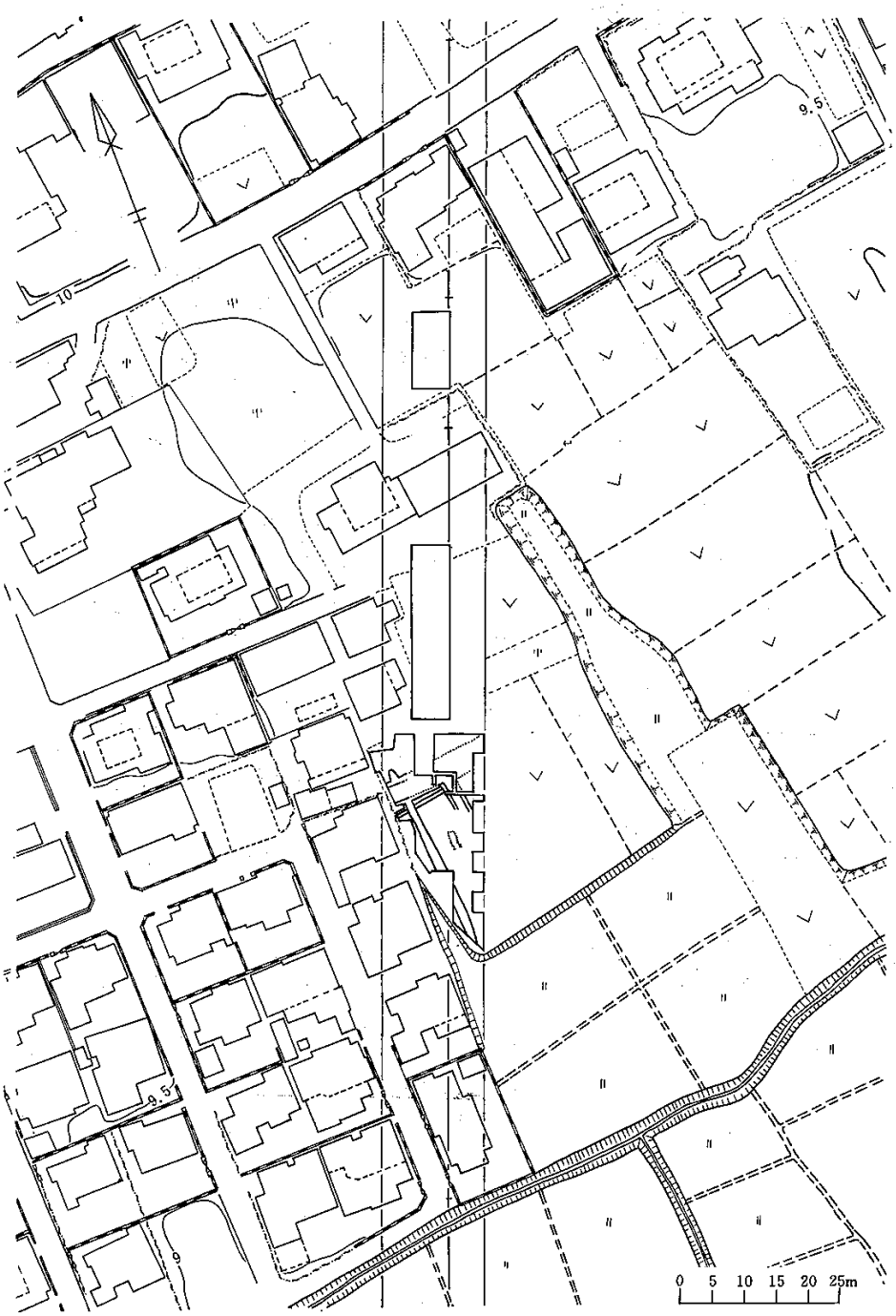
9.0
9.0


9.0
0
25
50m

(3) 安久東遺跡（あん きゅうひがし）

ー第２次調査ー

遺跡所在地：仙台市中田字安久東
調 査 期 間：昭和51年12月7日～昭和51年12月16日
調 査 面 積：1,680m^2
発 掘 面 積：　234m^2
遺 跡 記 号：ＡＴ
遺 跡 番 号：01037
協 力 機 関：仙台市教育委員会



第11図　安久東遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

安久棄遺跡は、東北本線南仙台駅の西約0.1㎞に位置する。奥羽山脈に源を発する名取川によって形成された沖積平野の標高約9mの微高地（自然提防）上に立地している。遺跡の現状は宅地と畑地である。周辺には安久遺跡、栗遺跡、大野田遺跡、清水貴跡など立地の類似した遺跡がある。また、伊豆野権現古墳･安久諏訪古墳、上古川古墳などの古墳もある。

2. 調査の概要

昭和47年度の第1次調査では、路線敷内に7世紀後半と考えられる古墳の石室1基と古代･中世と考えられる溝状遺構などが検出されている。また、昭和50年度に仙台市教育委員会が第1次調査区の東側を調査し、古代の集落跡や墳墓群などを確認している。以上のことから路線敷内に遺構の広がりが予想されていた。第1次調査の際地上物件未撤去で調査不能な部分があったが、今年になって路線敷全域の調査が可能になった。そこで第2次調査を実施することにした。

第1次調査担当者立会いの上、第1次調査区の北側、中心杭316㎞付近の路線敷内に6×27mと6×12mの南北に長い調査区を設け234m^{2}を発掘した。表土剥離作業まで行なったが、厳寒期を迎えたので、途中で作業を中止しなければならなくなった。出土遺物は、土師器片数点である。

3. まとめ

今回の調査は、表土剥離の段階までである。表土中から土師器片数点が出土した。このことと本遺跡の立地から考えて、次回の調査では遺構の検出が予想される。

参考文献：宮城県教育委員会（1972）：「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書ー安久東遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第27集

伊東信雄（1975）：「安久遺跡発掘調査略報」

仙台市教育委員会（1976）：「安久東遺跡発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第10集

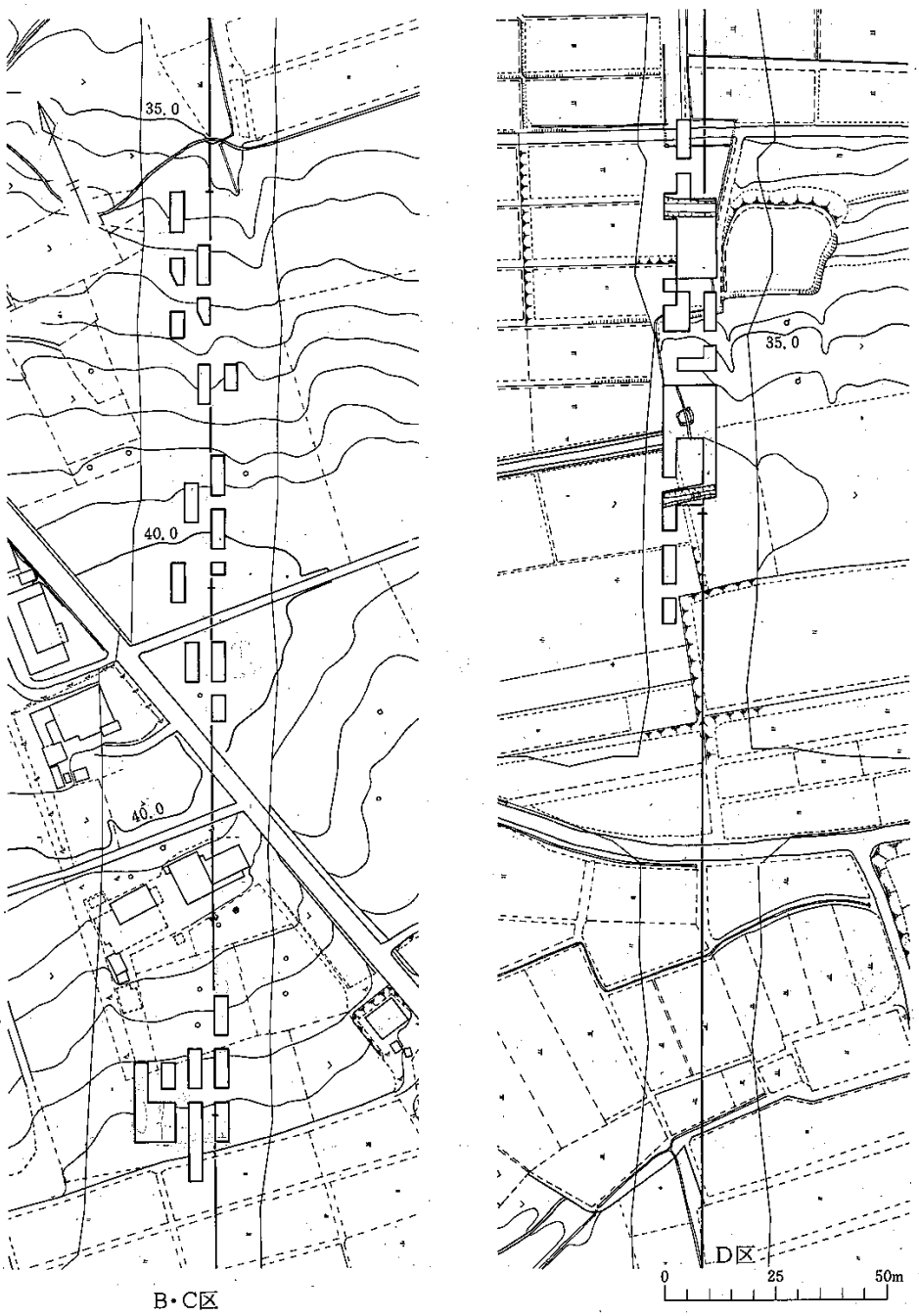
安久東遺跡全景
（北側から）

溝状遺構

古墳石室

(4) 中ノ茎（なかくき）Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡

遺跡所在地：栗原郡高清水町中ノ茎
調 査 期 間：昭和51年4月12日～昭和51年4月30
調 査 面 積：約4,000m^2
発 掘 面 積：約1,200m^2
　　中ノ茎Ｂ　288m^2
　　中ノ茎Ｃ　338m^2
　　中ノ茎Ｄ　574m^2
遺 跡 記 号：中ノ茎Ｂ－ＢＣ、中ノ茎Ｃ－ＣＤ、中ノ茎Ｄ－ＣＥ
遺 跡 番 号：44018
協 力 機 関：高清水町教育委員会



第12図　中ノ茎B・C・D遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

中ノ茎遺跡は、高清水町中ノ茎にあり、高清水町の中心部（役場）の南約2㎞に位置する。奥羽山脈から派生する築館丘陵は東に樹枝状に延び多数の台地を形成している。本遺跡はこれら台地の一つ、高清水中ノ茎地区を中心に広がるなだらかな台地上に立地している。遺跡北側のＤ地区に仰返（のけがえ）り地蔵前遺跡･0.7㎞北に観音沢遺跡、1.8㎞北に東館遺跡がある。

2. 調査の概要

本遺跡は昭和48年度に第Ⅰ次調査が行なわれた（宮城県教委:1974－中ノ茎Ａ遺跡）。今回の調査は一次調査区の北側Ｂ・Ｃ・Ｄの3地区約4,000m^2を対象に、約1,200m^2を発掘した。各地区で発見された遺構と遺物の概略は次のとおりである。

Ｂ地区　縄文土器と土師器の破片が若干出土した。遺構は検出されなかった。

Ｃ地区　土師器･須恵器片などが出土したが、Ｂ地区同様、遺構は検出されなかった。

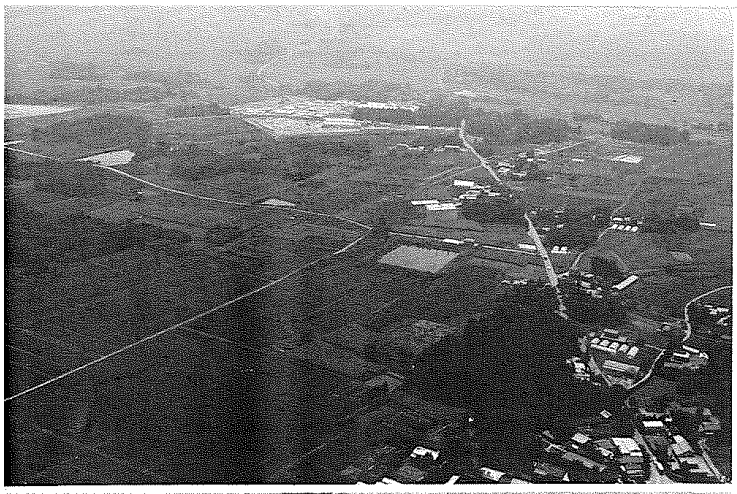
Ｄ地区　調査区ほぼ中央部の地山面で方形周溝状遺構が発見された。平面形は約3.5×3.5ｍの隅丸方形である。南北に走る後世の溝に切られている。周溝の4隅の部分に各1個のピットがある。そのうちの2個に柱痕跡を確認した。ピットの形態･規模･堆積土に類似点が認められ、その配置に規則性が認められる。このことから、これらのピットは柱穴の可能性が強い。溝にかこまれた方形の部分は、削平されていている。溝の部分と一体となった上部構造をもつ何らかの建物跡と推定されるが、その詳細については不明である。溝の中から土師器と須恵器が出土した。

また、調査区南側と北側から溝が発見された。南側の溝は、幅約2.8m深さ1～1.2m底幅0.9m～1.4m断面「Ｖ」字形である。北側の溝は、幅約3.4m深さ0.8～1m底幅1.8～2m断面「Ｕ」字形である。堆積上中から土師器･須恵器･中世陶器片が出土した。

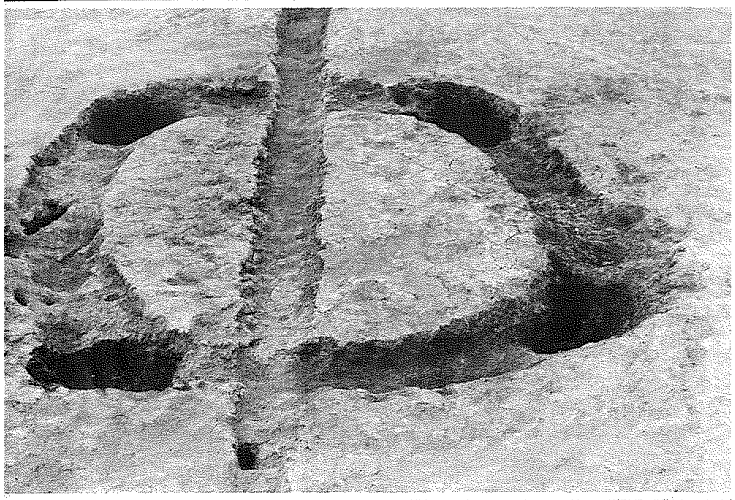
3. まとめ

本遺跡は、これまで縄文時代から中世にかけて営まれた集落跡と考えられていた。今回の調査の結果、方形周溝状遺構や溝跡が発見された。これらの遺構に伴う遺物の出土と遺跡の立地条件から、集落の広がりは路線外に延びていると考えられる。

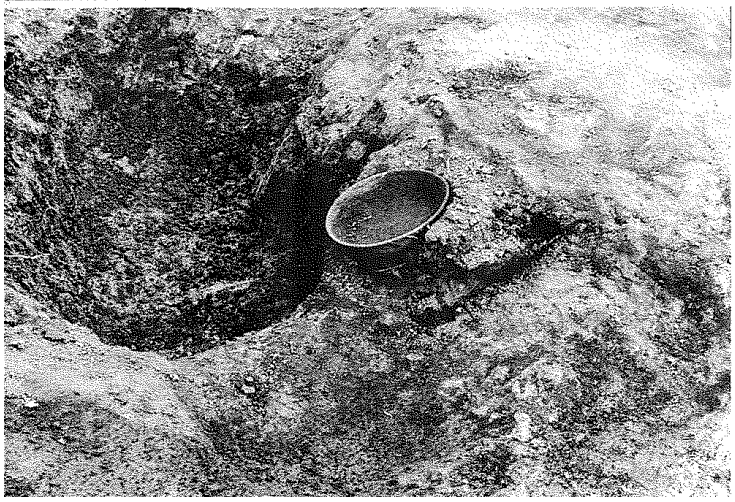
参考文献：宮城県教育委員会（1972）：「東北新幹線関係分布調査報告書－中ノ茎Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ－遺跡－」
『宮城県文化財調査報告書』第27集
宮城県教育委員会（1974）：「東北新幹線関係遺跡調査報告書－中ノ茎Ａ遺跡－」宮城県文化財調査報告書第35集



中ノ茎遺跡遠景
（北方上空から）



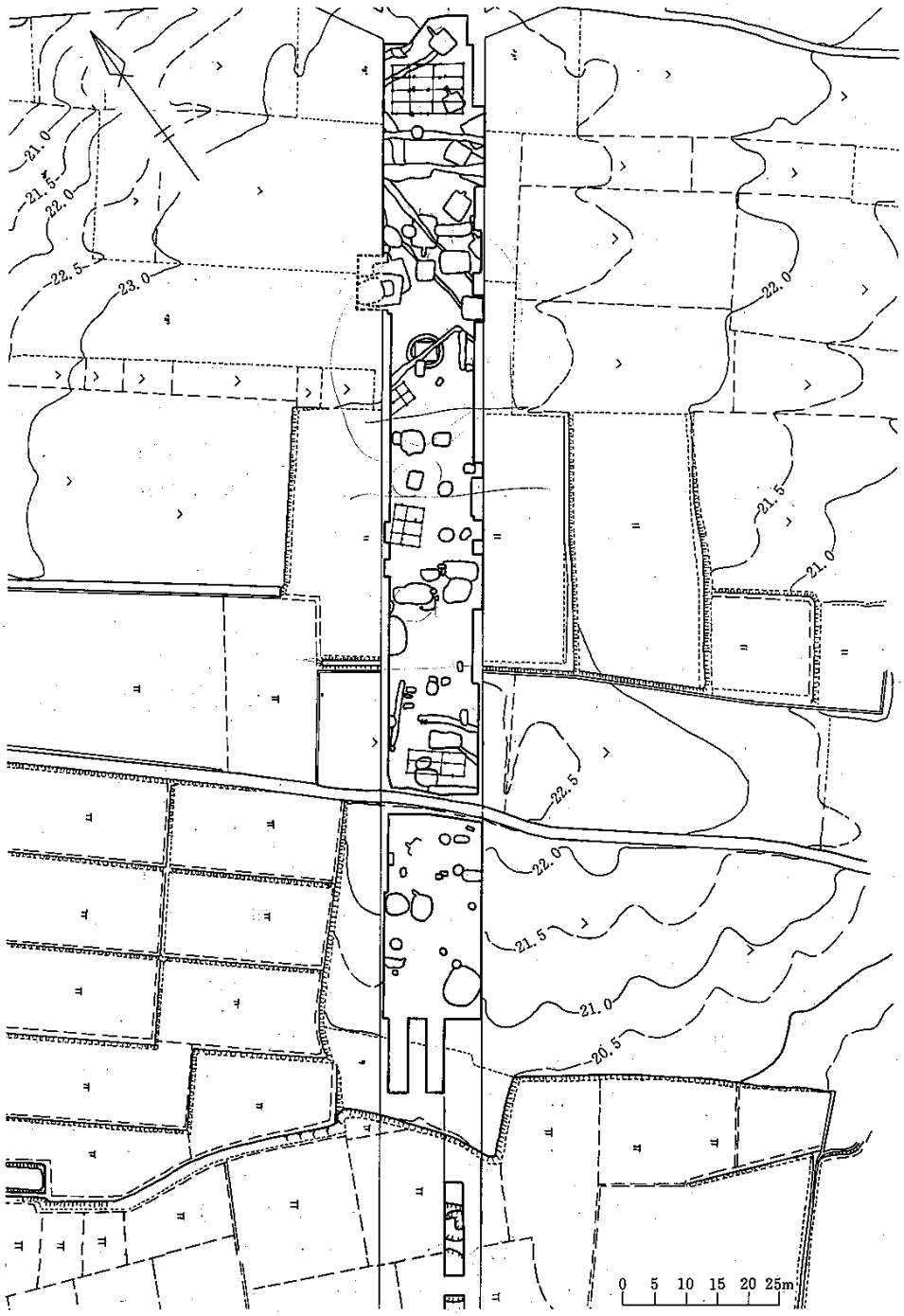
方形周溝状遺構



方形周溝状遺構
遺物出土状況

(5) 観音沢遺跡（かんのんざわ）

遺跡所在地：栗原郡高清水町観音沢
調査期間：昭和51年7月22日～昭和51年12月17日
調査面積：約6,300m^2
発掘面積：約2,650m^2
遺跡記号：ＣＦ
遺跡番号：44019
協力機関：高清水町教育委員会
協　力　者：佐藤　　戍（仙台市上杉通小学校教諭）
鈴木惣之助（多賀城市立多賀城小学校教諭）
加藤　貞子（仙台市立西多賀小学校教諭）
土岐山　毅（仙台市北六番丁小学校教諭）
後藤　幸雄（気仙沼市立浦島小学校教諭）
森　　貢喜（河南町立谷地小学校教諭）



第13図　観音沢遺跡遺構配置図

1. 遺跡の文地

観音沢遺跡は高清水町の中心部（役場）の南東約1.5㎞に位置する。築館丘陵は本町東南部では樹枝状になって緩かな台地を形成している。本遺構はそれら台地の1つ、標高約22mの部分に立地する。遺跡の現状は畑地と水田である。

2. 調査の概要

今回の調査は、路線敷内の台地・南斜面・沢の部分約6,300m^{2}を対象に約2,600m^{2}を発掘した。その結果、台地中央部から南斜面にかけて、古墳時代・中世の遺構と遺物を発見した。

古墳時代の遺構と遺物

〈竪穴住居跡〉15軒検出された。路線敷は幅16mと狭く、全体を明らかにできた住居跡は8軒である。平面形は一辺3～4mの方形を基調とする。住居跡の壁に粘土で構築されたカマドが付設され、煙道が壁外に延びている。カマド周辺の床面で土師器がまとまって出土することが多い。これらの土師器は古墳時代後半に属するもので、なかには坏・壺・長胴甕・甑がセットになって発見された住居跡もある。

〈円形周溝〉住居跡と重複している。溝底面から古墳時代後半の土師器が出土した。

中世の遺構と遺物

〈掘立柱建物跡〉東西約11.3×南北約7.9m・東西約4.6×南北約6.4m・東西約9.2×南北約3.7mの3棟と路線外に延び規模の不明な1棟の計4棟が検出された。柱穴から中世陶器が出土した。

〈土倉跡〉2基発見された。平面形は約3.7×2.8mの方形基調で、深さ約1mの竪穴である。壁の一部が階段になっており、入口と考えられる。床面から中世陶器・青磁・宋銭等が出土した。

〈井戸跡〉5基発見された。完掘したものは2基である。いずれも素掘りで、深さは約4～5mである。このうちの一基から曲物容器（完形品2点と破片）・中世陶器・青磁等が出土した。

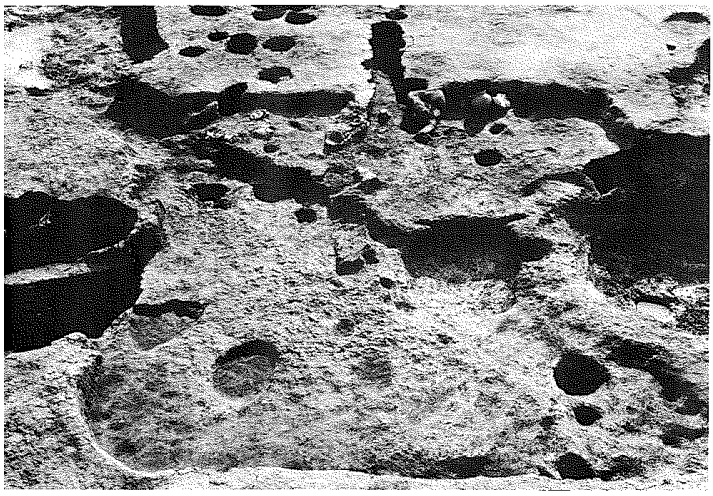
〈土壙〉約100基が検出された。平面形には、円形基調と方形基調の二つのタイプがあり、その規模はさまままである。これらの土壙の中から中世陶器・青磁・宋銭などが出土した。

〈溝〉数条の溝が検出された。これら溝の中から中世陶器・青磁片などが出土した。

3. まとめ

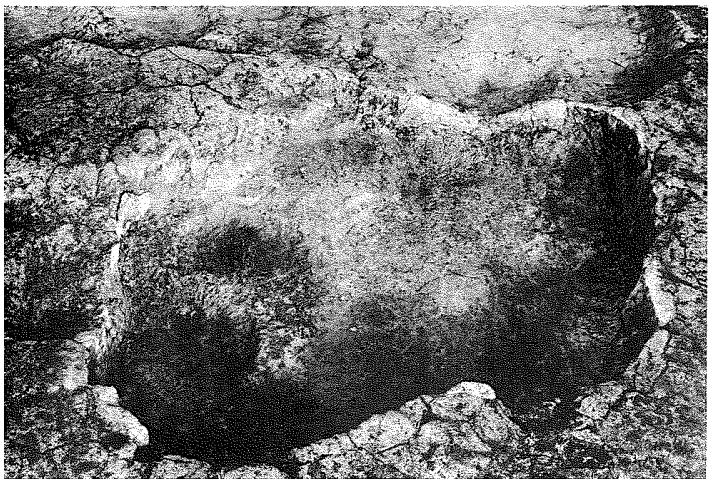
1. 県北の古墳時代後半に属する集落跡については、これまで不明確であった。今回の観音沢遺跡調査の成果は、その空白部分を埋めるものとして注目される。
2. 中世の遺構は、出土した中世陶器などの特徴から鎌倉時代後半と考えられる。
3. 県内の館跡以外の遺跡で中世の遺構群が検出されたのは、本遺跡が初めてである。
4. 南側の斜面と沢の部分から溝状遺構が検出され、中世陶器等が出土しているが、厳寒期を迎えたので調査を中断した。

遠景(西方上空から)



第11住居跡

(北から)

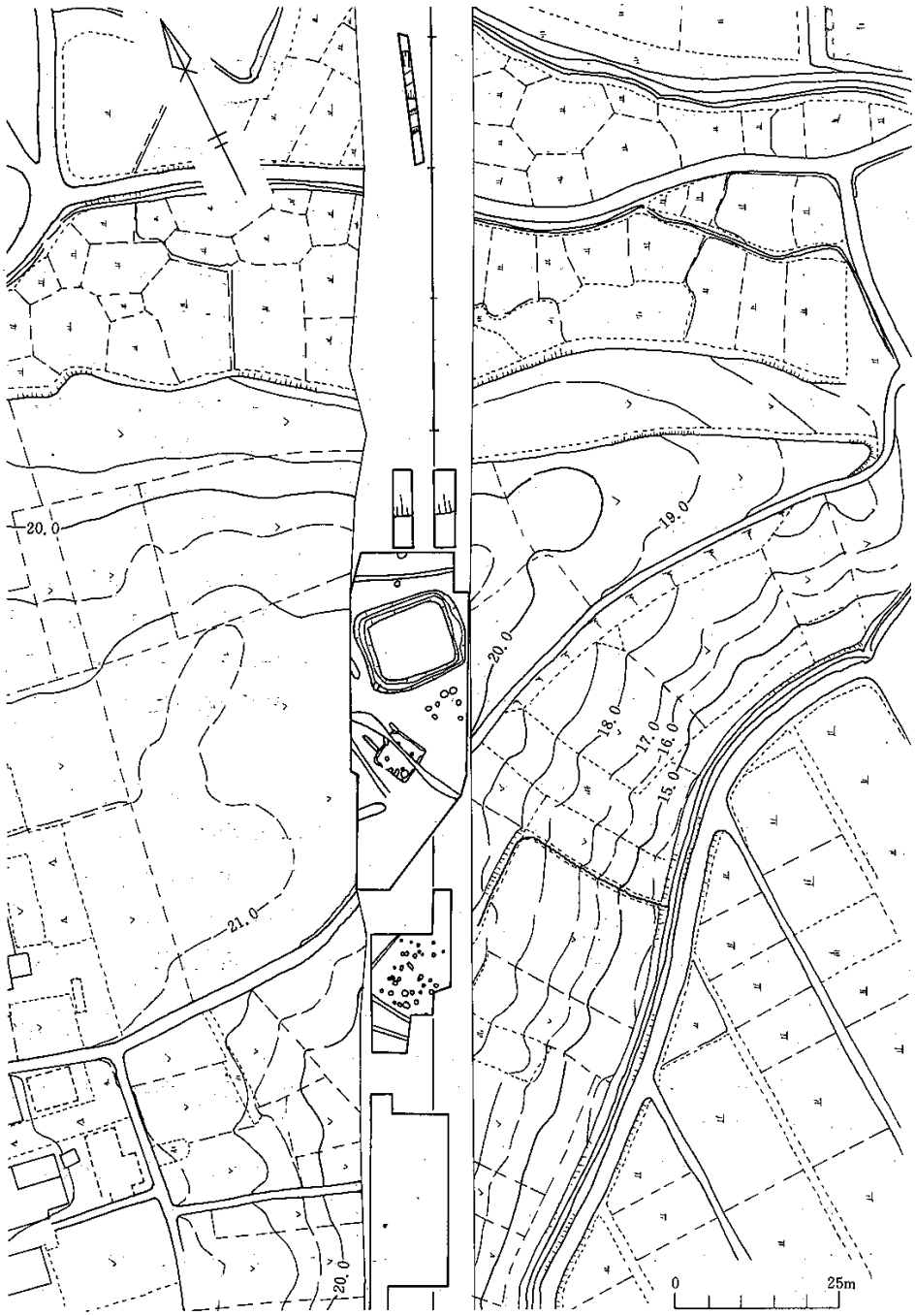


第59土壙

(土倉跡)

(6) 東（ひがし）館（だて）遺　跡

遺跡所在地：栗原郡高清水町東館字天神裏
調 査 期 間：昭和51年5月6日～昭和51年7月21日
調 査 面 積：3,740m^2
発 掘 面 積：1,900m^2
遺 跡 記 号：ＣＧ
遺 跡 番 号：44017
協 力 機 関：高清水町教育委員会



第14図　東館遺跡遺構配置図

1. 遺跡の位置と立地

東館遺跡は陸前高清水駅の南東約1km、県道高清水ー瀬峯線の南側に位置している。奥羽山脈から派生する築館丘陵は高清水町の東部で樹枝状のなだらかな台地となる。これらの台地上には縄文時代から近世までの多くの遺跡がある。本遺跡は台地東端の標高約20mの斜面畑地に立地する。周囲の水田画との比高は約5mである。

2. 調査の概要

調査は路線敷にかかる約3,740m^{2}を対象に行ない、約1,900m^{2}を発掘した。その結果、方形周溝墓1基、竪穴住居跡1軒、堀状遺構4本、溝状遺構数本、遺物包含層を発見した。

〈方形周溝墓〉溝部と台状部からなる古漬は東西約15×南北13mの長方形で全周する。幅約1.8m、深さ約1.2m、断面「U」字形である。北西隅で幅約2.5m、南西隅で幅1.0mと広狭部分がある。台状部はほぼ平坦であるが、耕作等でかなり削平されている。主体部施設は検出されなかった。溝北側中央部から土師器坏が出土した。この坩の編年的位置から方形周溝墓の時期は古墳時代前期（塩釜式期）と考えられる。

〈竪穴住居跡〉方形周溝墓の南側で発見された。1辺約6mの方形である。中央部は後世の溝によって切られている。残存壁高は約20cmである。周溝はカマド部分を除いて壁下を巡る。床面で4個の柱穴を、南西隅で径約1.0m、深さ約60cmの貯蔵穴を発見した。カマドは南壁東寄りの部分に付設されている。出土遺物から住居跡の時期は古墳時代中期（南小泉式期）と考えられる。

〈堀状遺構〉台地縁辺の水田・畑地で4本の堀状遺構を発見した。上幅約7m、広幅約1.5m深さ1～3mで底面はほぼ平らである。この中の1本は高清水城北側に現存する堀に続くと推定される。なお、これらの堀状遺構の中から土師器・須恵器片などが出土した。これらの遺物は堀状遺構の年代決定資料とは考えられず、したがって堀状遺構の年代は不明である。

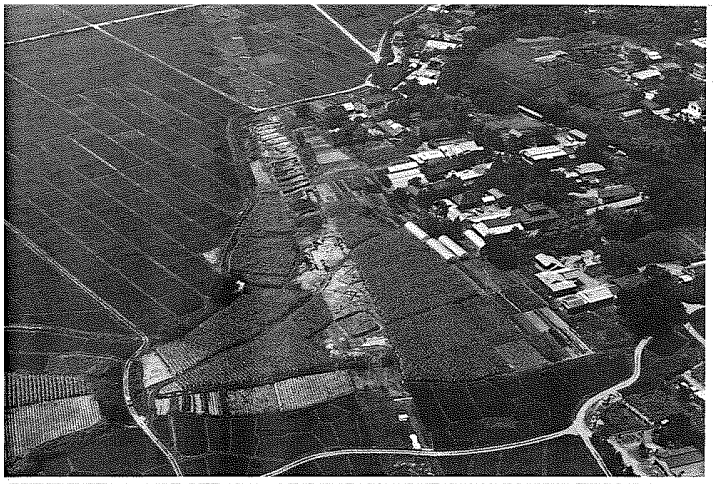
〈溝状遺構〉方形周溝墓の南と北側で、南北・東西方向に走る数本の溝を発見した。出土遺物等もなく、時期は不明である。

3. まとめ

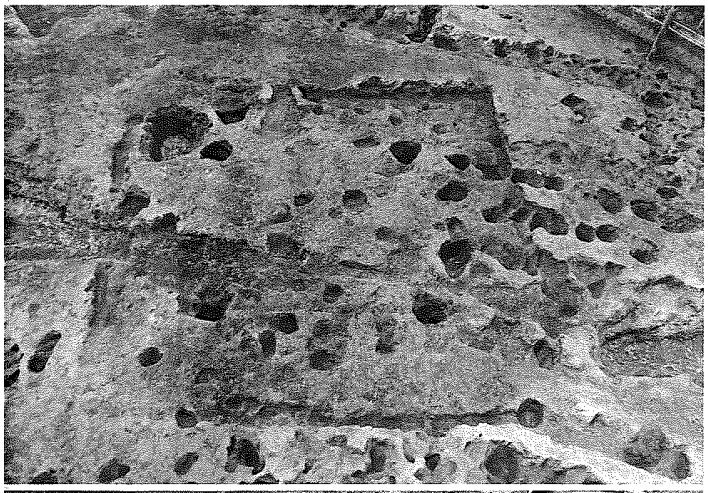
東館遺跡から方形周溝墓、竪穴住居跡が発見され、この遺跡カ沽墳時代前期から中期の集落跡であることが判った。

方形周溝墓は名取市今熊野遺跡に次ぐ、東北第2番目の発見で、現在分布の上で北限に位置し注目されている。

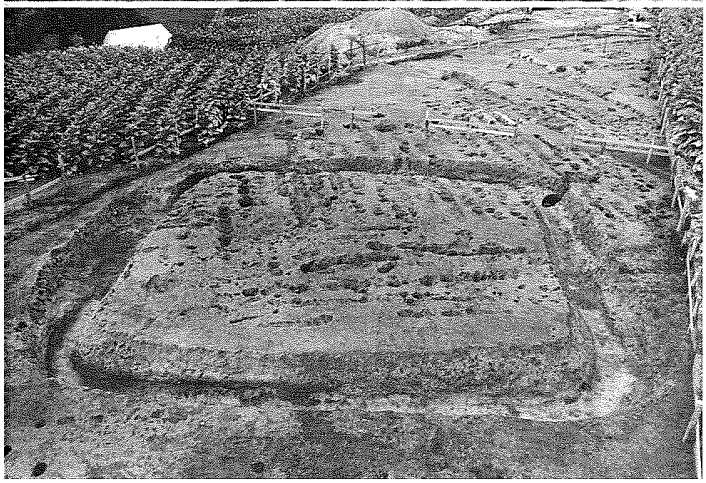
住居跡は、出土遺物から南小泉式期と考えられる。同期におけるカマド付設の住居跡として貴重な資料である。



東館遺跡遠景
（北方上空から）



第Ⅰ住居跡
（東から）



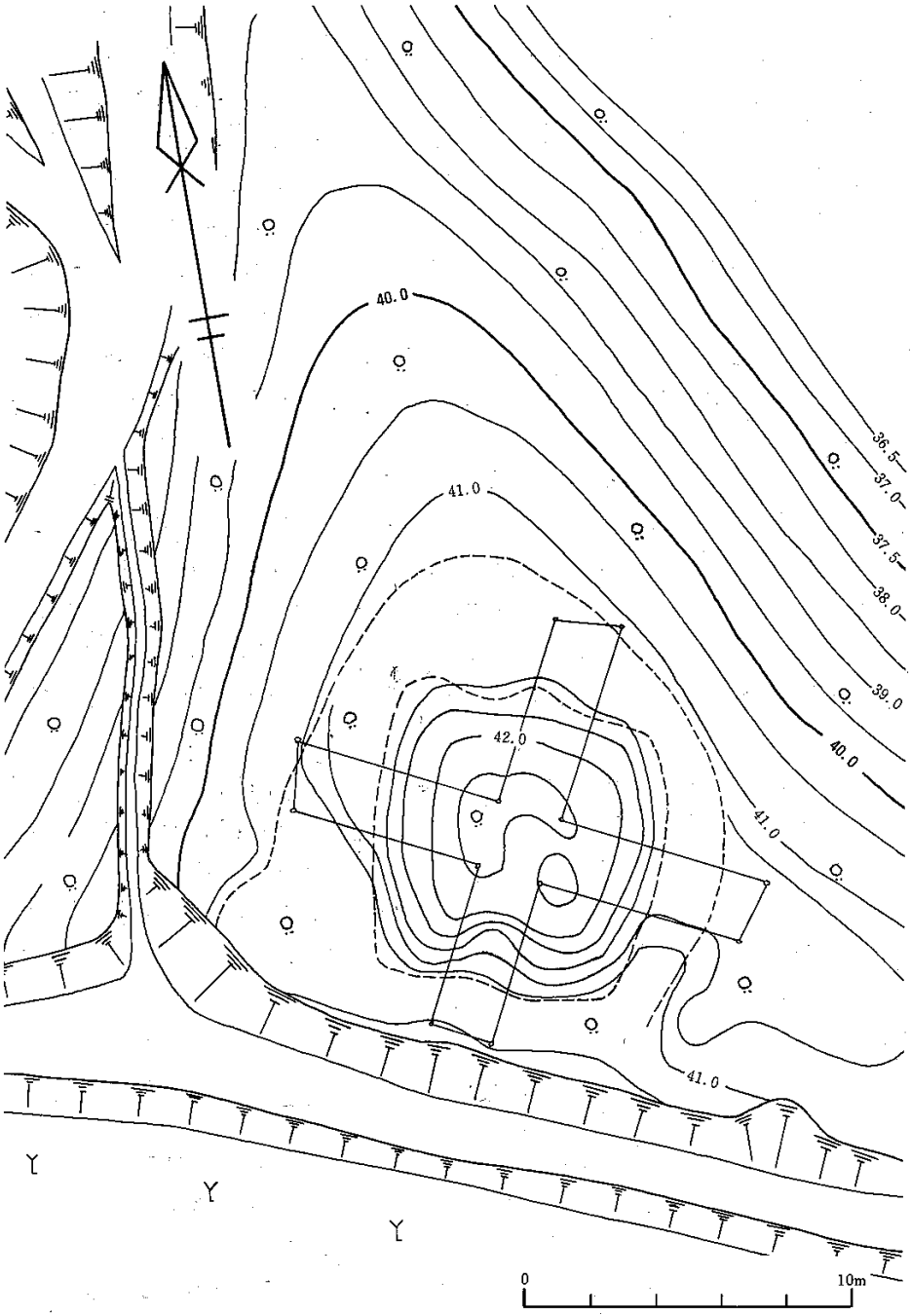
方形周溝墓
（北側から）

Ⅲ　一般開発関係遺跡

(1) 横倉大久保遺跡

（修正壇）

遺跡所在地：角田市横倉大久保
調査主体：角田市教育委員会
調査担当：宮城県教育委員会文化財保護課
調査期日：昭和51年1月28・29日
調査面積：225m^2
発掘面積：56m^2
遺跡番号：03113



第15図　横倉大久保遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

横倉大久保遺跡は、国鉄丸森線角田駅の西北西約1.5㎞に位置する。角田市の西側には、砂岩および砂岩質凝灰岩を基盤とする標高200m前後の角田丘陵がある。この丘陵が阿武隈川等の形成した沖積平野に接する部分では、標高40m前後のなだらかな樹枝状に発達した小丘陵となっている。本遺跡は、これら小丘陵の1つで、阿武隈川に東面しており、尾根が三方より集まる頂部に立地する。現状は雑木林である。本遺跡周辺には、打越、明か崎、南光院、老ヶ崎などの遺物包含地、横倉･長泉寺古墳群、横倉横穴古墳群などが所在し、遺跡の分布が密な地域である。

2. 調査の概要

市道金谷一戸の内線は、角田市の単独事業として計画された。ところが、施行段階になって本遺跡がこの市道法線内に含まれることが判った。そこで、今回緊急に発掘調査を実施し、記録による保存を計ることになったものである。

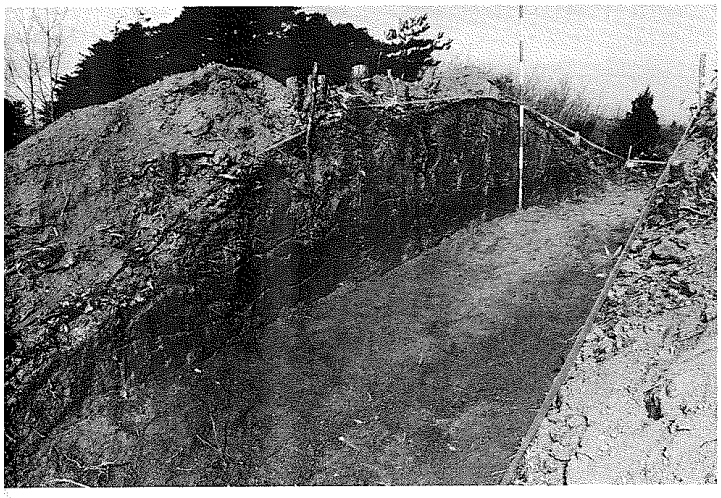
調査の対象は、東西約7.5×南北約8.5m、高さ約2m、まわりに幅2～4m、深さ約20㎝の溝をめぐらす塚である。塚の頂部は平坦になっている。この塚の頂部中央で直交する幅約2m、長さ約15mの十字のトレンチを設定し、計56m^{2}を発掘した。その結果、塚中央部で4層の堆積土を確認した。第1層は腐葉土を主体とした表土層。第2層は暗褐色シルトに黄色砂粒を多量に含む層。第3層は暗褐色シルト層。第4層は黄色砂層である。第3層は旧表土層であり、第2層は盛土層である。塚の中央部で旧表土上面から掘り込まれた約70×25㎝（長軸方向北東）、深さ約10㎝のピットが発見された。このピットから焼骨片、炭化米塊、古銭が出土した。4枚土した古銭のうちの2枚は、皇宗通宝（初鋳1039年－北宋）、致和天宝（初鋳1054年－北宋）であるが、他の2枚は判読できなかった。溝の部分からは出土遺物がなかった。古銭の年代から本塚は、中世以降に構築された可能性が強いと考えられる。県内で類似の遺構が発見された遺跡は、想海塚（宮城町）、日光山遺跡（大和町）、宮の脇遺跡（高清水町）、権現山遺跡（白石市）、清水側遺跡（古川市）である。

3. まとめ

今回の調査で、本遺跡は火葬骨を埋葬し炭化米と古銭を副葬した塚と考えられる。塚の造営年代は出土した古銭の年代から、中世以降と考えられる。類似の遺構は、本遺跡の他に5遺跡知られているが、その1性格は十分に明らかにされていない。

参考文献：宮城県教育委員会（1973）：「権現山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第31集
宮城県教育委員会（1975）：「宮城県文化財発掘調査略報略報（昭和48・49年度分）－宮ノ脇遺跡－」「宮城県文化財調査報告書」第40集
宮城県教育委員会（1973）：「宮城町想海塚発掘報告」『宮城町文化財調査報告書』第1集
宮城県教育委員会（1977）：「清水側遺跡」宮城県文化財調査報告書」第50集

横倉大久保遺跡近景

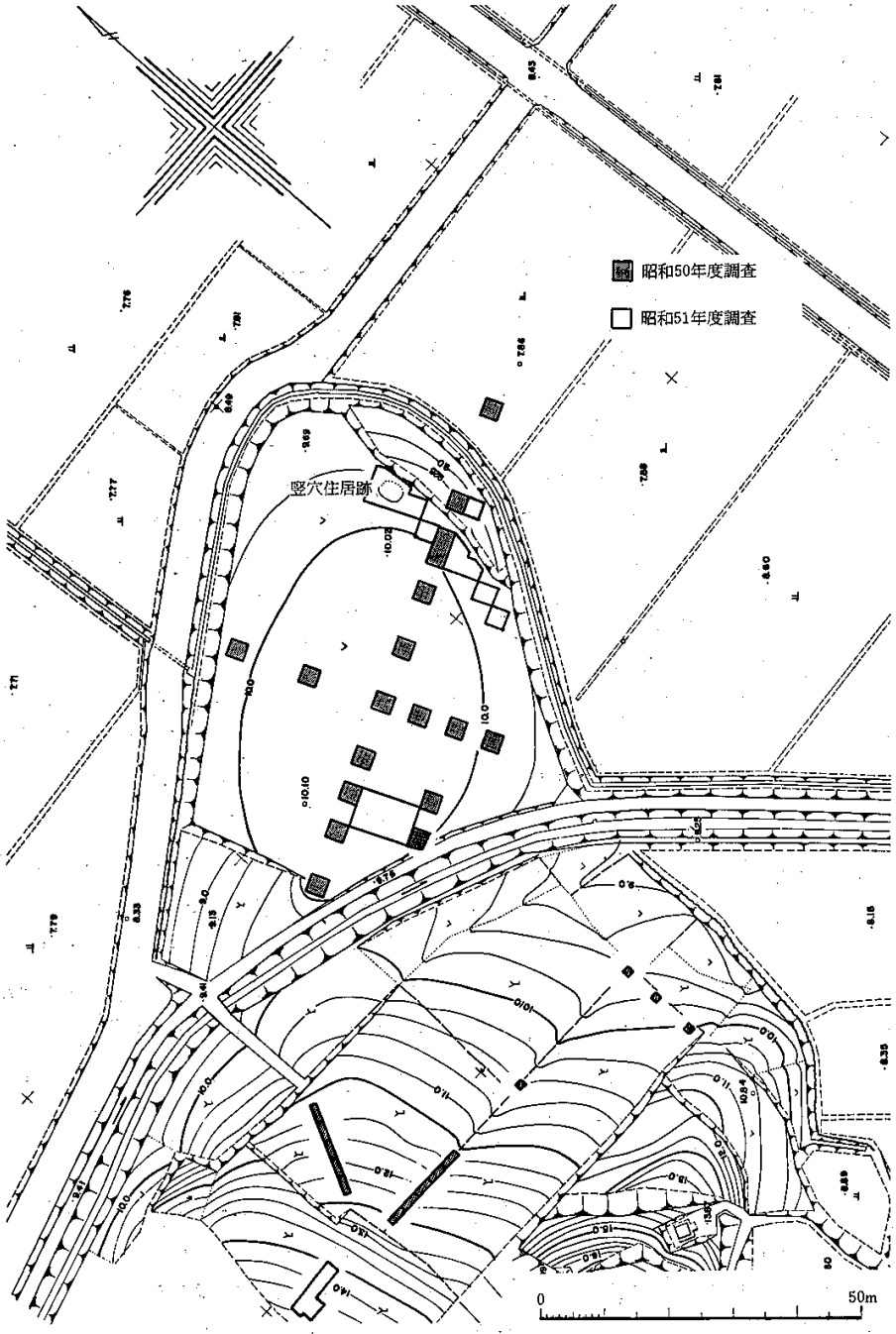


塚断面

出土遺物
（古銭と炭化米塊）

(2) 梁瀬浦（やなせうら）遺跡

遺跡所在地：角田市岡字梁瀬浦
調 査 主 体：角田市教育委員会
調査担当者：宮城県教育教庁文化財保護課
調 査 期 間：昭和51年4月12日～昭和51年4月27日
調 査 面 積：約10,000m^2
発 掘 面 積：177m^2
遺 跡 記 号：ＤＴ
遺 跡 番 号：03061



第16図　梁瀬浦遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

梁瀬浦遺跡は角田市の北東部、角田市岡字梁瀬浦7に所在する。遺跡は、阿武隈山地へ連なる角田丘陵から樹枝状に延びる小丘陵のうちの一つ、高倉から花島へ延びる丘陵から、梁瀬付近で北へ張り出した舌状台地の南東斜面及び水田部に立地している。遺跡部分における標高は約10～13mで、現在畑地及び水田として利用されている。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は、遺跡部分を削平し水田化する企画がなされたために、範囲確認･内容把握を目的としたものである。既に、昭和49年12月に一部試掘調査を行ない、縄文後・晩期の遺物を多く発見した。さらに、昭和50年11月に第一次の範囲確認調査を行なっている。この調査によって、本遺跡の範囲は舌状台地部分の他に水田下へも及んでいることが明らかとなった。

台地縁辺部には、縄文中期･および晩期の墓墳が･極めて高い密度で群集している。また、縄文晩期の遺物包含層が、三地点において確認され、一部の包含層は、縄文後期の遺物を包みながら水田下に移行していた。遺物包含層は、最も厚い部分で3m近くにも達し、遺物量も多くことに、層中にシカ･イノシシの骨など自然遺物を含んでいることが注目された。また、出土土器は、晩期中葉～末葉にかけてのものが圧倒的で、この期の文化内容を伺ううえで好資料となった。

今回の調査は、上記のような調査経過、内容をふまえて、1. 住居地域の確認、2. 墓墳群の範囲の確認、3. 第一次確認調査で得られた縄文晩期大洞C_2式と大洞A式とをつなぐ土器群を含む包含層の調査、4. 予備調査で得られた縄文後期の土器を含む包含層の調査の調査を目的として実施した。

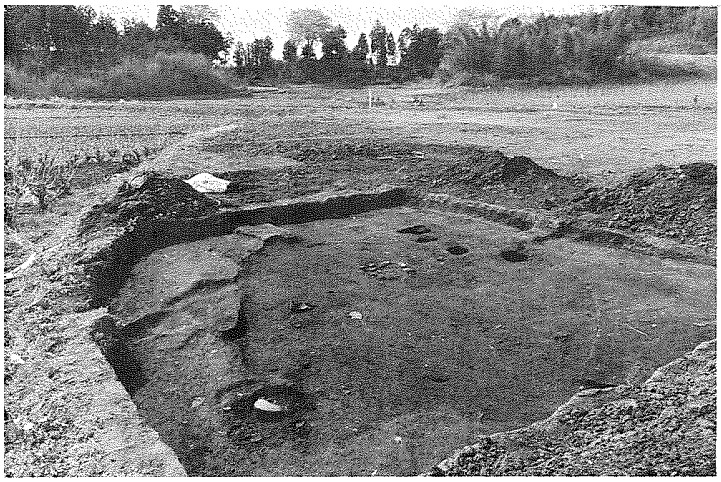
その結集、まず台地突端部で、縄文後期中葉の竪穴住居跡を発見した。住居跡は長径4mほどの楕円形である。柱穴等は確認できなかったが、中央部に、河原石を円形に組んだ炉をもつものであった。墓墳群は調査日程上、その範囲の確定はできなかったが、やはり台地縁辺部において、あらたに10基前後の墓壙を確認した。さらに、大洞C_2式～木洞A式期の包含層の調査によって、多くの資料が追加され、この期の研究に興味ある問題を提起することができる。また、縄文後期の包含層は、台地中央部に寄った部分で発見された。後期初頭・中葉の遺物を多く含み、その下には、縄文中期末の包含層も確認されている。

3. まとめ

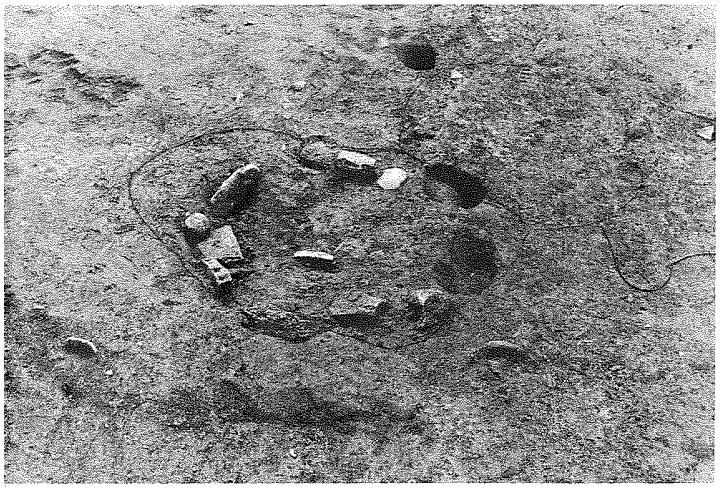
上記のような三次にわたる調査によって、本遺跡は、縄文中期から晩期を主体とする集落跡であり、その中に同期の包含層、墓域を含む遺跡であることが明らかになった。

なお、本遺跡は昭和 51 年 12 月、文化財保護課審議委員会より、国指定史跡の答申を受けている。

参考文献：角田市教育委員会（1976）：「梁瀬浦遺跡」『宮城県角田市文化財調査報告』第１集



梁瀬浦遺跡住居跡

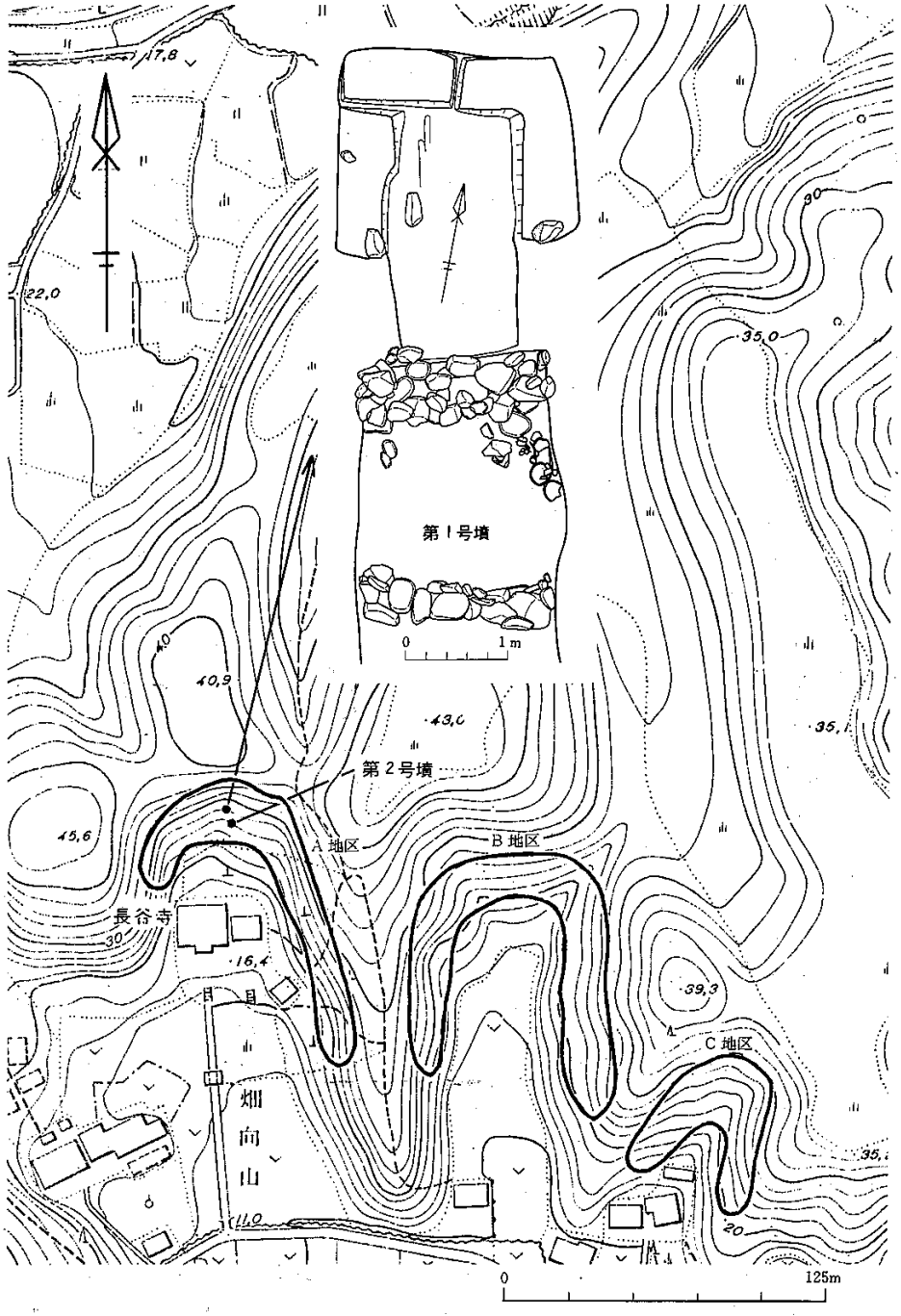


住居跡内炉跡

遺物出土状況

(3) 長谷寺横穴古墳群（ちょうこくじ）

遺跡所在地：岩沼市北長谷
調 査 主 体：岩沼市教育委員会
調査担当者：宮城県教育委員会文化財保護課
調 査 期 日：昭和51年4月9日・10日　5月4日(3日間)
調 査 面 積：約100m^2
発 掘 面 積：約 20m^2　（横穴古墳２基）
遺 跡 記 号：ＤＵ
遺 跡 番 号：15010
調査協力者：小野　力（岩沼市文化財保護委員）



第17図　長谷寺横穴古墳群遺構配置図

1. 遺跡の立地

長谷寺横穴古墳群は東北本線岩沼駅の西約2kmに位置する。岩沼市の西側には、標高150m前後の安山岩を母岩とする高館丘陵が南北に連なっている。この丘陵が平野部と接する部分では凝灰岩を基盤としたなだらかな小丘陵となっている。これら小丘陵の中には、市街地の西側まで延びるものがあり、二木・上ヶ崎・引込・白山などの横穴古墳群の存在が知られている。本横穴古墳群は、上記の小丘陵が高館丘陵から延びるつけ根部分の南斜面縁辺部に立地する。本横穴古墳群は、分布の上からA・B・Cの3地区に分けられ、今回調査した2基の横穴古墳があると考えられている。

2. 調査の概要

昭和51年4月2日、岩沼市教育委員会より長谷寺裏の墓地造成中に横穴古墳が開口したとの連絡を受け、翌4月3日、現地調査を実施した。すでに羨道は落ち込み、玄室の天井も一部破壊されており、現状のままで保存することは不可能であることが判った。そこで、緊急に記録保存のための調査を実施することにした。

〈1号墳〉玄室・玄門・羨道の残っている横穴古墳であるが、玄門の前方部と羨道の天井は残っていない。玄室平面形は奥行約170cm、幅約200cmのほぼ方形である。玄室には左・右側壁と奥壁沿いに溝で区画された3つの台床がある。左側壁沿いの台床は長さ約140cm、幅約42～54cmの長方形である。奥壁沿いの台床は長さ約105cm・幅約50cmの長方形である。奥壁沿いの右側から右側壁沿いにある台床は、長さ約180cm、幅約50cmのL字形である。台床の高さはいずれも約15cmである。玄室立面形はドーム型である。天井は最も高い中央部で約145cmである。左側壁中段より天井部にかけて幅12～13cmのノミ痕がみられる。玄門は奥行約100cm、幅約110cmである。玄門立面形は不明である。なお、玄門と羨道の境には高さ約10cmの段が認められ、段の手前には石が積み重ねられている。羨道は長さ約400cm（残存部）、幅190～200cmである。玄門との境から約180cm前方には石が積み重ねられている。遺物は玄室内の床面から直刀羨道部左・右側壁沿いの床面から土師器（坏一栗囲式）、須恵器（甕、平瓶、聰頭瓶・壺、　）そして、刀子が出土した。

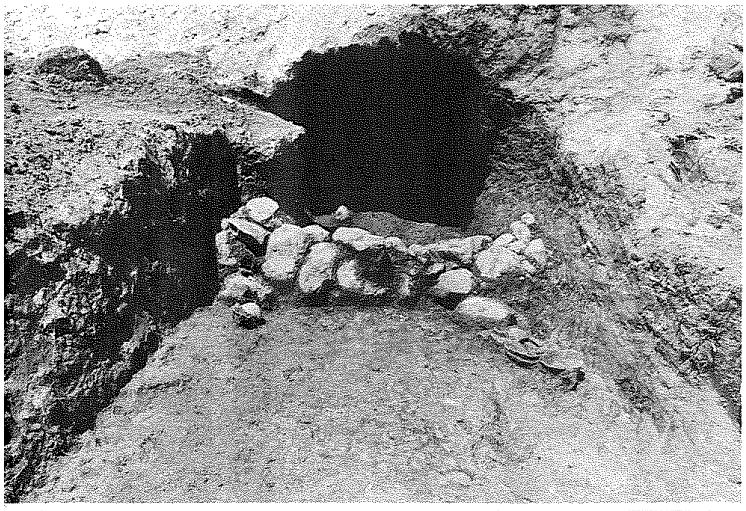
〈2号墳〉玄室の前方がこわれている横穴古墳である。残存部から玄室平面形は奥行約80cm、幅40～60cmのほぼ長方形である。玄室立面形はアーチ型である。天井までの高さは約40cmである。遺物は工事中に開口した際に須恵器長頸瓶が出土した。

3. まとめ

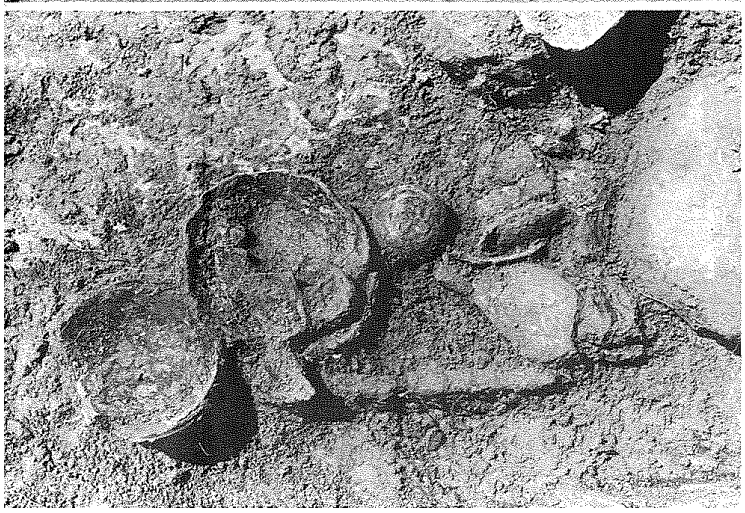
今回、2基の横穴古墳が調査された。1号墳は3つの台床をもつドーム型で、土師器・須恵器・鉄器を出土した。2号墳はドーム型をした小型の横穴古墳で、須恵器を出土した。

参考文献：佐藤宏一（1968）：「宮城県岩沼町長谷寺横穴古墳群」『仙台湾周辺の考古学的研』宮城教育大学

長谷寺横穴古墳群



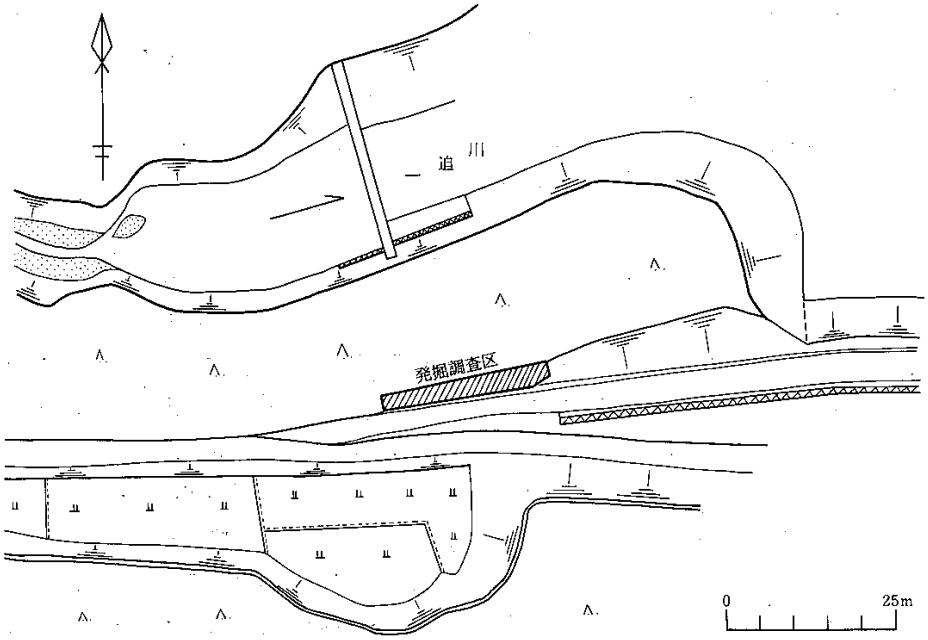
第Ⅰ横穴古墳

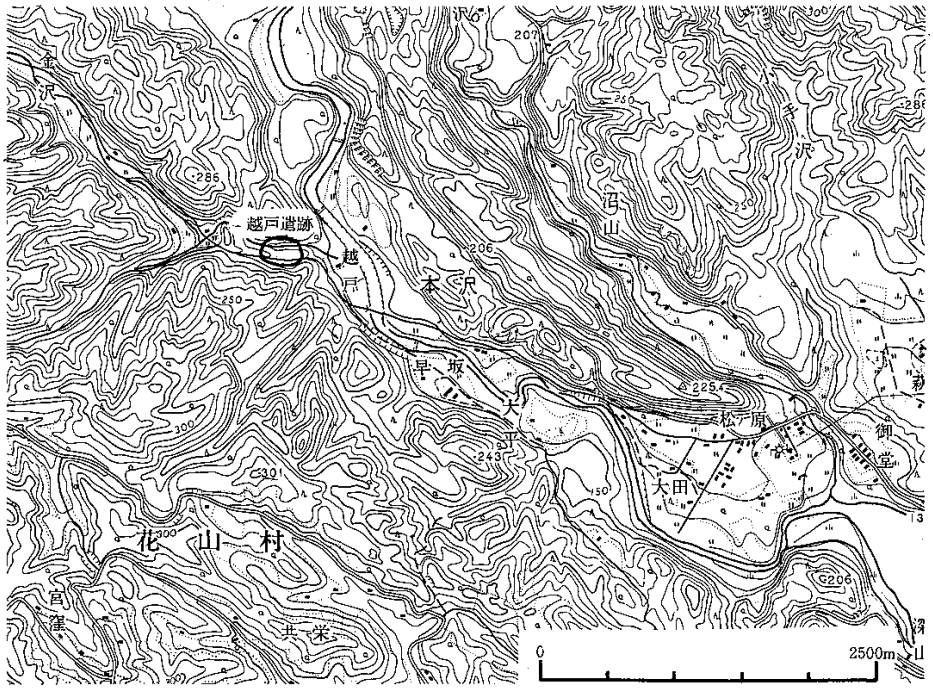


第Ⅰ横穴古墳遺物
出土状況

(4) 越戸（こえど）遺跡

遺跡所在地：栗原郡花山村本沢字早坂２の１
調 査 主 体：花山村教育委員会
調 査 担 当：花山村文化財保護委員会　猪野義章
調 査 期 間：昭和51年６月17日～昭和51年６月30日
調 査 面 積：1,200m^2
発 掘 面 積：　31.8m^2
遺 跡 番 号：50008
調 査 指 導：宮城県教育委員庁文化財保護課





第18図　越戸遺跡発掘調査区図

1. 遺跡の立地

越戸遺跡は、花山村の中心地（役場）の北西約3.5㎞、一迫川の右岸に位置する。栗駒山に源を発する一迫川は、栗原郡の西部で多くの河岸段丘を発達させている。これらの河岸段丘上には、各時代の遺跡の存在が知られている。本遺跡は、標高約180mの北西に傾斜した段丘上に立地する。遺跡の現状は杉の植林地である。水田面との比高は約20mである。

2. 調査の概要

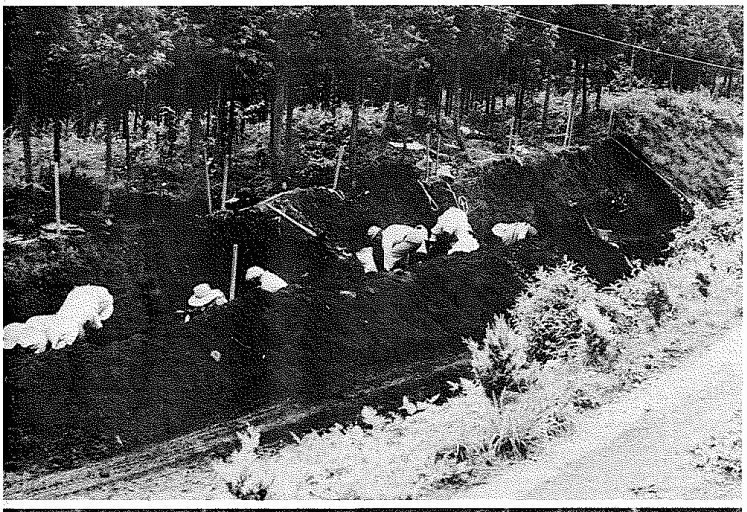
今回の調査は、金沢部落へ通じる林道（金沢線）の改良工事（拡幅）によって遺跡の一部が削平されることになったので、緊急に発掘調査を実施することになったものである。調査は、一迫川の右岸林道の法面にそって、26.5×1.2mの東西に長いトレンチを設定し、約32m^{2}を発掘した。その結果、4層の堆積土層を確認した。第1層は腐蝕土を主体とした表土で、遺物を含まない。第2層は礫を含んだ黒色土である。縄文時代後期初頭と晩期中葉の土器片が出土した。

第3層は黒色土層で2層同様礫を含んでいる。遺物の出土量は他の層より多い。縄文時代後半の完形土器などを出土した。この中には粗製の埋設土器が含まれる。埋設土器は、口径約25㎝高さ約30㎝、斜行縄文の付された粗製の深鉢である。口縁部を上にして埋設されていた。このた埋設土器を伴う施設については、発掘面積が狭く、その性格を明らかにすることは出来なかった。土器のほかには、長さ10㎝前後の硬質頁岩の剥片が10数点まとまった状態で出土した。また、径約7㎝の天然アスファルト塊も出土した。第4層は砂礫を含んだ砂層で、出土遺物はなかった。

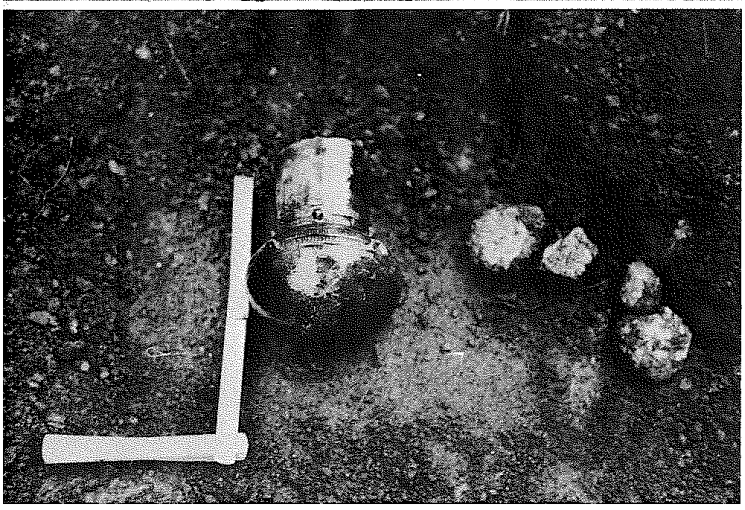
3. まとめ

今回の調査で、本遺跡は縄文時代後期初頭から晩期中葉にかけて営まれた遺跡であることがわかった。埋設土器の発見は、本遺跡の性格を考えるうえで重要である。

越戸遺跡



発掘状況



遺物出土状況

(5) 一（いち）の関（せき）遺跡

遺跡所在地：加美郡色麻村一の関字曽根田
調 査 主 体：宮城県教育委員会
　　宮城県農政部
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 期 間：昭和51年7月29日～昭和51年10月6日
調 査 面 積：約45,000m^2
発 掘 面 積：約4,800m^2
遺 跡 記 号：ＥＢ
遺 跡 番 号：31005
協 力 機 関：色麻村教育委員会
　　東北歴史資料館
　　宮城県多賀城跡調査研究所
　　色麻村土地改良事務所
　　色麻村四釜地区圃場整備事業計画地権者会

1. 一の関遺跡について

一の関遺跡は古くから古代の瓦を出土する地域として知られてきた。また、『続日本紀』の「天平九年四月十四日条」にみえる五柵中「色麻柵」の有力な擬定地として、これまで研究者や多くの人々によって注目をあつめてきた遺跡である。そこで、本遺跡がこれまでどのように考えられてきたか概観したい。

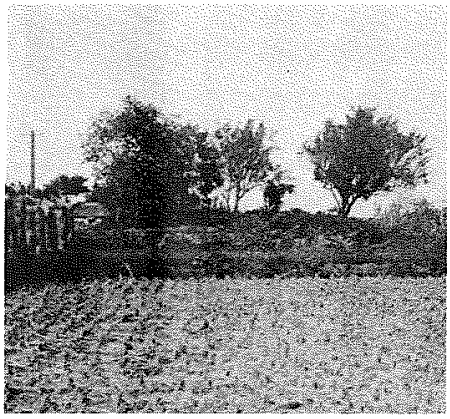
本遺跡についての考古学的な踏査は大正年間に、栗田茂治、村山貞之助によって開始されている。

栗田は続日本紀天平9年（737）4月14日条にみえる色麻柵の探査を行ない、色麻村高城を中心とした地域にその擬定地を求めた。また、村山の案内で一の関遺跡を踏査し、一の関遺跡付近を色麻第1の候補地、高城付近を色麻柵第2の候補地とした（栗田:1923）。

村山は栗田の見解に疑問をいだき、その後も本遺跡の遺構や遺物について詳細な調査を続け、瓦の分布と残っていた土塁をおもな論拠とし、文献的・地理的考察を加えて、一の関を中心として東西16町・南北18町の広範な地域を最も有力な色麻柵の擬定地とした（村山：1931a・b）。

その後、清水東四郎や内藤政垣などによる踏査が行なわれた。

清水は三度にわたり踏査を行ない、村山の説をほぼ全面的に支持した。しかし、村山の設定

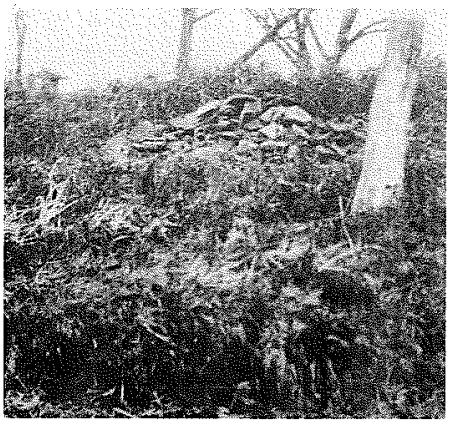


色麻一ノ関ノ古瓦出土地

加美郡色麻村一ノ関
佐藤源右エ門氏宅東方ノ
田中

樹木ノ生ヅル所ニ高サ
二、三尺位ノ土壇ノ如
キ所アリ、ソノ地及ヒ
ソノ周囲ヨリ古瓦出土ス

（昭和八年十月五日撮ス）



色麻一ノ関ノ古瓦出土地

佐藤源右エ門氏宅東北方
ノ田畑中ニ一段高キ所ガ
土壇ノ如キモノアリ、之ヲ中心ニ
四方ノ田畑中ニ多クノ古瓦片
出土ス。

（昭和九年三月廿八日撮ス）

昭和初期の一の関遺跡（写真と注記はすべて内藤による）

した範囲については、多賀城や秋田城・払田柵などにくらべてあまりにも広大であることを問題とし、中新田街道を西辺にした方四百間の地域が色麻柵跡であろうと推定した（清水：1932）。

内藤は踏査によって、土壇の存在と、瓦の出土を確認した。その時の状態は、内藤が1933年（昭和8年）10月5日に撮影した写真に「加美郡色麻村一の関佐藤源右ェ門氏宅東方ノ田中樹木ノ生エタル所二高サニ・三尺位ノ土壇ノ如キ所アリ、ソノ地及ビソノ周囲ヨリ古瓦出土ス」と記されている[注1)]。また、内藤は東北古瓦に関する実証的研究をふまえて、本遺跡から出土する瓦を綿密に分析し、瓦の種類および特徴を明らかにした。その成果は後に『東北古瓦図録』（内藤：1974）に収録されている。

戦後になって、一の関遺跡を色麻柵とみる説は伊東信雄（伊東：1967）・新野直吉（新野：1969）などによって支持されることになった。しかし、色麻柵を本遺跡以外の地に求める見解も佐々木茂楨（佐々木：1971）・高橋富雄（高橋：1975）などによって提示されている。

以上のように、本遺跡は発見当初から一貫して、天平の五柵との関連において論議されてきた。

2. 調査に至る経過

一の関遺跡は、色麻柵との関連で論じられてきた遺跡であることはすでに述べた通りである。しかし、これらの研究は、表面観察による遺構の確認と、表面採集された瓦などの遺物に基づくものであつた。その後、一の関遺跡は発掘調査によってその歴史的な性格について十分な検討を加えられないままに近年の開田ブームを迎えた。その結果、遺跡の保護が次第に危ぶまれるようになった。曽根田地区に昭和初期まであった方形状の高まりが、水田化のためブルドーザーで削平され、その所在・範囲さえ不明確になりつつあったことなどはその例である。

宮城県農政部から宮城県教育委員会に県営圃場整備事業四釜地区の事業計画案が提示されたのは昭和50年10月である。両者は本遺跡がすでに述べたように重要な遺跡であることを十分に認識し、たびかさなる話し合いを行なった。その結果、遺跡の範囲・遺構の確認などを目的とした事前調査を行ない、その上で遺跡の保護・保存措置を協議することで合意に達した。そこで、宮城県教育委員会は、昭和51年6月29日と7月16日に予備調査を行なった。その成果をふまえて、7月29日から東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所の協力を得て範囲確認調査を実施することになった。

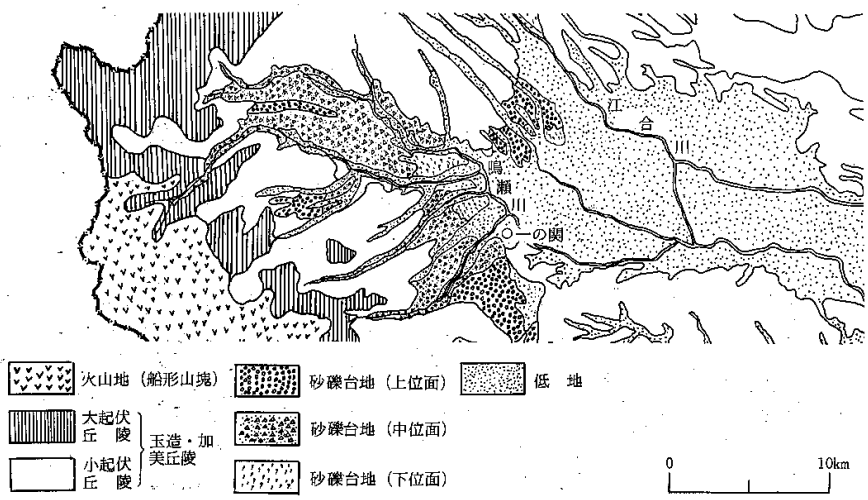
3. 遺跡の位置と環境

一の関遺跡は加美郡色麻村一の関字曽根田に位置する。本遺跡は村の中心地（四釜）から東南約1.5mにある一の関地区一帯に広がっている。

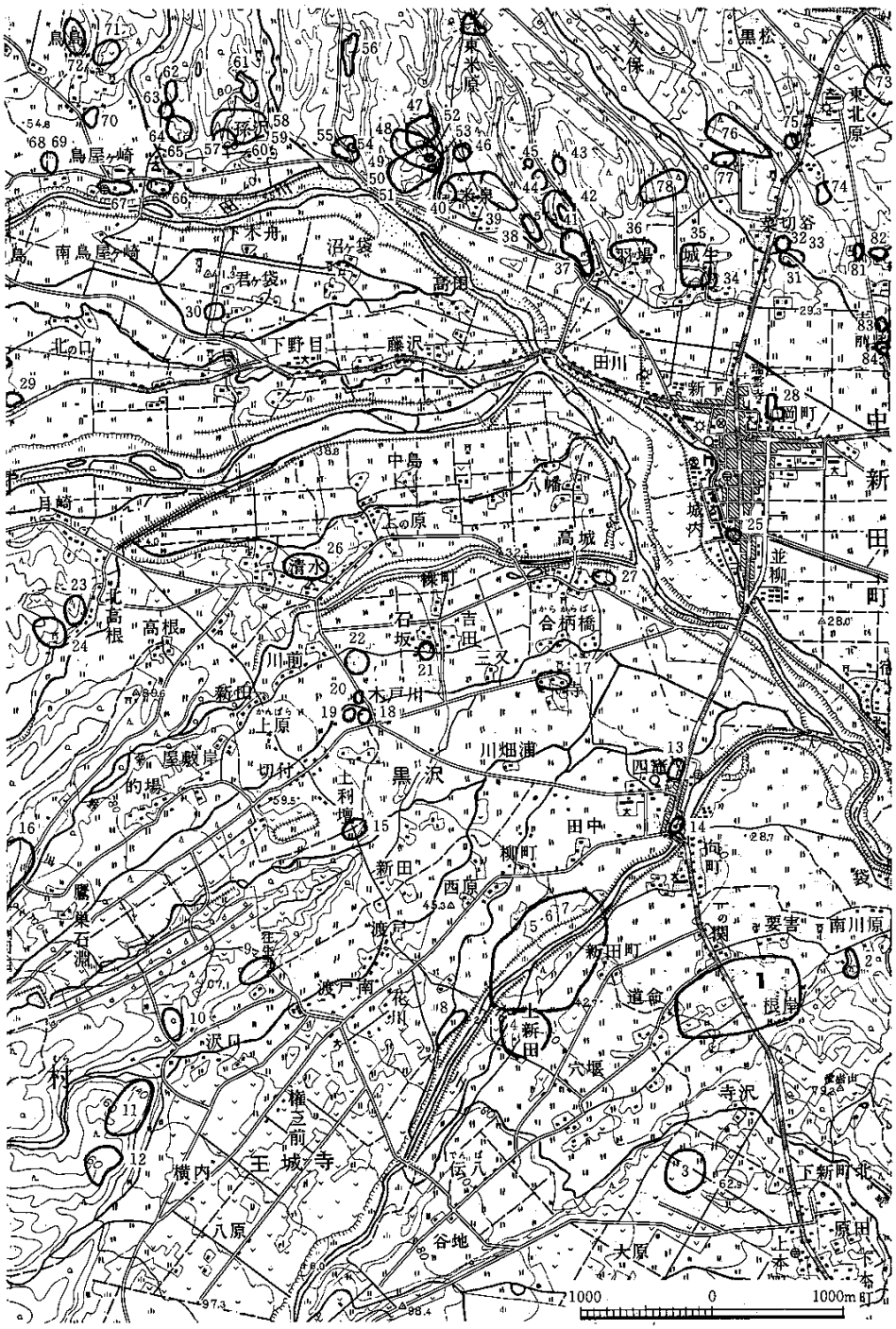
自然的環境　船形山塊（奥羽脊梁山脈）には標高約200～600mの裾麓が舌状に東方へつらなっている。この裾麓は非火山性の砂岩・礫岩を基盤とし、その上を火山噴出物がおおっている。それに接した標高100～200mの加美丘陵（新築3系）が樹枝状に北から南へ連続している。この丘陵は東にゆるやかに傾斜し、薬来山周辺をとりまいている。基岩は新鮮統の砂岩と礫岩から成り、薄い砂礫層がその丘頂面をおおっている。山塊・裾麓・丘陵を開析する河川は東へ流れ、すべて鳴瀬川に通じている。これらの河川の一つである荒川は王城寺付近で花川となって、本村南半に扇状地性低地（花川扇状地）を形成している。花川扇状地は扇頂標高約140m、扇端部標高約30m、全長6.5kmで、規模が大きい。一の関遺跡はこの扇状地の最末端部を流れる小さな湧水河川（松木川）に沿う低地に立地している。遺跡の立地する花川扇状地の南側には西から東へ僅かに揮斜する低湿地が広がっている。この低湿地は江合川と鳴瀬川によって形成されたもので、県北最大の穀倉地帯である大崎耕土の一部（南西端）を構成している。

歴史的環境　色麻村では現在42ヶ所の遺跡が確認されている（宮城県教委:1976）。これらの内容をみると縄文時代が3、古墳時代が12、奈良・平安時代が8・中・近世が19である。また、遺跡は鳴瀬川流域の丘陵・台地・段丘・扇状地などに立地している。

縄文時代の遺跡としては香の木遺跡などがある。香の木遺跡は縄文土器の他に石鏃・石斧などの石器が豊富に発見され、著名である（伊東:1957）。



第19図　鳴瀬川流域の土地分類図



第20図　一の関遺跡と周辺の遺跡

第3図　一の関遺跡と周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号	番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号
1	一の関遺跡	城柵跡(寺院跡？)	奈良・平安	31005	43	黒松古墳群(念仏塚古墳群)	古墳	古墳(後)奈良	28023
2	真山遺跡	城館跡	古代～近世	31040	44	三吉平遺跡	包含地	縄文(早・前・中・晩)弥生(中・後)古代	30027
3	上林遺跡	包含地	奈良・平安	31022	45	東野火葬墓	墳墓	中世？	30087
4	上新田遺跡	集落跡	〃	31042	46	古屋敷遺跡	包含地	縄文(前・中・晩)弥生	30029
5	色麻古墳群(上郷支群)	円墳	古墳(後)	31006	47	古城遺跡	〃	縄文(早・前)奈良・平安	30030
6	色麻古墳群(高台堂支群)	〃	〃	31007	48	念仏山古墳群	横穴古墳円墳	古墳(後)	30079
7	色麻古墳群(高野支群)	〃	〃	31008	49	米泉遺跡(米泉古城跡)	城館跡	古代中世(鎌倉)	30011
8	高台城跡(高台堂館跡)	城館跡	中世	31039	50	米泉城本丸遺跡	包含地	弥生(後)奈良・平安	30071
9	駒辺城跡	〃	〃	31032	51	要害火葬墓	墳墓	中世	30088
10	沢口館跡	〃	〃	31031	52	古館遺跡	包含地	縄文・古代	30041
11	加味館城跡(上館城)	〃	〃	31030	53	米泉館山横穴古墳群	横穴古墳	古墳(後)	30010
12	嵩沢館跡	〃	〃	31029	54	地蔵館遺跡	包含地	縄文(早・前)弥生(後)	30016
13	四釜城跡(北谷地城跡)	〃	〃	31038	55	地蔵館跡(鵜首城)	城館跡	中世	30101
14	御山古墳	円墳	古墳(後)	31001	56	泥坂屋敷遺跡	包含地	縄文(中・晩)弥生(中・後)奈良・平安	30032
15	旗塚松及首塚	塚	平安	31020	57	孫沢古墳群	古墳	古墳(後)	30081
16	大谷地遺跡	包含地	縄文奈良・平安	31017	58	孫沢城跡	城館跡	中世	30024
17	下黒沢内館跡(要害館、下館)	城館跡	中世	31033	59	壇だれ山遺跡	包含地	縄文(前・中)奈良・平安	30034
18	上黒沢中館跡	〃	〃	31034	60	上の原下遺跡	〃	弥生(中・後)	30073
19	上黒沢上館跡	〃	〃	31035	61	上の原遺跡	〃	縄文(早一晩)奈良・平安	30004
20	北館跡	〃	〃	31036	62	うごけ たごけ遺跡	〃	縄文	30008
21	大塚古墳	円墳	古墳(後)	31010	63	愛宕山古墳群	古墳	古墳(後)	30083
22	蝦夷塚古墳群	〃	〃	31011	64	宿館跡	城館跡	中世	30104
23	高根遺跡	窯跡	古代中世	31026	65	東山遺跡(上の山館跡、長者遺跡)	包含地	古墳(後)中世奈良・平安	30006
24	高根館跡	城館跡	中世	31027	66	毘沙門堂遺跡	〃	縄文(中・晩)奈良・平安	30037
25	中新田東裏遺跡	包含地	縄文	28028	67	道祖神遺跡	〃	縄文(中・後・晩)奈良・平安	30038
26	香の木遺跡	〃	〃	31009	68	壇の越遺跡	〃	縄文(前一晩)弥生(中)奈良・平安	30039
27	高城館跡	城館跡	中世	31037	69	行人塚古墳群	古墳	古墳(中)	30078
28	中新田城跡	〃	〃	28016	70	岩見壇遺跡	包含地	縄文(晩)	30040
29	如来堂古墳	前方後円墳(?)	古墳(後)	29011	71	東山(長者屋敷)遺跡	〃	弥生奈良・平安	30074
30	君ヶ袋館跡	城館跡	中世	30103	72	鳥嶋館遺跡	城館跡	中世	30107
31	大屋敷遺跡	包含地	縄文・古代	28010	73	埴輪塚古墳群	円墳群	古墳(後)奈良	28005
32	県史跡 薬切谷廃寺	寺院跡	奈良	28001	74	南北原遺跡	包含地	奈良・平安	28003
33	薬切谷館跡	城館跡	中世・近世	28021	75	原遺跡	包含地	縄文	28008
34	城生館跡	〃	〃	28022	76	大柳遺跡	〃	古代	28011
35	城生柵跡	城柵跡	縄文(中)奈良	28002	77	出羽通り遺跡	〃	〃	28014
36	羽場遺跡	包含地	奈良・平安	28015	78	へっぴり塚古墳群	円墳群	古墳(後)奈良	28004
37	米泉遺跡	〃	〃	30025	79	中野遺跡(東野遺跡)	包含地	縄文(中・晩)奈良・平安	30028
38	大黒森古墳群	円墳	古墳(中)	30002	80	大清水遺跡	〃	縄文	30090
39	米泉古墳群	〃	〃	30003	81	西岡遺跡	〃	古代	28009
40	田川八幡館跡	城館跡	中世	30122	82	北館遺跡	〃	縄文	28012
41	東森古墳群(大塚森)	円墳	古墳(中)	30001	83	北館跡	城館跡	中世	28020
42	小池裏遺跡	包含地	縄文(早一晩)弥生(後)	30026	84	上狼塚館跡	〃	中世・近世	28019

弥生時代の遺跡は未だ知られていない。古墳時代の遺跡としては倉南寺古墳（村山:1964）御山古墳（伊東:1957）・色麻古墳群（伊東:1955）・蝦夷塚古墳群（田辺編：1776）（宮城県教委：1938）などの古墳群がある。念南寺古墳は規模の大きい前方後円墳で埴輪がめぐらされている。蝦夷塚古墳群は安永風土記御用書出にもしるされているように、古くから知られていた円墳群である。

奈良・平安時代の遺跡としては上新田遺跡（小井川:1975）・大谷地遺跡（宮城県教委:1976）・国史跡日の出山瓦窯跡群（宮城県教委：1970）・高根瓦窯跡（宮城県教委：1976）などがある。上新田遺跡は1973年に発掘調査が行なわれた集落跡で竪穴住居跡群が発見され、多量の遺物が出土している。日の出山瓦窯跡は1969年に発掘調査が行なわれ、多賀城などとの関連で考えられている。高根瓦窯跡は未だ発掘調査は行なわれていないが、散布している瓦の種類から一の関遺跡との関係が推定される。また、御山古墳頂部には「延喜式神明帳[注2]」に記載された伊達神社がある。

この他、中・近世のものとして高根館跡・真山館跡をはじめ数多くの遺跡が知られている。

4. 調査の経過

遺跡の現状　一の関遺跡が花川扇状地の扇端に立地していることは既に述べた。次に、周辺の微地形および現状について述べることにする。

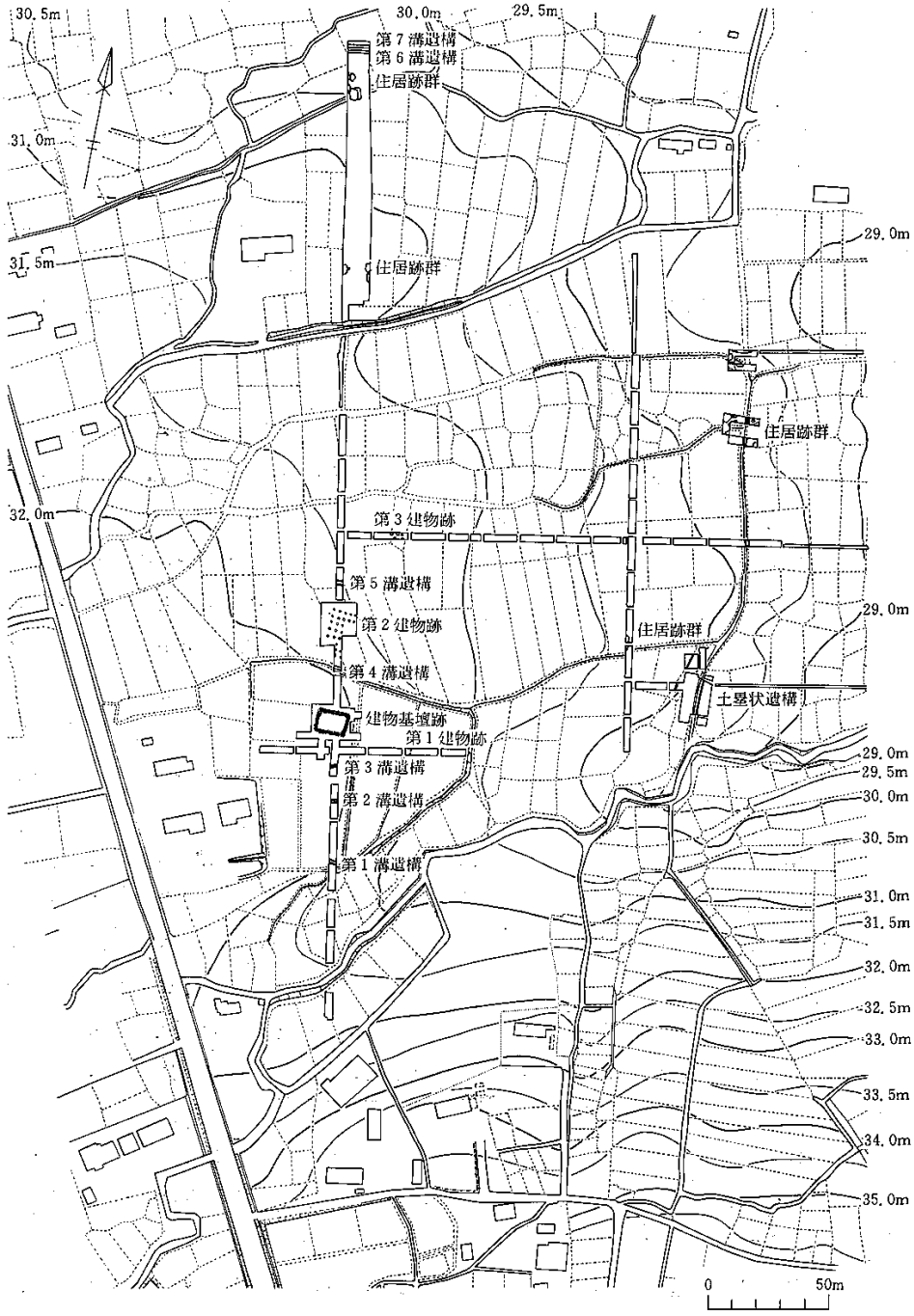
一の関遺跡周辺の地形を観察すると、北側が花川、東側が低湿地帯、南側が松木川および愛宕山の丘陵によって画されている。西側は花川扇状地の扇央部分からなだらかに傾斜しているため、明確な地形の変換は認められない。

微地形の変化を詳細に検討すると、一の関の北端と向町南端に地形を明瞭に区画する谷がある。さらに、この谷の南側には曽根田から要害付近へのびるなだらかな傾斜面がある。傾斜面の標高は約30～40mで、その中を数本の用水路が西から東へ走っている。この水路は花川扇状地の伏流河川を利用したもので、部分的に谷状の地形をしている。曽根田から要害へのびる傾斜面の南西部は、標高31.5～33.0mで、東側へ舌状に張り出している。その東側は、30～100cmの明瞭な段によって周囲と区画されている。

舌状に張り出した部分の現状は緩傾斜面であるが、かつてその中央部に土壇状の高まりが確認されていた。また、曽根田から要害へのびる傾斜面が東側の低湿地帯と接する部分には、南北にのびる土塁状の高まりが認められる。

遺跡の周辺一帯は、現在その一部が宅地・畑地であるが、大部分は水田となっている。

調査の経過　7月に予備調査を行ない、かつて土壇状の高まりが認められていた舌状張り出し部の中央で、東西にのびる石組遺構と多量の瓦を発見した。7月29日に、予備調査で発見された石組遺構を原点として、磁北と一致する基準線を設け、グリッドを設定し、本格的な調査



第21図　一の関遺跡遺構配置図

を開始した。

調査は石組遺構の範囲と性格を把握することから始めた。その結果、北側・西側・東側にも同様な石組遺構を検出し、それらが方形にめぐることを確認した。また周辺から多量の瓦や土師器･須恵器などが出土した。これらのことから、この石組遺構は建物基壇跡ではないかと推定された。

次に、石組遺構の東側にトレンチを設定したところ、掘立柱建物跡の柱穴（掘り方）が数個確認された。さらに、調査区を南北にのびる土塁状高まりに設定し、精査を行なった。また、石組遺構と土塁状遺構の間にも遺構の存在が予想されたためトレンチを設定し、その分布状況を調べた。その結果、石組遺構の北側で数棟分の掘立柱建物跡群と溝、土塁状遺構北側で竪穴住居跡群を発見した。

調査区全体に遺構の存在が明らかになったことから、遺跡の範囲を確認するため、調査区をさらに北･東･南側に延長した。その結果、曽根田から要害へのびる緩斜面にはすべて遺構･遺物があり、遺跡の範囲はさらにその外側へのびることが判明した。

調査によって遺跡の性格･重要性が次第に明らかとなったので、9月11日に地権者を含め、村民および、一の関遺跡に関心をもつ人々を対象として、現地説明会を開催した。その結果、多くの人々によって一の関遺跡の重要性が確認された。その後も調査は続けられ、10月6日に終了した。

5. 調査の成果

遺構　今回の調査で確認された遺構は、建物基壇跡1基･掘立柱建物跡数棟･竪穴住居跡21軒･土壙15基･土塁状遺構1本･溝遺構7本である。

建物墓壇跡　東側が段によって区画された舌状張り出し部の中央で、耕作土排除後黒褐色土上面において石組遺構として確認された。遺構上部はすでに削平によって破壊されている。残存部分の平面形は南辺･北辺が約14.3m、東辺･西辺が約11.4m長方形である。東･西辺の向は磁北から東へ約7°偏っており、真北とほぼ一致している。本遺構の外周部分は幅0･8～1.0mの石組帯である。この石組帯[注3)]は直径6～20cmの円礫が数段重なった状態で認められ、その間隙に直径2～6cmの小円礫が配されていた。石組帯によって囲まれた内部は黒褐色土である。

石組帯の外側には褐色粘土帯が認められた。この粘土帯の幅は石組帯の北･東側で約1m、南側の一部で約3mであった。また、北側の一部で粘土帯の上部を掘り下げたところ、瓦や石が不規則に密集した状態で発見された。

掘立柱建物跡　舌状張り出し部の東側（第1建物跡）が、段によって舌状張り出し部と区画された北側緩斜面で数棟分の掘立柱建物跡(第2･第3建物跡群)が発見された。遺構確認面は

いずれも耕作土下の黒褐色土上面である。

第1建物跡は南北方向に2つの柱穴が溌見されている。柱穴の掘り方は長・短軸約1mの方形で、柱間寸法は約2mである。

第2建物跡群は柱穴の重複関係から数棟の存在が予想される。そのうち、1棟は柱穴の掘り方が長・短軸約1.4mの方形で、柱間寸法が約3mである。柱穴には掘り方と柱痕跡の識別できるものが5個ある。柱穴の配置関係から4間×4間の建物跡の存在が推定されるが、正確な規模はわからない。また、柱穴配置の方向は磁北から約7°東へ偏っており、ほぼ真北と一致している。この他の建物は重複が著しく、調査範囲も狭いため詳細は不明である。

第3建物跡群は、柱穴群が著しく重複しているため、建物跡の規模・性格などはわからない。

竪穴住居跡　曽根田から要害にのびる緩斜面の北側で10軒、東側で11軒の竪穴住居跡が発見された。遺構確認面は耕作土および黒褐色土下の褐色土上面であったが、それが掘り込み面と一致するか否か不明である。住居跡内堆積土からは土師器・須恵器片が出土している。

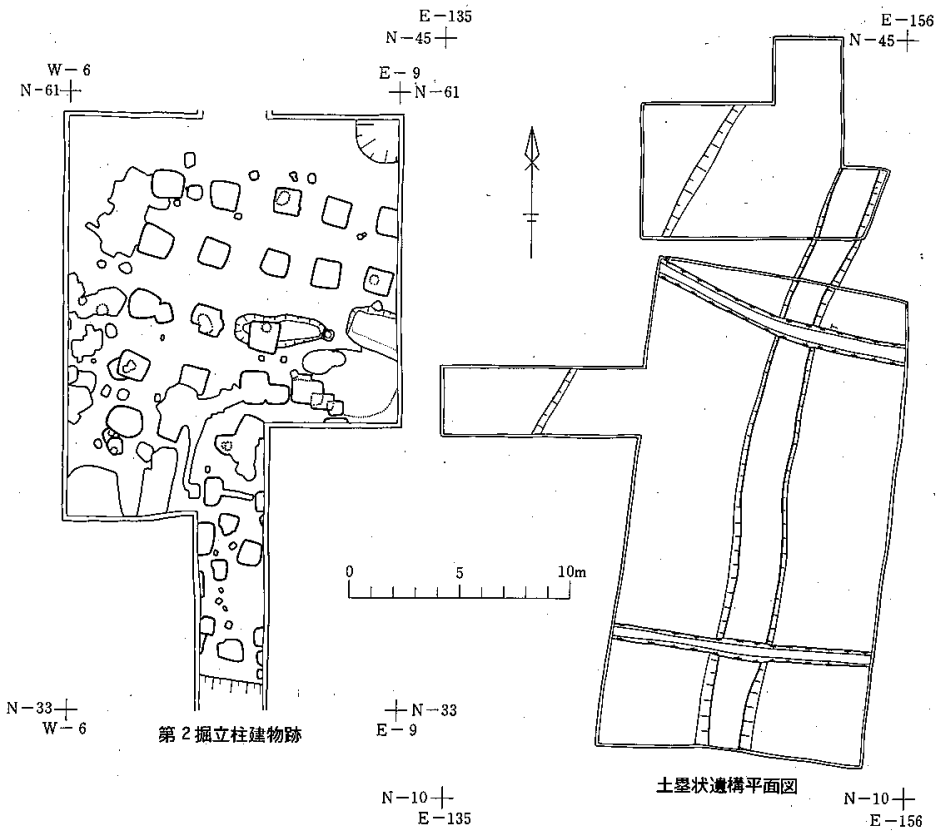
土塁状遺構　曽根田から要害にのびる傾斜面の東側には、既に述べたように、土塁状の高まりがあった。この土塁状高まりは幅約2.5m・高さ約0.6m・長さ約50mで、南北方向にのびている。調査の結果、黒褐色土上に暗褐色土・明褐色土・灰褐色土を互層に積みあげていることが判明した。この土塁状遺構の基底部幅は約2.4m、高さは約0.6mである。

溝遺構　舌状張り出し部で3本（第1～第3溝遺構）、北側緩斜両へ移行する部分で2本（第4・第5溝遺構）、北側緩斜面の北端で2本（第6・第7溝遺構）、合計7本の溝遺構が発見された。これらは、いずれも東西方向のものである。

第1・第2・第3溝遺構は、幅1～2mで規模が小さい。遺構確認面は耕作土および黒褐色土下の褐色土上面である。堆積土から瓦の小破片が少量出土している。第4溝遺構は幅約1.3m・深さ0.7mで、耕作土下の黒褐色土上面で確認された。堆積土から多量の瓦片と少量の土師器・須恵器片が出土している。第5溝遺構は幅約3.7m、深さ約1mの溝で、耕作土下の黒褐褐色土上面で確認された。遺物として、瓦片が少量出土した。第6・第7溝遺構は幅4m、深さ約1.5mで両者とも規模が大きい。

雷文縁複弁蓮華文軒丸瓦
瓦・円礫密集
W－3
W－3
W・E－0
E－3
N－12
E－9
N－9
W－3
W・E－0
N－9
N－9
N－6
N－6
E－3
0
1
2m

第22図　建物基壇跡



土墨状遺構断面図

0　1　2m

層No.	土色	混入物・その他	備考	層No.	土色	混入物・その他	備考
1	暗褐色(7.5Y R 3/4)		表土層	12	黒褐色(7.5Y R 3/2)		土墨積土層
2	明褐色(7.5Y R 5/8)		〃	13	褐色(7.5Y R 4/6)		〃
3	褐色(7.5Y R 4/4)		〃	14	黒褐色(7.5Y R 2/2)		旧表土
4	にぶい褐色(7.5Y R 5/4)		〃	15	極暗褐色(7.5Y R 2/3)		自然堆積層
5	明褐色(7.5Y R 5/8)	褐色(7.5Y R 3/4)土含む	土墨積土層	16	黒褐色(7.5Y R 2/2)	浅黄色(2.5Y 7/4)土ブロック含む	〃
6	明褐色(7.5Y R 5/8)		〃	17	極暗褐色(7.5Y R 2/3)		〃
7	極暗褐色(7.5Y R 2/3)		〃	18	極暗褐色(7.5Y R 2/3)		〃
8	明褐色(7.5Y R 5/8)	明褐色(7.5Y R 5/8)土ブロック含む	〃	19	黒色(7.5Y R 2/1)		〃
9	暗褐色(7.5Y R 3/3)		〃	20	黒色(7.5Y R 2/1)	明褐色の粒子を含む	〃
10	極明褐色(7.5Y R 5/8)		〃	21	黒褐色(7.5Y R 2/1)		〃
11	褐灰色(7.5Y R 4/1)		〃	22	オリーブ黒色(10Y 3/1)		〃

第23図　掘立柱建物跡・土墨状遺構

遺物　出土した遺物は、瓦・土師器・須恵器・赤焼土器・円面硯・土錘・鉄釘などである。

瓦　瓦はほとんどが建物基壇跡とその周辺から出土したもので、大半が破片である。出土瓦の種類は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦である。量的には平瓦が圧倒的に多く、丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦の順に少くなる。

軒丸瓦　本遺跡から出土した軒丸瓦には、雷文禄複弁蓮華文・重弁蓮華文・素弁蓮華文・鋸戸歯文禄細弁蓮華文・珠文緑素弁蓮華文・重圏文・樹枝文などの種類がある。

（雷文禄複弁蓮華文軒丸瓦）量的に主体をなす軒丸瓦で、瓦面径が約17.5cmである。瓦当面の文様は外区と内区から構成される。外区斜縁に凹「　」|||「　」を交互に配した雷文を施している。内区は1＋6の蓮子を配した中房と、4葉の複弁からなる。中房に配された蓮子の形態は円形で、その大きさはほぼ等しい。中房の径は約5.5cmで、内区全体で占める比率が大きい。瓦当面の各所に笵の柾目痕が見られる。

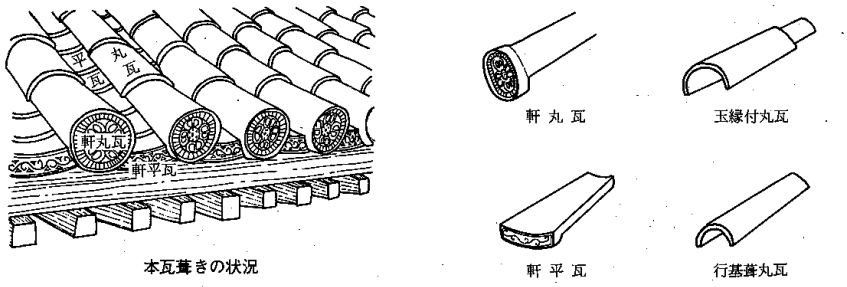
（重弁蓮華文軒丸瓦）瓦面径は約18cmである。瓦当面の文様は8葉の重弁からなる。中房をめぐる重弁蓮華の大弁は、浮彫的で先端がまるみをもつのに対し、小弁は陰刻的で尖形である。

中房は内区全体で占める比率が小さく、蓮子は認められない。

（素弁蓮華文軒丸瓦）瓦当面の文様は素弁蓮華と中房からなる。破片のため、瓦面径・素弁の数・中房の形態などは不明である。

（鋸歯文禄細弁蓮華文軒丸瓦）文様は外区と内区から構成される。外区は隆線による鋸歯文の外縁と、乳頭状の珠文が巡る内縁からなる。内区には細弁蓮華文才が施されている。破片のため瓦面径・細弁の数・中房などは不明である。

（珠文緑素弁蓮華文軒丸瓦）瓦面径は約17.5cmである。瓦当面の文様は鋸歯文帯によって外



第24図　瓦模式図Ⅰ

区と内区に区画される。外区周縁には珠文が巡らされている。内区には4葉の素弁が施され、その中心と各素弁間に蓮子が配されている。

（重圏文軒丸瓦）瓦面径は約17cmである。瓦当面の文様は隆線による二重の圏文によって構成される。瓦当面の各所に箔の柾目痕が認められる。

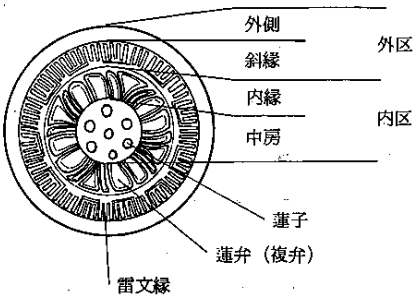
（樹枝文軒丸瓦）瓦面径は約20cmと比較的大きい。瓦当面の文様は樹枝状のものである。樹枝文は対称軸となる幹隆線の両側に2本ずつ斜上方にのびる枝隆線を配置したものである。幹隆線および枝隆線の先端には「三角文」がついている。

軒平瓦　本遺跡出土のものは破片で量も少なく、交叉唐草文軒平瓦1種類である。

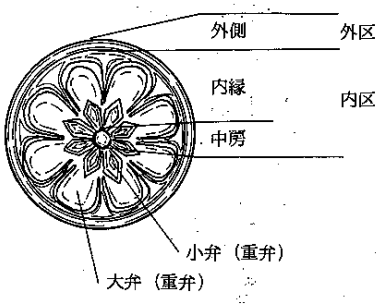
（交叉唐草文軒平瓦）瓦当面は外側と内区にわかれる。外側は彫りが浅い。内区には交叉する均整のとれた唐草文が配されている。顎面には縄叩き目を下地として、ヘラ描きの鋸歯文が描かれている。平瓦部の凸面には、スリ消した縄叩き目の上に「＋」字状のヘラ書きがある。

凹面には調整がなく、布目痕を残している。

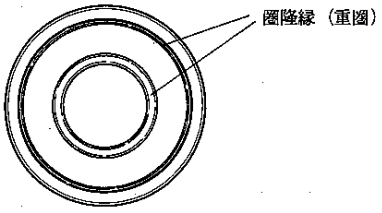
丸瓦　玉縁付丸瓦（有段）と行基葺丸瓦（無段）が見られ、前者が主体をなす。玉縁付丸瓦は粘土紙巻きあげ技法によるものである。その凸面は縄叩き目の「スリケシ」後「ナデ」調整が加えられている。凹面には調整がなく、布目痕を残している。後者はきわめて少ないことからその存在を知るだけで、詳細は不明である。



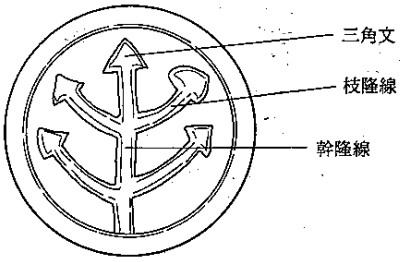
雷文縁複弁蓮華文軒丸瓦



重弁蓮華文軒丸瓦



重圏文軒丸瓦



樹枝文軒丸瓦

第25図　瓦模式図II

平瓦　出土した瓦で最も多い。しかし、破片が大部分で、完形のものは少ない。凸面は縄叩き目･格子叩き目･花文叩き目などの他に、その後、調整（スリケシ･ナデ）を加えているものがあり多様である。凹面には布目痕を残すものや「ヘラケズリ」・「スリケシ」によるものが混在し、大部分のものに桶合せ痕が残っている。以上の他に、凸面に縄叩き目、凹面に蓆状圧痕のみられるものがある。

土器　土器には土師器･須恵器･赤焼土器がある。しかし、これらは大部分が破片で、実測図作成不可能なものが多い。完形品は掘立柱建物跡付近から出土した高台付坏の赤焼土器1点だけである。なお、出土地点にまとまりはない。

土師器　器種には坏と甕があり、前者が量的に多い。

坏には次のようなものがある。

①内外面の体部と底部の境に段をもち、体部外面に「ヨコナデ」･底部外面に手持ちの「ヘラケズリ」が加えられているものである。内面は「ヘラミガキ」と「黒色処理」が行なわれている。

②破片であるが、外面の体部と底部の境に軽い段をもち、内面に段のないものである。体部外面は「ヘラミガキ」、内面は「ヘラミガキ」と「黒色処理」が行なわれている。

③ロクロを使用しているものである。内面は「ヘラミガキ」と「黒色処理」が行なわれている。

須恵器　器種には坏･蓋･瓶･甕がある。

坏には次のようなものがある。

①ロクロ調整で、回転糸切りによる切り離し後、調整を加えないもの。

②ロクロ調整で、回転ヘラ切りによる切り離し後、調整を加えないもの。

③ロクロ端整で、静止糸切りによる切り離し後、底部周縁に手持ちの「ヘラケズリ」を加えたもの。

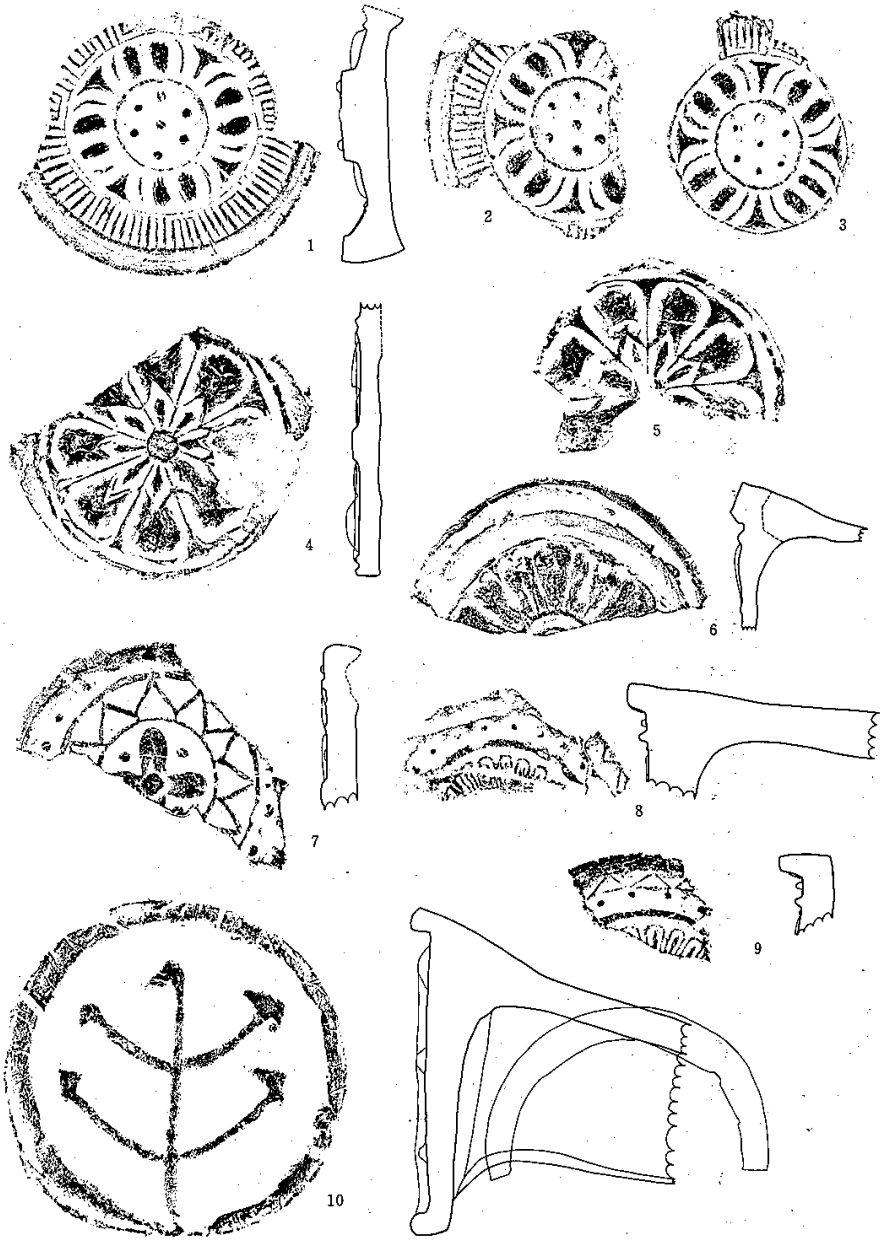
蓋は「カエリ」が内側につき、宝珠のつまみをもつものである。

瓶は長頭頸瓶で頸部が欠損している。体部上半は肩部の弱い倒卵状で、底部に高台がついている。体部の成形は巻き上げ技法で、その後ロクロ調整を加えている。底部の高台は付け高台で接後調整を加えている。体部上半には自然釉がかかっている。

甕は破片で、口縁部に近い部分に櫛描き波状文のみられるものである。

赤焼土器　器種は坏だけであるが高台の付くものもある。全体として色調は赤灰色である。

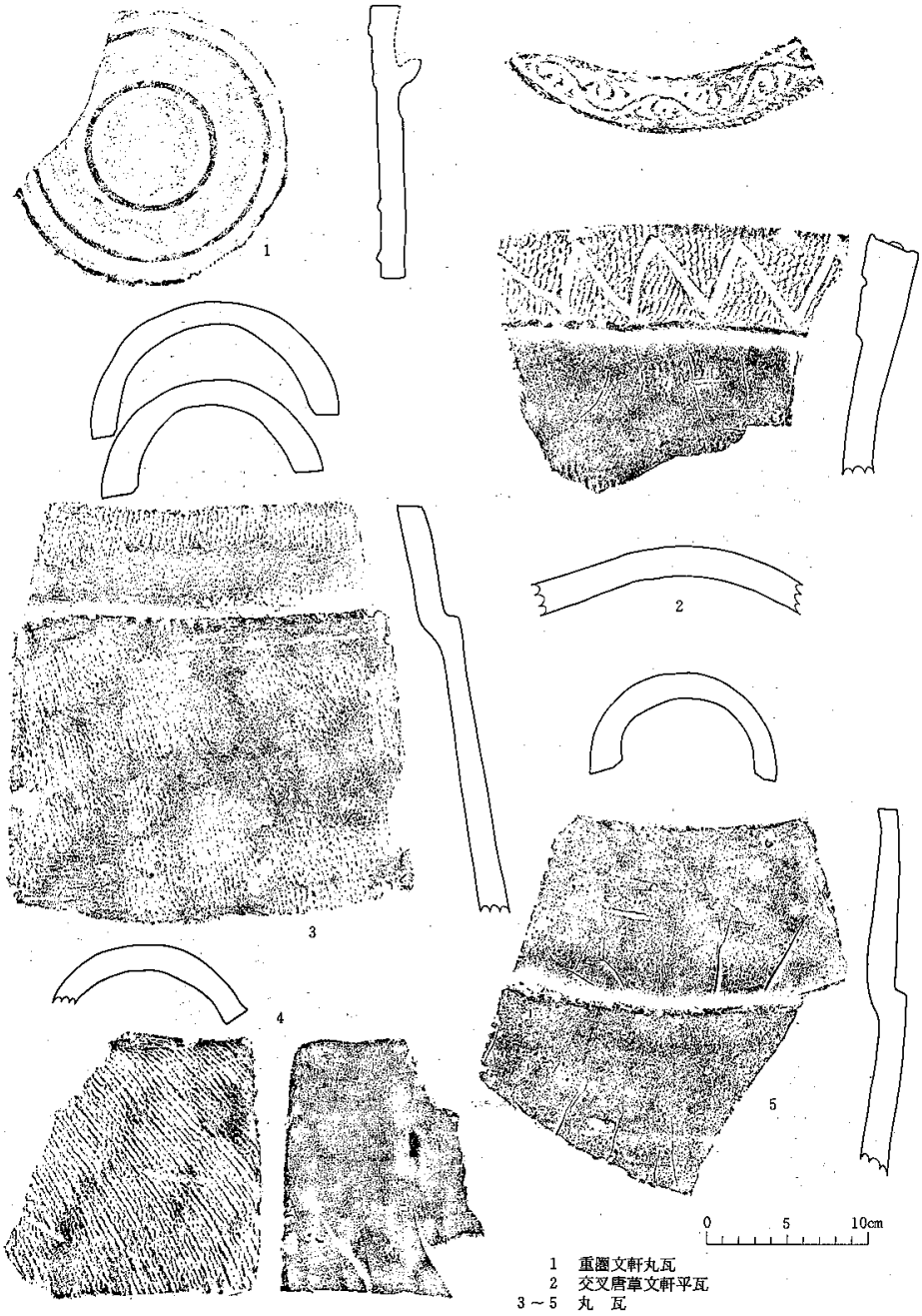
これらはロクロ調整で、回転糸切りによる切り離し後、調整を加えていないものである。



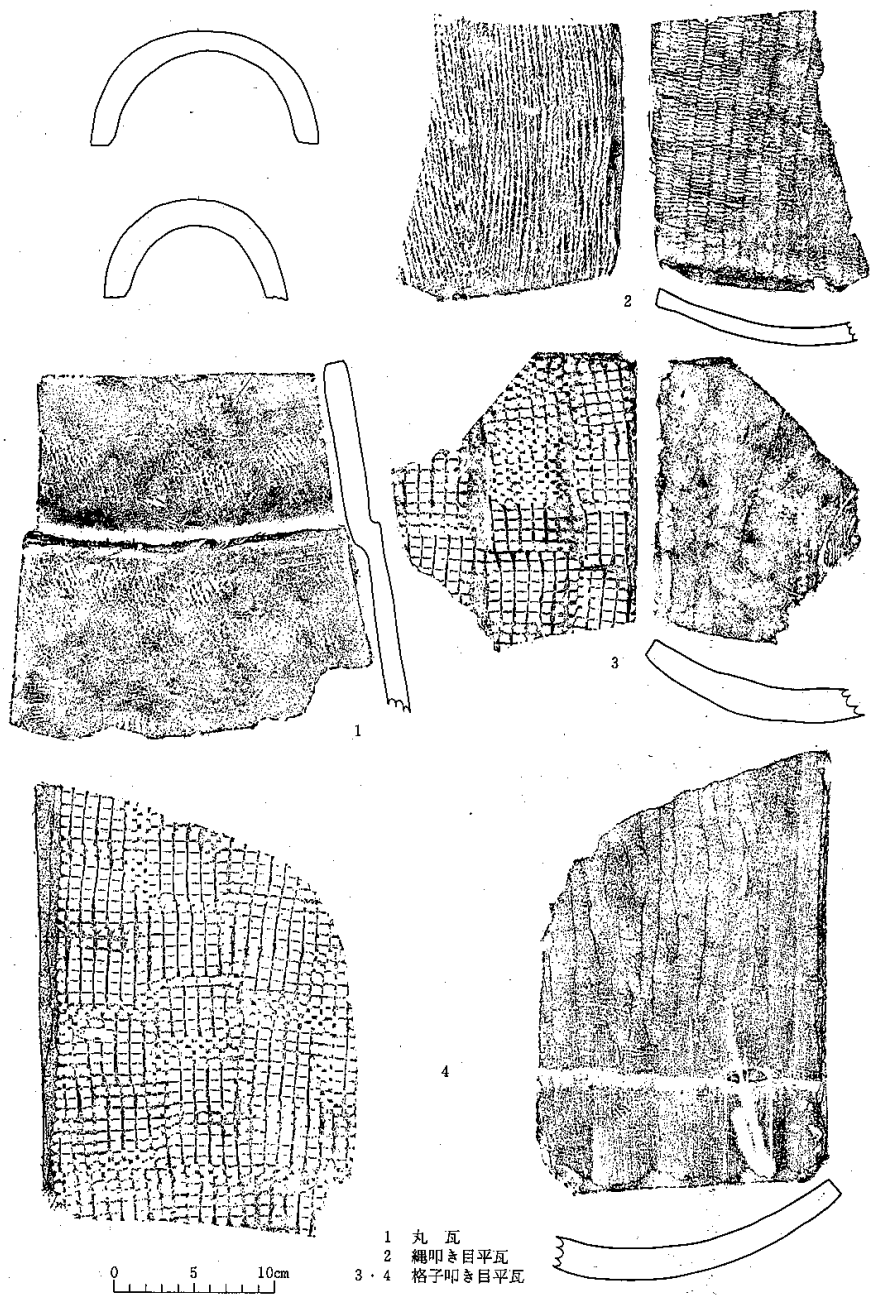
1～3　雷文縁複弁蓮華文軒丸瓦
4・5　重弁蓮華文軒丸瓦
6　素弁蓮華文軒丸瓦
7　珠文縁単弁蓮華文軒丸瓦
8・9　鋸歯文縁細弁蓮華文軒丸瓦
10　樹枝文軒丸瓦

0　5　10cm

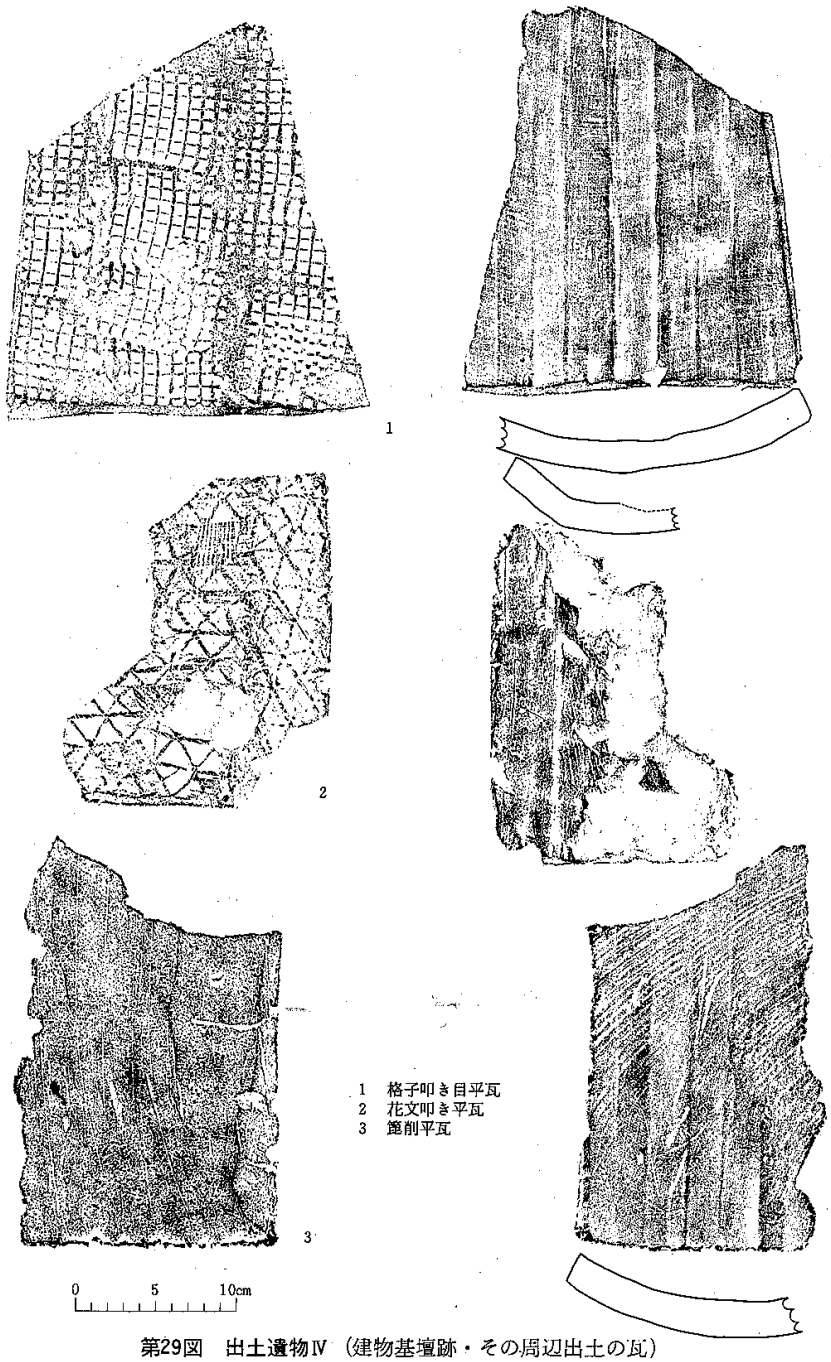
第26図　出土遺物Ⅰ（建物基壇跡・その周辺出土の瓦）



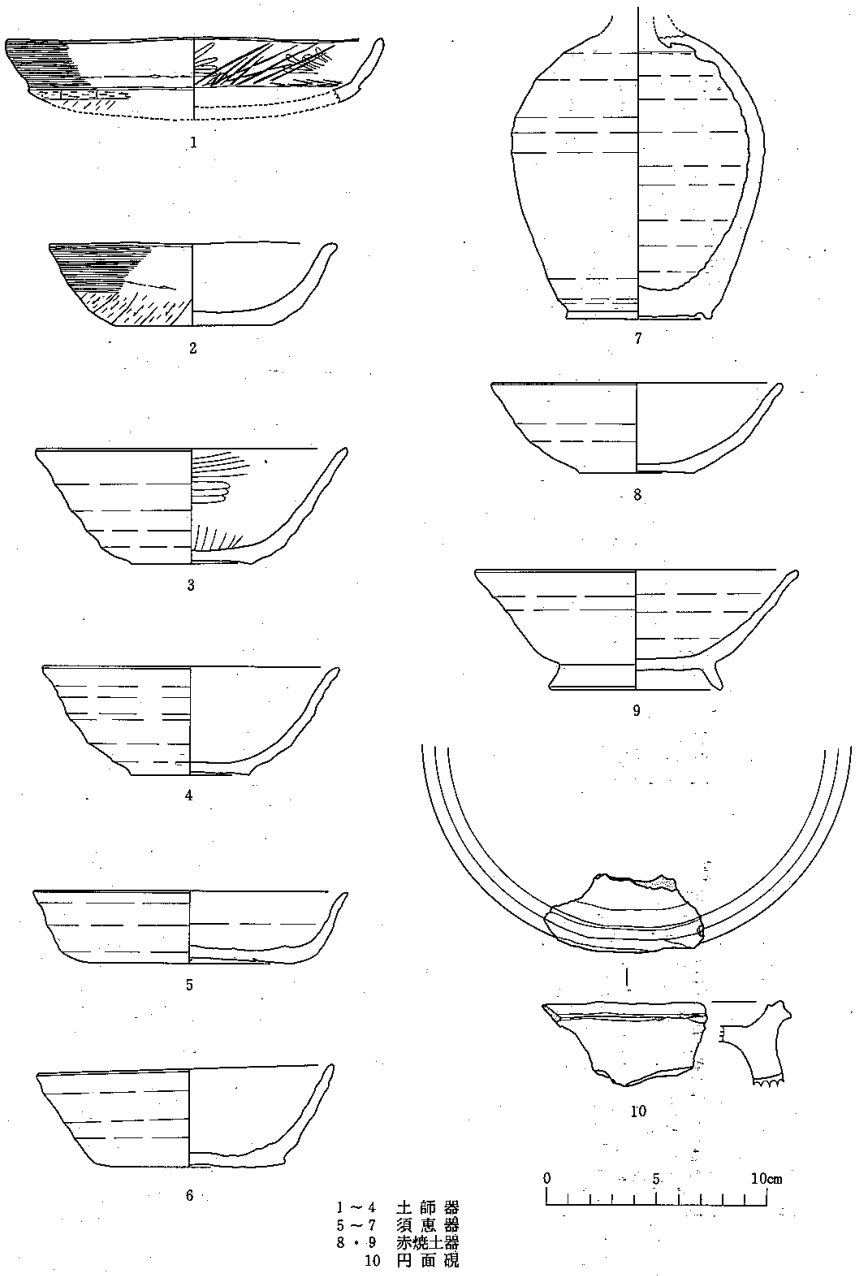
第27図 出土遺物II（建物基壇跡・その周辺出土の瓦）



第28図 出土遺物Ⅲ（建物基壇跡・その周辺出土の瓦）



第29図　出土遺物Ⅳ（建物基壇跡・その周辺出土の瓦）



1～4　土師器
5～7　須恵器
8・9　赤焼土器
10　円面硯

第30図　出土遺物Ⅴ（建物基壇跡・その周辺出土の瓦）

6. 考察

調査によって多数の遺構・遺物が発見されている。しかし、「遺跡の範囲確認」に重点を置いた調査であったため、遺構検出後十分な精査を行なっていない。また、遺物整理も未だ終了していない。したがって、ここでは現状における問題点の整理と考察を行なうことにしたい。

遺構

今回の調査では、建物基壇跡・掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土壙・土塁状遺構・溝遺構などが発見されている。その概要については既に述べたので、ここでは建物基壇跡についてさらに検討を加え、その他については特徴を表としてまとめるにとどめたい。

建物基壇跡　発掘調査の結果、本遺構の袴徴は次のようにまとめることができる。

1. 南辺・北辺約14.3m・東辺・西辺約11.4mの東西に長い長方形で、その比が1:1.25である。
2. 東辺・西辺の方向はほぼ真北である。
3. 外周部分には0.8～1.0mの幅で、円礫が数段重なった状態で認められた。
4. 遺構およびその周辺から多量の瓦が出土している。

第4表　一の関遺跡発見遺構一覧

遺構名	遺構の特徴および遺物の出土状態	出土遺物
建物基壇跡	○東西南北辺の比1：1.25の長方形（南・北辺：14.3m、東・西辺：11.4m） ○東・西辺の方向は磁北から約7°東に偏っている。 ○外周部分とその内部から構成される。外周部分は円礫を数段重ねた石組帯。 ○周辺から古代の瓦が多量に出土している。 ○過去に土壇状の高まりがあった地点。	基壇跡から雷文縁複弁蓮華文軒丸瓦出土。その周辺から各種瓦と須恵器坏（底部ヘラ切り）
第1掘立柱建物跡	○柱穴2個（掘り方の長・短軸：約1m）発見。	
第2掘立柱建物跡	○数棟の建物跡が重複している。 ○柱穴（掘り方）は長短軸約1.4mの方形で、柱間寸法は約3m。 ○柱穴配置から4間×4間の建物跡が推定されるが、正確な規模は不明。 ○柱穴配置の方向は磁北から約7°東に偏っている。	瓦：樹枝文軒丸瓦・平瓦（格子・縄叩き目） 土師器：国分寺下層式 赤焼土器
第3掘立柱建物跡	○数棟の建物跡が重複している。性格不明。	
竪穴住居跡	○各地点において数軒の竪穴住居跡が重複している。 ○平面形はいずれも、方形もしくは長方形である。 ○住居跡内堆積土から土師器・須恵器が出土する。	土師器：国分寺下層式 須恵器
土壙	○各地点から発見	
土塁状遺構	○南北方向にのびる。 ○積土が土塁的である。 ○積土中から、古代の瓦・須恵器などが出土する。	瓦：玉縁付丸瓦（有段）平瓦（縄叩き目） 須恵器
溝遺構	○各地点から東西方向にのびる溝が発見されている。 ○形態・規模は多様である。 ○溝内堆積土から古代の瓦・土師器などが出土する。	瓦：交叉唐草文軒平瓦・平瓦（格子・縄叩き目）・丸瓦 土師器・須恵器

また、この地点はかつて、土壇状の高まりや礎石らしい石の存在、瓦の散布があったことなどが村山・内藤によって確認されていた。

本遺構と規模・形態などの点で類似するものは菜切谷廃寺の基壇跡（伊東:1956）である。伊東はこれを建物跡の基壇跡としている。この基壇跡は長辺と短辺の比が、1:1.18の比をもつ長方形で高さ1.4mの壇である。壇の南北線は「磁南北と7°の偏差があり」、ほぼ真北と一教している。また、この壇は「周囲に安山岩の河原石を積みあげ側壁」とし、その内部に、「黄色土を積み上げ・・・・・・・中略・・・・・・叩き固めたもので、非常に固」い。さらに壇の上には、原位置から移動してはいるが礎石と思われるものが1個あるような菜切谷廃寺建物基壇跡の特徴は、一の関遺跡のものとほぼ共通している。したがって、本遺跡の場合も建物基壇跡と考えられる。また、円礫の配された外周内部に黄色粘土の積み上げ部分がみられないのは、上部が削平を受け、破壊されてしまったものと思われる。

以上から、本遺構は建物基壇跡の基底部と考えられる。

遺物

今国の調査で出土した遺物には、瓦・土師器・須恵器・赤焼土器などがある。

瓦　本遺跡出土瓦で比較的特徴が明瞭なものは軒丸瓦・軒平瓦である。軒丸瓦には雷文禄複弁護華文・重弁蓮華文・素弁蓮華文・鋸歯文禄細井蓮華文・珠文緑素弁連翠文・重圏文・樹枝文のものがある。軒平瓦は交叉唐草文のものだけである。量的に多いのは雷文禄複弁蓮奉文軒丸瓦で、その他は少ない。そのため、軒丸瓦と軒平瓦の組み合せ上の関係はわからない。

次に、本遺跡と類似した瓦を出土している菜切谷廃寺（伊東:1956）・伏見廃寺（佐々木:1971）・多賀城廃寺（伊東他：1970）・多賀城跡（宮多調:1969、1970）などの官衙および寺院跡の場合と比較してみたい。

各遺跡における出土瓦のあり方を整理して示したものが第5表である。この表をみると、一の関遺跡と共通した瓦を含むのは菜切谷廃寺・多賀城跡・多賀城廃寺・伏見廃寺である。この中で3種類以上の共通した瓦を含み、類似した瓦組成を示すのは菜切谷廃寺・伏見廃寺である。また、一の関遺跡で主体を占める雷文禄複弁蓮華文を含むのは菜切谷廃寺に限られる。しかし、菜切谷廃寺では雷文禄複弁蓮華文軒丸瓦は瓦の量的組成の上で主体を占めない。したがって、雷文禄複弁蓮華文軒丸瓦を主体として、重弁蓮華文・素弁蓮華文・鋸歯文禄細井蓮華文・珠文緑素弁蓮華文・重圏文・樹枝文軒丸瓦からなる一の関遺跡は、瓦組成の上で極めて独自性の強いものと言える。また、瓦窯跡における類例と比較すると次のようになる。本遺跡で主体を占める雷文禄複弁蓮華文軒丸瓦を出土する瓦窯跡は現在県内で確認されていない。本遺跡のものとは僅かに形態的に異なるが、県外では福島県会津若松市山口瓦窯跡（小滝:1971）に類例をみることができる。

本遺跡をはじめ、多賀城跡・多賀城廃寺・菜切谷廃寺で出土している鋸歯文禄細井蓮華文軒丸瓦は、日の出山瓦窯跡（宮城県教委:1970）で出土している。日の出山瓦窯跡は本遺跡の南側にあり距離的にも非常に近い。

樹枝文軒丸瓦は岩出山町合戦原瓦窯跡（内藤:1968）に類例がある。

平瓦では格子叩き目をもつものが、本遺跡北西約6kmにある色麻村高根瓦窯跡で発見されている。

第5表　各遺跡の軒丸瓦一覧

遺跡名 / 軒丸瓦の種類	一の関遺跡		菜切谷廃寺		伏見廃寺	多賀城廃寺	多賀城跡	陸奥国分寺跡
	発掘資料	表採資料	発掘資料	表採資料				
雷文縁複弁蓮華文	○		○					
雷文縁複弁蓮華文								○
変形複弁蓮華文			○					
多賀城式重弁蓮華文		○	○		○	○	○	
陸奥国分寺式重弁蓮華文						○		○
山田寺系重弁蓮華文					○			
重弁蓮華文	○			○	○			
素弁蓮華文	○							○
鋸歯文縁細弁蓮華文	○		○			○	○	
素縁細弁蓮華文						○	○	○
珠文縁素弁蓮華文	○				○			
重圏文	○			○		○	○	○
樹枝文	○		○		○			
丸十字文		○	○					
四弁華文			○		○			
八弁華文			○					
宝相花文						○	○	○
異形華文						○	○	
歯車文						○	○	○
桜華文								○

土器　本遺跡出土の土器には、土師器（坏・甕）・須恵器（坏・甕・瓶・甕）・赤焼土器（坏）があった。土師器坏は3種類に分類された。器形・製作技法などの特徴から、①は栗囲式、②は国分寺下層式、③は表杉ノ入式に属するものと思われる（氏家:1957、1967・桑原三:1976）。須恵器の坏は3種類に分類されるが、蓋・瓶・甕とともに栗囲式～表杉ノ入式の土師器に伴うものである。赤焼土器には坏と高坏があるが、これらは一部で須恵系土器、あかやき土器などと呼ばれ、表杉ノ入式の土師器に伴うことがたびたび指摘されている（小笠原:1976・桑原:1976）。

遺跡の構成

これまでに述べてきた事柄をもとにしながら、一の関遺跡の歴史的性格及びその年代について検詩を加えたい。

今回の調査で発見された遺構は、建物基壇跡・掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土壙・土塁状遺構・溝遺構である。

基壇をもつ建物跡は菜切谷廃寺跡・伏見廃寺跡・陸奥園分寺跡・多賀城廃寺跡・多賀城跡などのような古代の寺院や官衙に一般的にみうけられるものである。したがって、一の関遺跡の建物基壇跡も古代の施設として位置づけることができる。

次に出土遺物を検討すると、瓦・土師器・須恵器・赤焼土器・円面硯・土錘がある。

土師器には栗囲式・国分寺下層式.表杉ノ入式がある。これらは7～12世紀のものと考えられる。須恵器もこれらの土師器と同様な時期のものと推定される。

瓦は遺跡全体からも出土するが、特に基壇周辺に集中している。これらの瓦は組成の上で菜切谷廃寺や伏見廃寺の場合と類似している。菜切谷廃寺・伏見廃寺は奈良時代～平安時代中期のものと考えられている（伊東:1956）（佐々木：1971）。また、出土瓦の一部には日の出山瓦窯跡の製品と類似しているものがあり、その供給関係も指摘されている（進藤・高野・渡辺:1975）。日の出山瓦窯跡の瓦は多賀城や多賀城廃寺などにも供給されており、奈良時代中期ごろと考えられている（宮城県教委:1970）。また、一の関遺跡で主体をなす雷文禄複弁蓮華文軒丸瓦は福島県山口瓦窯跡で出土し、奈良時代のものとされている（小滝：1971）。この他、樹枝文軒丸瓦・珠文緑素弁蓮華文軒丸瓦は文様や製作技法から10世紀頃の製作年代が推定されている（工藤:1968）。

以上のように、一の関遺跡の年代は土師器などから7～12世紀、瓦から8～10世紀と推定される。さらに、主体となる瓦が雷文禄複弁連率文軒丸瓦であることなどから、8世紀を中心としたものと思われる。

遺構・遺物の検討の結果、一の関遺跡は未だ不明な点は多いが、古代の寺院跡ないし城柵跡（色麻柵）・官衙跡（色麻郡衙・色麻駅舎）とみるのが妥当であろう。

遺跡の範囲

従来一の関遺跡は色麻柵との関連において、その範囲が度々論議されてきた。今回の調査も、一の関遺跡の歴史的性格を解明すると同時に、その範囲を確認しようとするものであった。ここでは、遺跡の範囲を理解するに当って、発掘の結果得られた事実・踏査によって得られた事実を基礎資料として提示し、検討を加えることにする。

発掘調査は曽根田から要害へのびる傾斜面を対象として行なった。トレンチ調査を主体としたため発掘面積が狭く、遺跡の性格を解明するには不十分なものであった。しかし、各調査

区において何らかの遺構・遺物が検出されたことは、発掘区域が一の関遺跡の範囲の中に含まれることを示している。その中で、建物基壇跡や掘立柱建物跡などが検出されたことは、遺跡の歴史的性格を考えるうえで極めて重要なものであった。

踏査の結果、発掘調査を実施した部分には、瓦・土師器・須恵器など古代の遺物が相当量分布していた。さらに、その周囲に踏査の対象を拡大したところ要害地区・京壇林地区・真山官林地区狂とでも遺物（瓦・土師器・須恵器）の散布が認められた。しかし、遺物の散布する面積が広大であったこと、さらには遺跡の範囲を明確に示すような地形的変化がなかったことから、遺跡の範囲を限定することはできなかった。

一の関遺跡の範囲については村山貞之助の見解がある（村山:1931a・b）。村山は一の関遺跡を色麻柵に擬定し、その範囲を「南は京壇林から連南を経て御屋敷前に至る十六町、東は御屋敷前から木戸脇を経て北目に至る十八町、北は北目から御伊勢坂を経て薬師堂・釜渕に至る十町、西は薬師堂から保地ノ目を経て京壇林に至る十八町を境とする東西十六町、南北十八町」に求めた。

今回の調査では、村山の見解が正しいか否か早急に結論を出し得る成果は得られなかった。しかし、発掘および踏査の結果、遺跡の範囲が発掘調査を実施した地区よりもさらに広いこと、それらが村山の設定した範囲の中にすべて含まれてしまうことが明らかとなった。このため、遺跡の範囲を正確に把握するには、今後とも村山の設定した範囲を含めて、さらに広い地域にわたる綿密な分布調査が必要と考えられる。

7. まとめ

1. 一の関遺跡は大正時代以来、天平の五柵のひとつである色麻柵の有力な擬定地とされてきた。今回の調査は、四釜地区の県営圃場整備事業に伴い、遺跡の性格と範囲を確認するためのものであった。また、それは一の関遺跡に対するはじめての発掘調査でもある。

2. 調査の成果としては、建物基壇跡・掘立柱建物跡・竪穴住居跡などの遺構と、多量の瓦・土師器・須恵器・円面硯などの遺物が発見された。遺構・遺物の検討から、本遺跡は古代の寺院跡・城柵・官衙跡のいずれかである可能性の強いことが明らかとなった。

3. 遺跡の年代は出土した瓦や土師器から、ほぼ7世紀から12世紀までに位置づけられ、8世紀頃に中心をおくものと推定される。

4. 今回の調査によって、一の関遺跡が東北地方さらには日本の古代史研究にとって重要な位置を占めることが明らかにされた。本遺跡の歴史的解明は、今後のより精密な調査にまつところが大きい。

5. 遺跡の範囲は、発掘調査を実施した地区よりもさらに広いことが明らかとなった。

注

注1. この写真は佐々木が内藤の許可を得て、1969年9月1日に複写したものである(佐々木:1971)。

注2. 『延喜式』巻三の「延喜式神明帳」には「色麻郡ー座名神大社、伊達神社」とある。

注3. 西側および一部の南側外周部では・石組の下が溝状になっていたため、写真撮影による記録を作成した。

引用参考文献（アイウエオ順）

ア　伊東信雄（1955）：「宮城県加美郡加美郷古墳」『日本考古学年報』4

――――――（1956）：「菜切谷廃寺跡」『宮城県文化財調査報告書』第2集

――――――（1957）：「古代史」『宮城県史』Ⅰ

――――――（1967）：「古代の城塞ー東日本」『日本の考古学』Ⅲ

伊東信雄他（1970）：「多賀城廃寺跡」『多賀城跡調査報告』Ⅰ

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

――――――（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『山形県の考古と歴史』

小笠原　好彦（1976）「東北地方における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』

カ　工藤雅樹（1962）：「古式重弁蓮華文鐙瓦の製作年代について」『東北考古学』第3輯

――――――（1968）：「平安初期における陸奥国府系古瓦の様相」『日本文化研究所研究報告』別巻第6集

工藤・桑原（1972）：「東北地方における古代土器生産の展開」『考古学雑誌』第57巻第3号

栗田茂治（1923）：「色麻柵の発見」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯

桑原滋郎（1976）：「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』

――――――（1976）：「東北地方北部および北海道の所謂第I型式の土師器について」『考古学雑誌』第61巻4号

経済企画庁総合開発局（1972）：『土地分類図ー宮城県ー』

小井川　和夫（1975）：「上新田遺跡」『日本考古学年報』26

小滝利意（1971）：『居合団地埋蔵文化財発掘調査報告書』

佐々木　茂楨（1971a）：「内藤政恒先生を想う」『歴史考古』第19・20合併号

――――――（1971b）：「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第56巻3号

――――――（1973）：「多賀城と玉造等諸柵」『国史談話会雑誌』豊田武・石井孝両先生退官記念号

清水　東四郎（1932）：「色麻柵」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯

――――――（1938）：「蝦夷古墳群、色麻古墳群」『宮城県史跡名勝天然記念物調査報告』12

――――――（1940）：「色麻柵」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十三輯

進藤・高野・渡辺（1975）「多賀城創建瓦の製作技法」『多賀城跡調査研究所研究紀要』Ⅱ

タ　高橋富雄（1963）：「城柵の配置ー（3）ー色麻柵」『蝦夷』

――――――（1975）：「古代の村と道ー色麻柵への道」『大和町史』

田辺希文編（1776）：『安永風土記御用書出』

ナ　内藤政恒（1974）：『東北古瓦図録集』

新野直吉（1969）：「大野東人と鎮守政策」『古代東北の開拓』

マ　宮城県教委（1970）：「日の出山窯跡群」『宮城県文化財調査報告』第22集

――――――（1976）：「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集

陸奥国分寺跡発掘調査委員会編（1961）：「陸奥国分寺跡」

村山　貞之助（1931a）：「色麻柵について・上」『仙台郷土研究』第一巻九号

――――――（1931b）：「色麻柵について・下」『仙台郷土研究』第一巻十号

――――――（1964）：「古墳及び遺物包含地・古碑」『中新田町史』

第6表　一の関遺跡関係年表

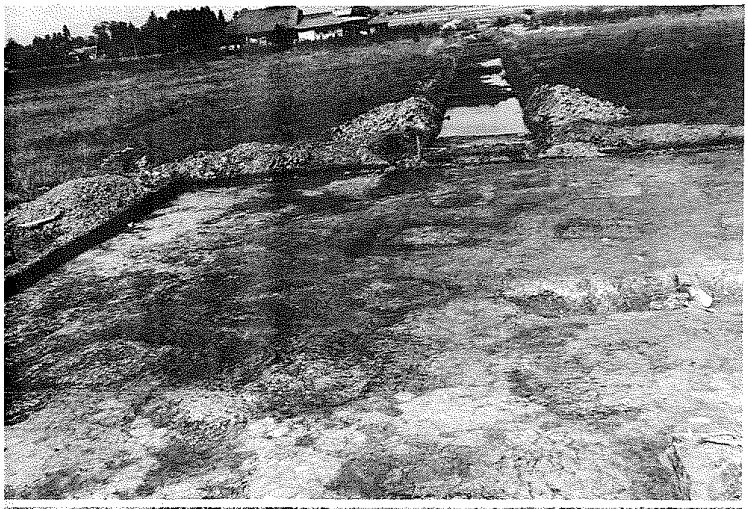
	日本年号	西暦	事項
奈良時代	和銅 3	710	3　平城京に遷都する。
	神亀 元	724	多賀城創建〔多賀城碑〕
	天平 9	737	4　鎮守将軍大野東人、賀美郡色麻柵を発し、即日、出羽国最上郡大室駅に至る。
			4　多賀柵、色麻柵、玉造柵、新田柵、牡鹿柵等、初見。
	13	741	3　国分寺・国分尼寺建立の詔を発する。
	14	742	正　黒川郡以北十一郡に赤雪が降る。
	15	743	10　大仏造営の詔を発する。
	天平感宝 元 天平勝宝 元	749	2　陸奥国より初めて黄金を献上する。
	天平勝宝 4	752	2　多賀以北の諸郡の調庸は黄金を輸すこととする。
			4　大仏開眼会。
	天平宝字 2	758	12　桃生城造営
	神護景雲 元	767	10　伊治城造営
	宝亀 11	780	2　覚鱉城造営のことおこる。
			3　伊治公呰麻呂の乱おき、多賀城焼かれる。
	延暦 8	789	8　色麻郡はじめ一十箇郡に免税が行われる。
平安時代	延暦 13	794	10　平安京に遷都する。
	16	797	11　坂上田村麻呂、征夷大将軍となる。
	18	799	3　色麻郡に富田郡を併す。
	21	802	胆沢城造営
	弘仁 2	811	閏12　宝亀5年から、この年にいたるまでの38年間、辺境の騒擾状態続く。
	貞観 8	866	正　この年、色麻郡内に鹿島神三社ありとみゆ。
	11	869	5　陸奥国に大地震おこる。
	承平 4	934	閏正　陸奥国分寺七重塔、雷火にあい焼失。
	永承 6	1051	前九年の役がはじまる。

一の関遺跡遠景
（東北上空から）

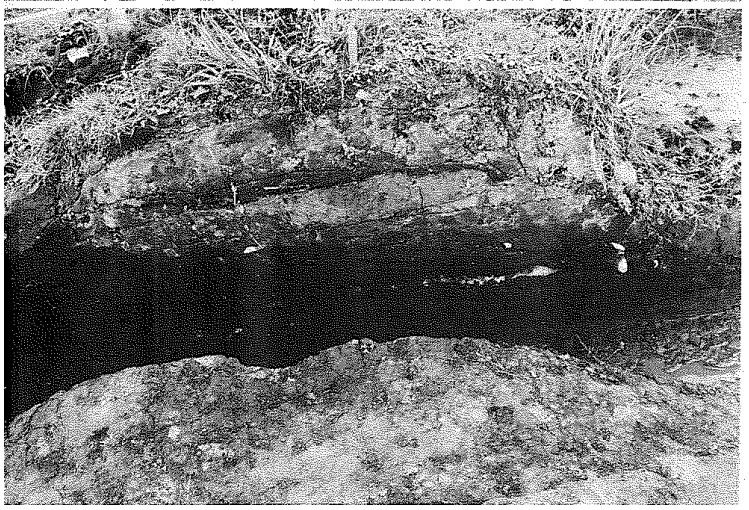
建物基壇跡全景
（北側から）

建物基壇跡北辺近景
（内側から）

掘立柱建物跡全景

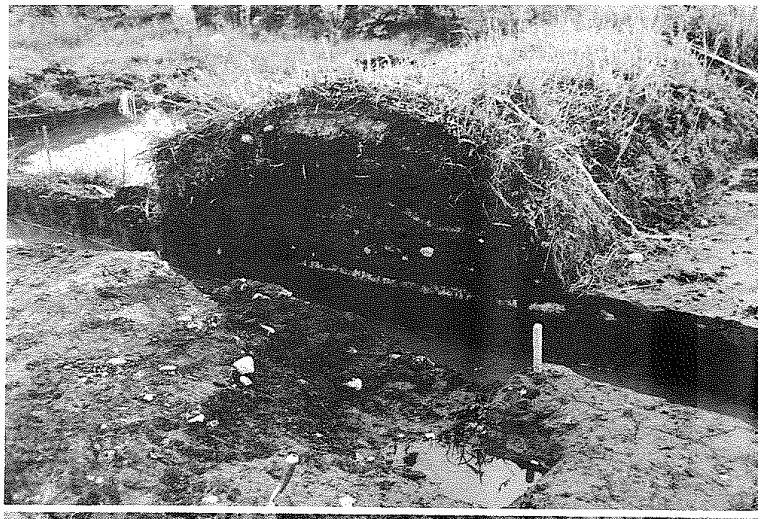


掘立柱建物跡部分景
（西側）



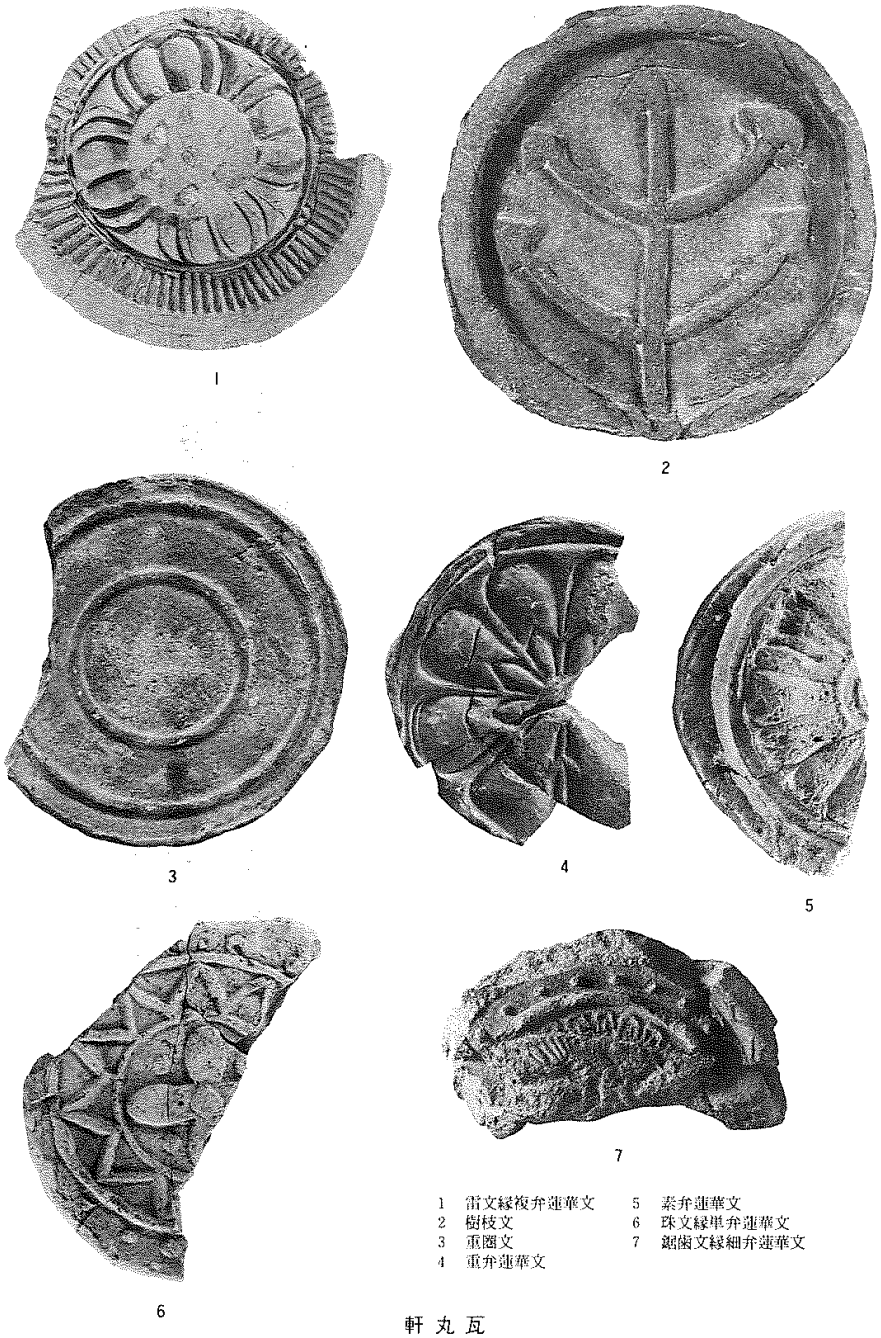
土壁状遺構断面
（北側）

土塁状遺構断面
（南側）



軒丸瓦出土状況
（建物基壇跡北辺）

軒丸瓦出土状況
（第２掘立柱建物跡）



1　雷文縁複弁蓮華文
2　樹枝文
3　重圏文
4　重弁蓮華文
5　素弁蓮華文
6　珠文縁単弁蓮華文
7　鋸歯文縁細弁蓮華文

軒丸瓦

1

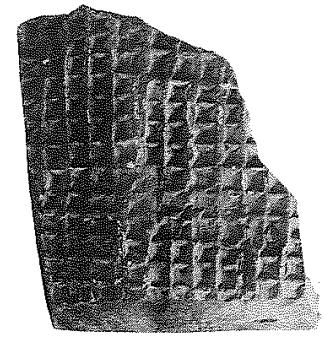
2

3

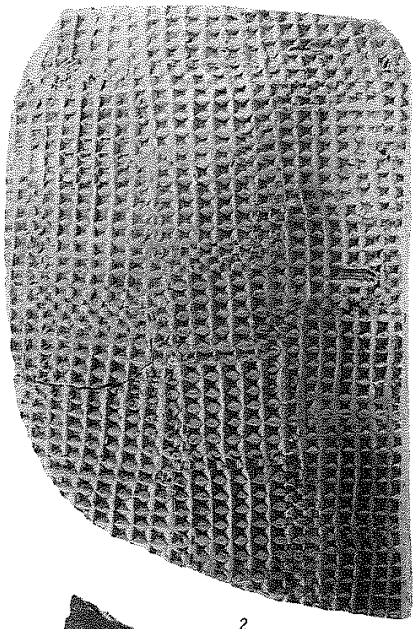
4

1　交叉唐草軒平瓦
2～4　丸　瓦

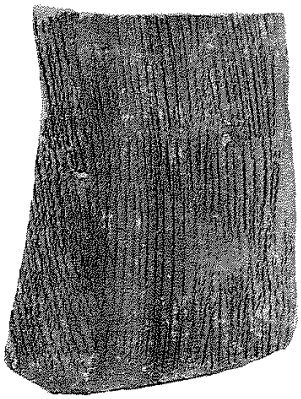
軒平瓦・丸瓦



1



2



3

4

5

1・2　格子叩き目平瓦
3　縄叩き目平瓦
4　花文叩き目平瓦
5　ケズリ痕平瓦

平　瓦

Ⅳ　城館跡（測量調査）

城館跡について

宮城県および東北地方における城館跡の実態は、未だ十分に解明されているとはいえない。しかし、沖積平野や河川・沼沢などに面する丘陵や台地上に立地し、土塁や空堀をめぐらし平場をもつ遺跡は、一般に城・館等と呼ばれ、関連する地名として館・大館・古館・館山・館前等も知られている。

館跡の歴史的性格については、「東北古代史の解明という立場から…中略…東北地方（蝦夷地）の経略を志向した朝廷勢力の前進基地であつた城柵と相並んで、これに対抗し、あるいはその支配を受けた土着民（蝦夷）の拠点」とする見解がある（江上地:1958）。また、館は『平安時代末頃、地方の荘園や名田などを生活基盤として生まれた土豪的武士階層が、鎌倉・室町時代を経て、領国大名へと成長する過程で、地域的、歴史的条件に対応しながら築造使用した城館跡』ととらえる時、各地に多数・普遍的に存在する館跡の研究は、地域の武士の在り方・変遷をさぐる上で重要なもの」（藤沼:1975）とする見解も提出されている。

城館跡についてまとめられたものとしては、『仙台領古城書上』[注1)]がある。それは仙台藩が江戸時代の延宝年間（1673～1680）に幕府に提出したもので、仙台領21郡内536の城館跡が書き上げられている。仙台領は現在の宮城県の他に岩手県と福島県の一部を含むので、対象とされた地域は、非常に広いものとなっている。収録されているものの大部分は古代末から中世～近世に属し、この中には多賀城のように古代陸奥国の国府であったものも含まれている。しかし、仙台城や白石城をはじめとして、仙台藩の一門・一家・準一家・家老・着座等の大身の居館のように、その時点で現に在住者のあるものについては数えられていない。その理由としては、「村書上」でなく「城館主書上」にもとずくものであったためではないかと考えられる。したがってこれらを含めると、当時実際に知られていた城館（跡）は536をうわまわることが推定される。

その後、紫桃正隆は旧仙台領内の城館跡を精力的に踏査し、その成果は『仙台領内古城・館』（紫桃:1972～1974）としてまとめられている。収録されている城・館跡は1350であるが、この場合も旧仙台領内を対象としているため。現在の宮城県よりも広い地域にわたっている。

1976年10月に『宮城県遺跡地名表』および『宮城県遺跡地図』（宮城県教委:1976）が発行され、県内に分布する4231の遺跡が収録された。その内容は1976年10月1日までに確認されたものであるが、その中で城館跡は1003ケ所で全体の23.7%を占めている。

それらの中で、発掘調査の行なわれたものは、次の12城館跡である。

岩切城跡（仙台市・利府町）　湯ノ倉館跡（白石市）　飯詰館跡（白石市）　地蔵院館跡（白石市）　宮城跡（蔵王町）　御所館跡（大和町）　八谷館跡（大和町）　鶴巣館跡（大和町）　駒場小屋館跡（大街村）　新庄館跡（高清水町）八沢要害館跡（築館町）　鶴の丸館跡（志波姫町）

発掘調査の規模はそれぞれ異なり、また、全体の構造や内容を知りうるようなものはない。しかし、発掘調査によって次のようなことが次第に明らかになってきた。

①いずれも平場・土塁・空堀をもっている。

②平場からは掘立柱建物跡の他種々の遺構が発見されている。御所館では、井戸跡や土倉も発見されている。また、八谷館では炭化米が入っていた貯蔵穴のような遺構も認められた。

③平場間には通路があり、それらに関連する門跡が発見される場合が多い。

④出土遺物として陶磁器・石製品（石臼・石硯）・金属製品（鉄釘・刀子・和鏡・古銭）などがある。

⑤出土する陶磁器をみると、市圏製青磁・白磁・染付、国内産陶器（大甕）で、いずれも中世以降と思われるものである。遺構と関連するもので古代のものは認められない。したがって、これらの城館跡の多くは、中世以降に築造・使用されたものと思われる。

このように、城館跡の構造や歴史的な後割・城館跡における諸活動の内容が徐々に解明されつつある。また、中世以降のものが多いことから、この時代の政治史や経済史・文化史さらには技術史などを検討するうえで極めて意義深いものと考えられる。しかし、既に述べたように城館跡全体におよぶ発掘例がないこと、さらに城館跡の中には範囲確認調査や現状調査が不十分なものも多いことから、研究はまだその緒についたばかりと言わざるをえない。

城館跡は最も身近にある遺跡の一つである。それは城館跡分布集計表（第7表）でもわかるように県内のどの市町村にも存在している。これらの城館跡は、その位置や立地と果した役割からみて、地域社会における中核的な存在であったと考えられる。城館跡に対する人々の関心の高さは、現在史跡公園化され憩いの場として活用されているものが多い点にもあらわれている。

第7表　宮城県内における城館跡（昭和51年10月1日現在）

市町村番号	市町村名	城館跡数	市町村番号	市町村名	城館跡数	市町村番号	市町村名	城館跡数	市町村番号	市町村名	城館跡数
01	仙台市	37	21	宮城町	17	41	築館町	8	61	津山町	5
02	白石市	60	22	利府町	4	42	若柳町	11	62	本吉町	19
03	角田市	42	23	大和町	23	43	栗駒町	26	63	唐桑町	6
04	七ケ宿町	7	24	大郷町	18	44	高清水町	4	64	歌津町	6
05	蔵王町	14	25	富谷町	13	45	一迫町	17	65	石巻市	22
06	大河原町	6	26	大衡村	7	46	瀬峰町	9	66	河北町	22
07	村田町	12	27	古川市	30	47	鶯沢町	5	67	矢本町	7
08	柴田町	14	28	中新田町	10	48	金成町	24	68	雄勝町	2
09	川崎町	10	29	小野田町	14	49	志波姫町	9	69	河南町	14
10	丸森町	25	30	宮崎町	21	50	花山村	3	70	桃生町	13
11	塩釜市	3	31	色麻村	20	51	迫町	10	71	鳴瀬町	8
12	名取市	9	32	松山町	6	52	登米町	5	72	北上町	17
13	亘理町	13	33	三本木町	9	53	東和町	15	73	女川町	3
14	山元町	12	34	鹿島台町	10	54	中田町	20	74	牡鹿町	2
15	岩沼市	4	35	岩出山町	34	55	豊里町	6			
16	秋保町	8	36	鳴子町	13	56	米山町	10			
17	松島町	7	37	涌谷町	4	57	石越町	10			
18	多賀城市	12	38	田尻町	12	58	南方町	5			
19	泉市	12	39	小牛田町	4	59	気仙沼市	52			
20	七ケ浜町	3	40	南郷町	3	60	志津川町	26	合計		1003

広く埋蔵文化財は、文献資料の乏しい時代の人々の生活や文化を明らかにするうえで、欠くことのできない文化遺産である。しかし、近年の急激な地域開発事業の進展に伴って、その保護が種々問題となっている。城館跡も例外ではない。城館跡はその立地条件から各種の土取り場・採石場・工場や住宅そしてゴルフ場の造成などの対象とされ、破壊の危機にさらされているものが少なくない。

こうして城館跡は、今や保護保存対策の検討を強くせまられている。城館跡の範囲確認調査や遺構の現状調査、精密な実測図の作成等はそのための基礎作業として積極的に推進する必要がある。

以下に収録した6城館跡に関する実測図は、基礎資料の一部として、宮城県教育委員会が指導して作成したものである。これらを作成する契機となったのは、すべて何らかの開発行為にもとづくものであった。そのため、泉市の長命館跡を除いては、実測範囲が全体に及ぶものがなく、それぞれは城館跡の一部分にすぎない。遺跡保護への関心がとみに高まりをみせている今日、これらが参考例になり、各地で城館跡の実測図が作成されるよう望まれる。

注1）『仙台叢書4』所収「仙台古城記」

注2）「仙台古城記」の解説では、その数は700余城にのぼるだろうと述べている。

引用・参考文献（ア・イ・ウ・エ・オ順）

ア　伊東　信雄（1936）：「秋の踏査記上」『仙台郷土史研究』6の2

――――（1936）：「岩切城地発見の柱穴群」『仙台郷土研究』6の3

江上波夫他（1958）：「館跡ー東北地方における集落趾の研究」

カ　加藤　孝　（1975）：「鴻巣館跡」『日本考古学年報・昭和48年度』

佐久間洞巌（1719）：「奥羽鶴蹟聞老志」『仙台叢書』別巻

佐々木慶一（1957）：「宮城県中世史」『宮城県史』1

佐藤　信要（1741）：「封内名蹟誌」『仙台叢書』8

柴桃　正隆（1973）：「仙台領内古城・館」第1～4巻

タ　田辺　希文（1772）：「封内風土記」『仙台叢書』

（1776）：「安永風土記御用書出」『宮城県史』24～26

ハ　藤沼　邦彦（1976）：「東北地方の城館」『東北考古学の諸問題』

マ　宮城県教育委員会（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）ー宮城跡ー」『宮城県文化財調査報告書』第24集

――――（1972）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（白石市・柴田郡村田町地区）ー湯ノ倉館跡ー」「宮城県文化財調査報告書」第25集

――――（1972）：「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書（地名表・試掘調査概報（白石・高清水地区））ー地蔵院館跡ー」『宮城県文化財調査報告書』第27集

――――（1973）：「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報ー飯詰館跡」『宮城県文化財調査報告書』第30集

――――（1973）：「東北自動軍道関係遺跡発掘調査略報（白石市・仙台～大和町地区）ー八谷館跡」『宮城県文化財調査報告書』第31集

――――（1975）：「宮城県文化財発掘調査略報（昭和48・49年度分）ー御所館跡・駒場小屋館跡・新庄館跡・八沢遺跡・鶴の丸館跡ー」『宮城県文化財調査報告書』第40集『宮城県文化財調査報告書』第42集

――――（1976）：「宮城県文化財発掘調査酪報（昭和50年度分）ー八沢要害遺跡」

――――（1976）：「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集

――――（1976）：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第47集

――――（1728）：「仙台領古城書立之覚」『宮城県史』32

――――（1973）：
（1680）：「仙台領古城書上」『仙台叢書』4

収 録 城 館 跡

城　館　名	遺 跡 番 号	所在地	調査年次	測量範囲
長 命 館 跡	19009	泉市上谷刈長命	昭和51年4　月	館跡全体
赤 生 津 館 跡	55013	豊里町本地杢沢75	昭和50年7　月～10月	館跡中心地区
保 呂 羽 館 跡	52003	登米町寺池道場、金沢山	昭和50年11月	旧三の丸跡地区
丸 山 館 跡	35044	岩出山町下野目・丸山・南山	昭和48年5　月	西廓地区
岩 出 山 城 跡	35043	岩出山町城山1－32	昭和51年12月	旧二の丸跡地区
鶴 丸 館 跡	43035	栗駒町岩ケ崎裏山	昭和51年7　月	蛭子公園部分

収録城館跡参考文献

長命館跡

(1928)：「宮城群誌」
七 北 田 村 (1953)：「七北田村誌」
(1673　：「仙台領古城書上」『仙台叢書』4
1680)：
佐久間洞巌　(1719)：「奥羽観蹟聞老志巻之覚六」『仙台叢書』別巻
(1728)：「仙台領内古城書立之覚」『宮城県史』32
佐 藤 信 要 (1741)：「封内名蹟誌」『仙台叢書』8
田 辺 希 文 (1772)：「封内風土記」『仙台叢書』
(1776)：「安永風土記御用書出」『宮城県史』24
：「封内古城記」『伊達文庫』
保 田 光 則　　：「新撰陸奥風土記」『青華文庫』
柴 桃 正 隆 (1973)：「仙台領内古城・館」第3巻

赤生津館跡

豊　里　町　(1975)：「豊里町史」上
柴 桃 正 隆 (1973)：「仙台領内古城・館」第2巻

保呂羽館跡

登 米 町 史 (1969)：「登米町史編纂資料」6
編纂委員会
(1673～：「仙台領古城書立之覚」『仙台叢書』4
1680)
佐 久 間 洞 巌 (1719)：「奥羽観蹟聞老志巻之八」『仙台叢書』別巻
(1728)：「仙台領古城書立之覚」『宮城県史』32
(1776)：「安永風土記御用書出」『宮城県史』26
柴 桃 正 隆 (1973)：「仙台領内古城・館」第2巻

丸山館跡

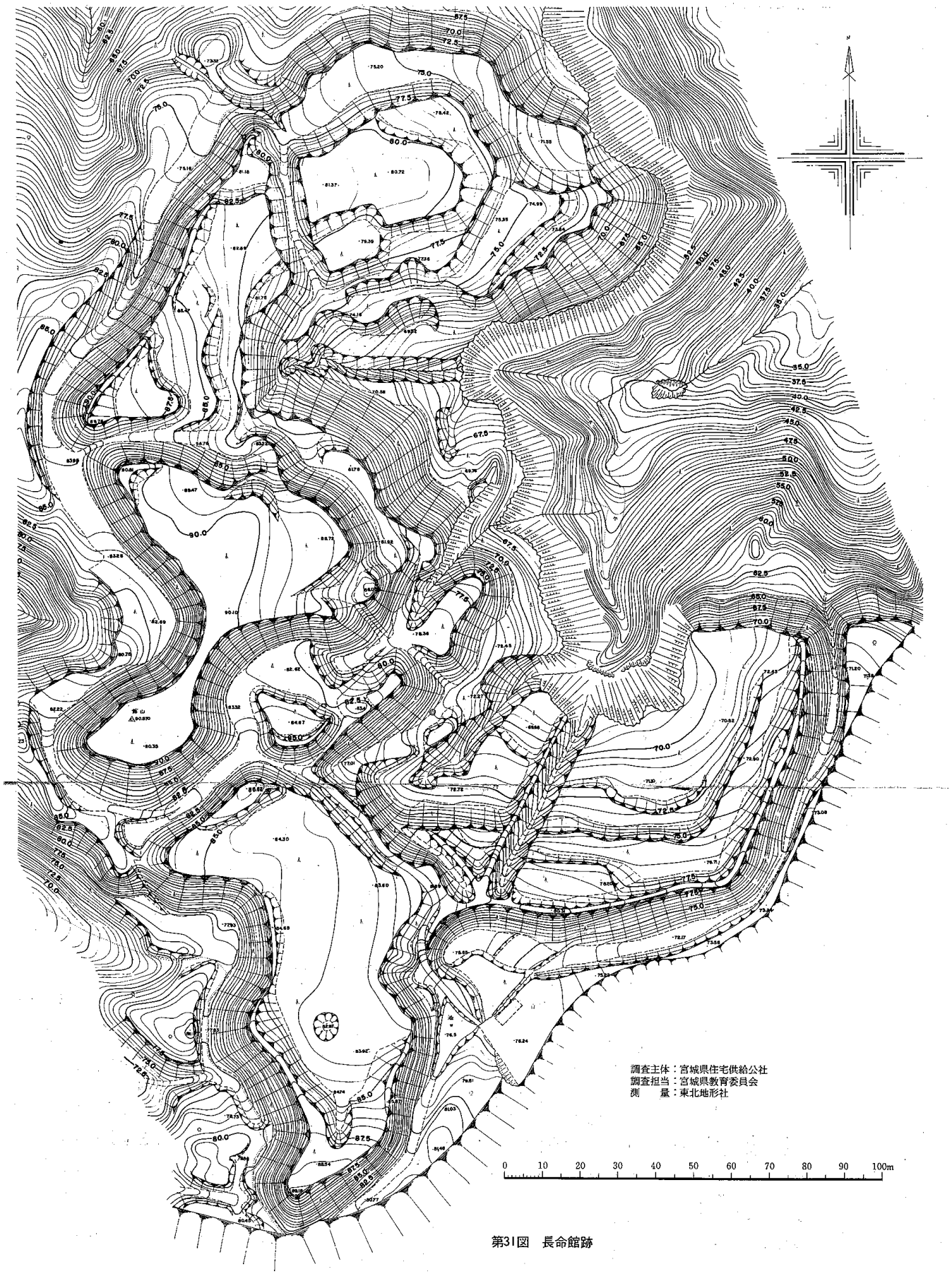
(1929)：「玉造郡誌」
(1912)：「岩出山大観」
岩 出 山 町 (1970)：「岩出山町史」上
(1673～：「仙台領古城書上」『仙台叢書』4
1680)
佐 久 間 洞 巌 (1703～：「奥羽観蹟聞老志巻之八」『仙台叢書』別巻
1710)
(1728)：「仙台領内古城書立之覚」『宮城県史』32
佐 藤 信 要 (1741)：「封内名蹟志」『仙台叢書』8
田 辺 希 文 (1772)：「封内風土記」『仙台叢書』3
(1776)：「安永風土記御用出書出」『宮城県史』25
柴 桃 正 隆 (1973)：「仙台領内古城・館」第3巻

岩出山城跡

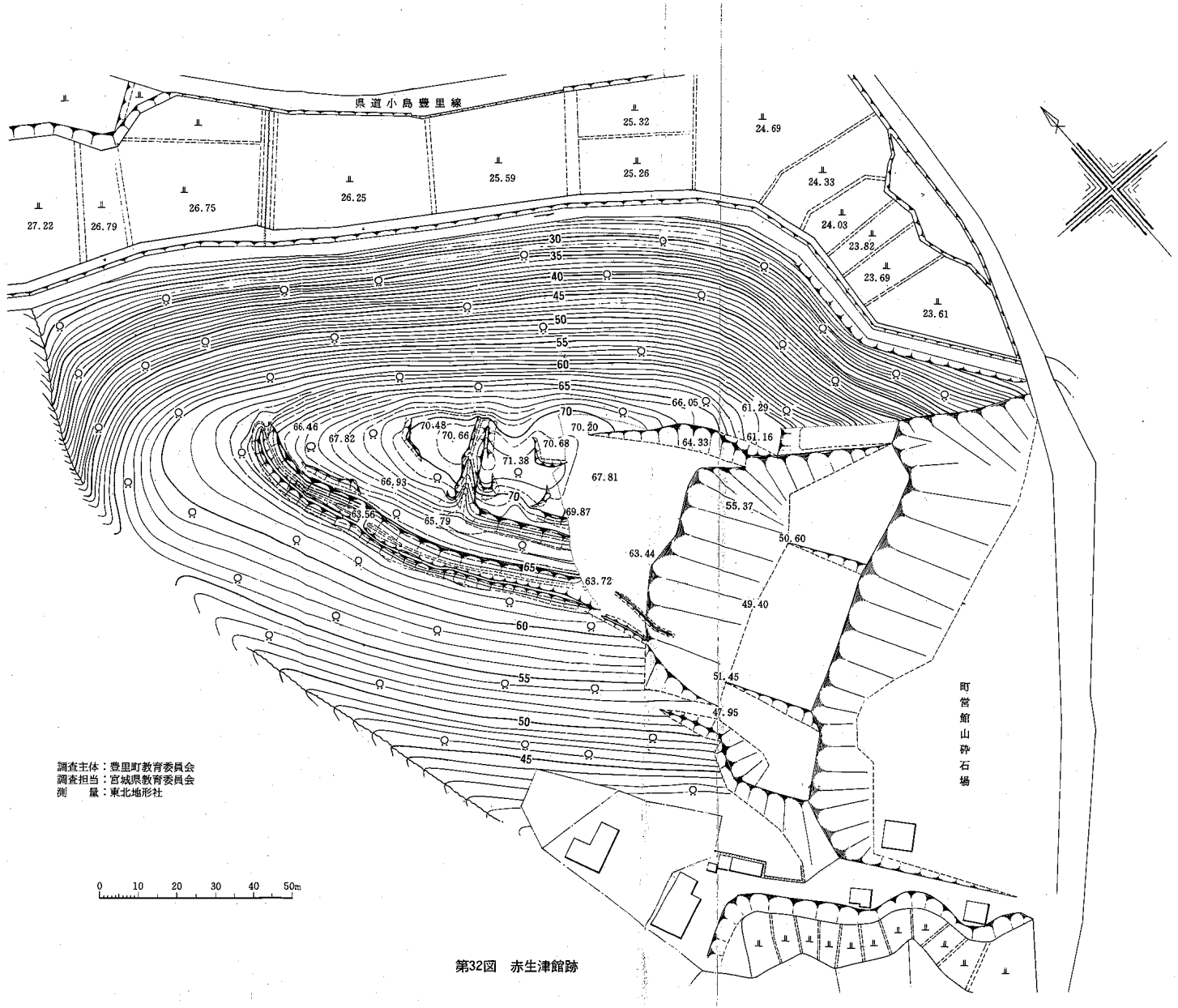
佐 々 木 慶 市　(1957)：「宮城県中世史」『宮城県史』1
(1929)：「玉造郡誌」
(1912)：「岩出山大観」
岩 出 山 町 (1970)：「岩出山町史」上
佐 久 間 洞 巌 (1703～：「奥羽観蹟聞老志巻之八」『仙台叢書』別巻
1710)
鈴 木 省 三　(1927)：「岩出山古城跡」
『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』4
梅 森 省 三 (1930)：「岩出山城及多賀波場跡」
『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告』5
伊 東 信 雄 (1936)：「秋の踏査記・上」『仙台郷土研究』6の2
柴 桃 正 隆 (1973)：「仙台領内古城・館」第3巻

鶴丸館跡

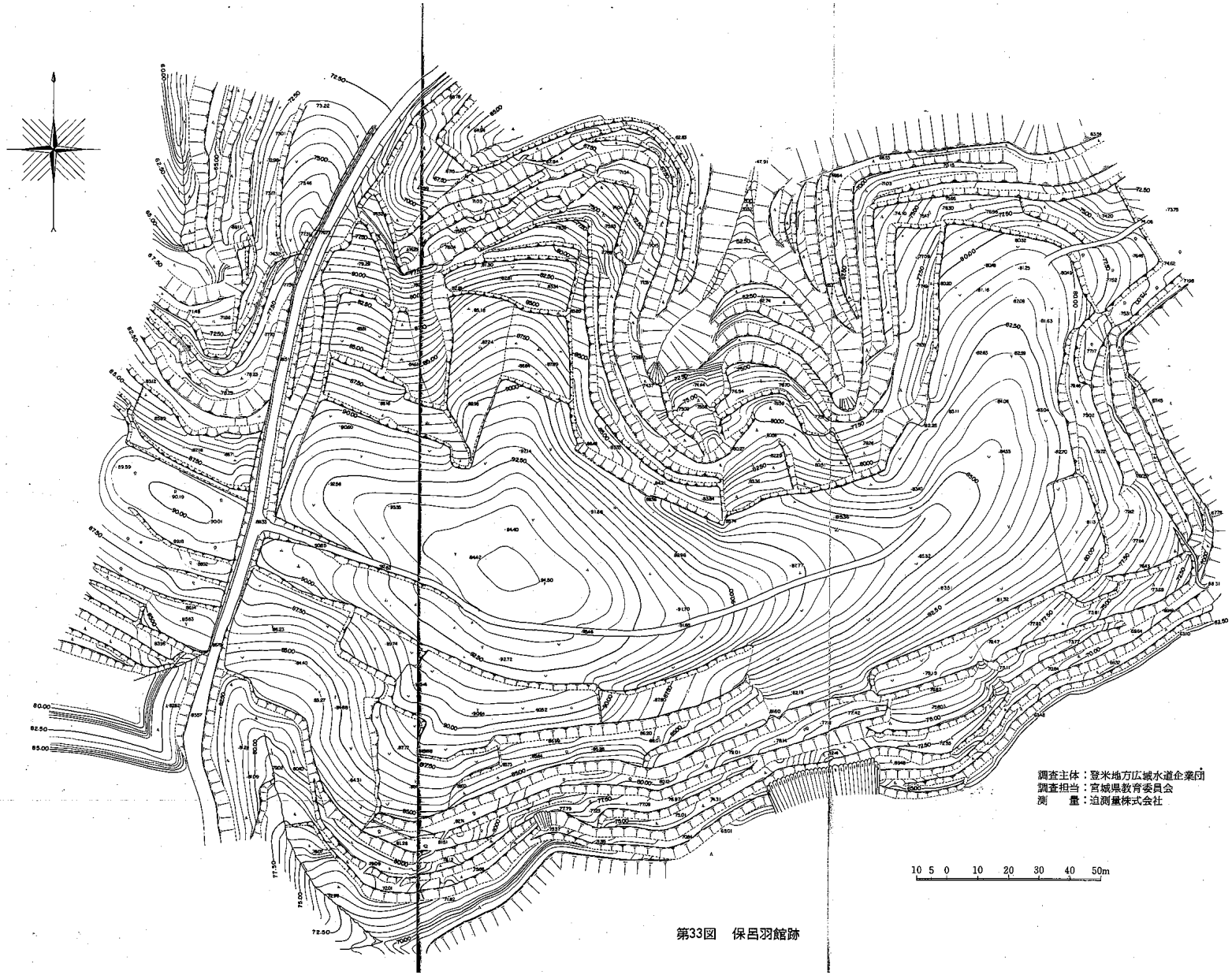
(1918)：「栗原郡誌」
栗 原 町　(1963)：「栗駒町史」
(1673～：「仙台領内古城書上」『仙台叢書』4
1680)
佐久間洞巌　(1719)：「奥羽観蹟聞老志巻之八」『仙台叢書』別巻
(1728)：「仙台領古城書立之覚」『宮城県史』32
佐 藤 信 要 (1741)：「封内名蹟志巻第15」『仙台叢書』
(1776)：「安永風土記御用書出」『宮城県史』28
栗 原 町 教　育 委 員 会　(1972)：「栗駒町の文化財」第1集
柴 桃 正 隆 (1973)：「仙台領内古城・館」第2巻


調査主体：宮城県住宅供給公社
調査担当：宮城県教育委員会
測　　量：東北地形社
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100m

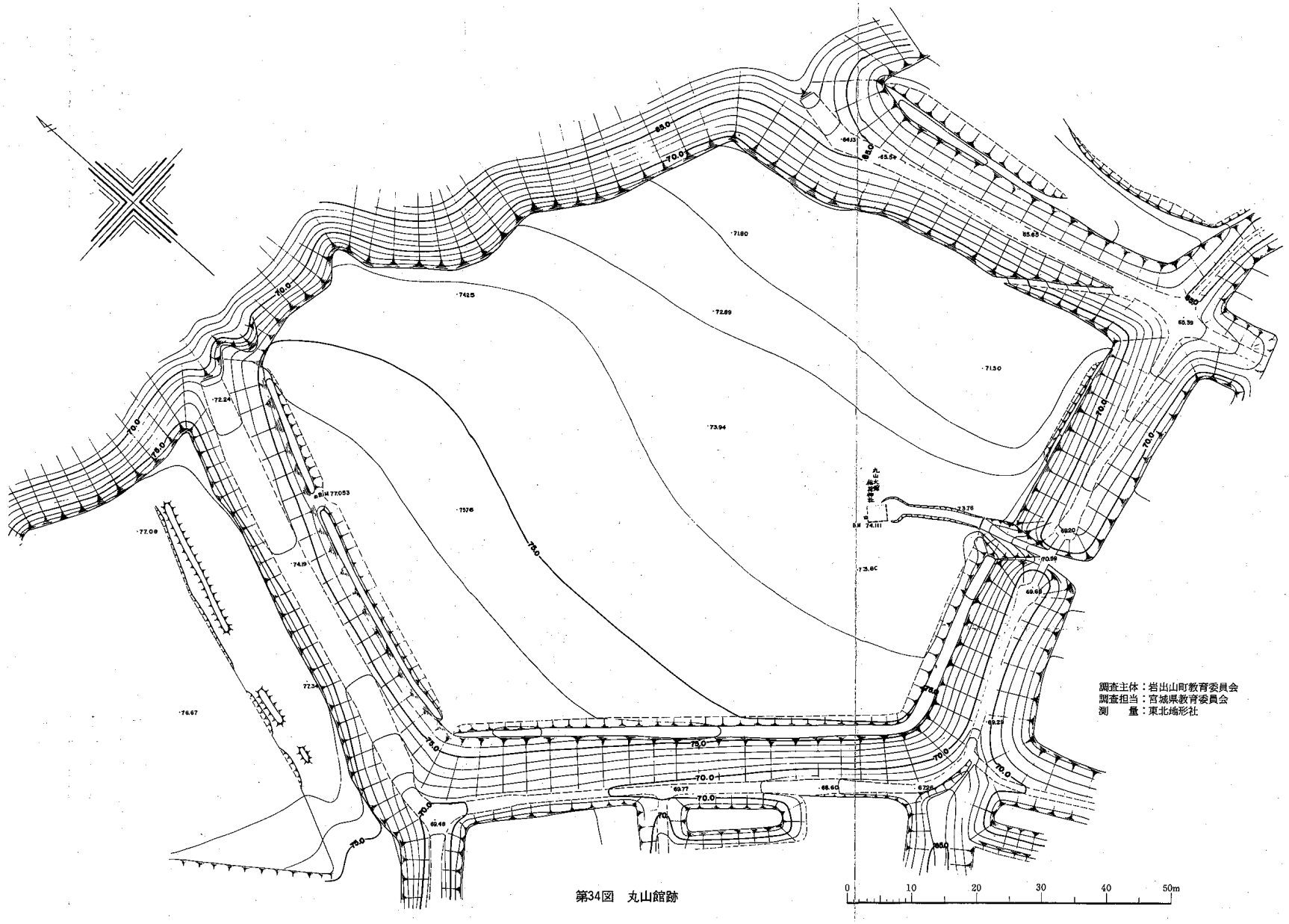
第31図　長命館跡


県道小島豊里線
町営館山砕石場
27.22
26.79
26.75
26.25
25.59
25.26
25.32
24.69
24.33
24.03
23.82
23.69
23.61
30
35
40
45
50
55
60
65
70
66.46
67.82
70.48
70.66
70.68
71.38
70.20
66.05
61.29
64.33
61.16
66.93
67.81
69.87
63.56
65.79
55.37
50.60
63.44
63.72
49.40
51.45
47.95
調査主体：豊里町教育委員会
調査担当：宮城県教育委員会
測　　量：東北地形社
0 10 20 30 40 50m

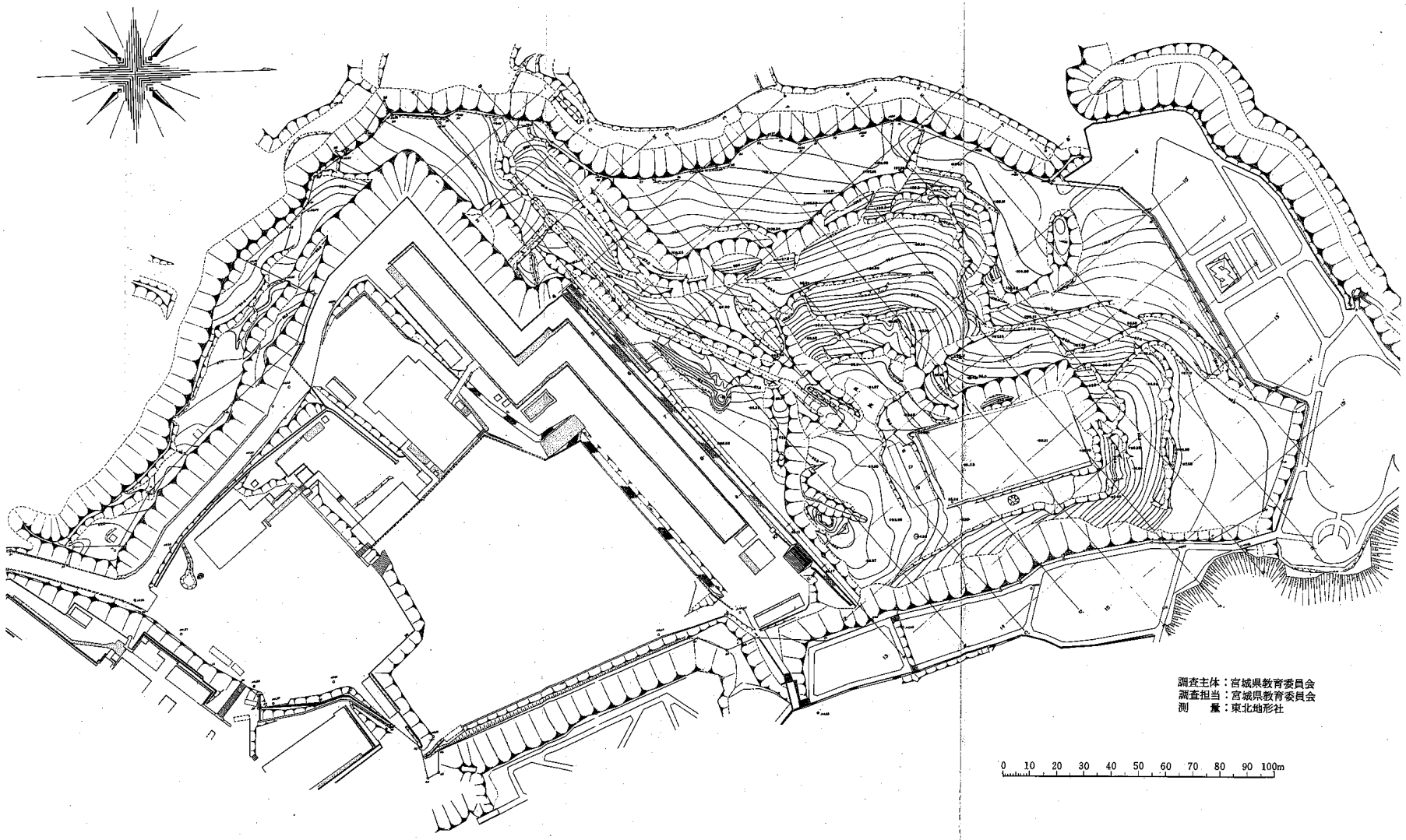
第32図　赤生津館跡


調査主体：登米地方広域水道企業団
調査担当：宮城県教育委員会
測　　量：迫測量株式会社
10 5 0 10 20 30 40 50m

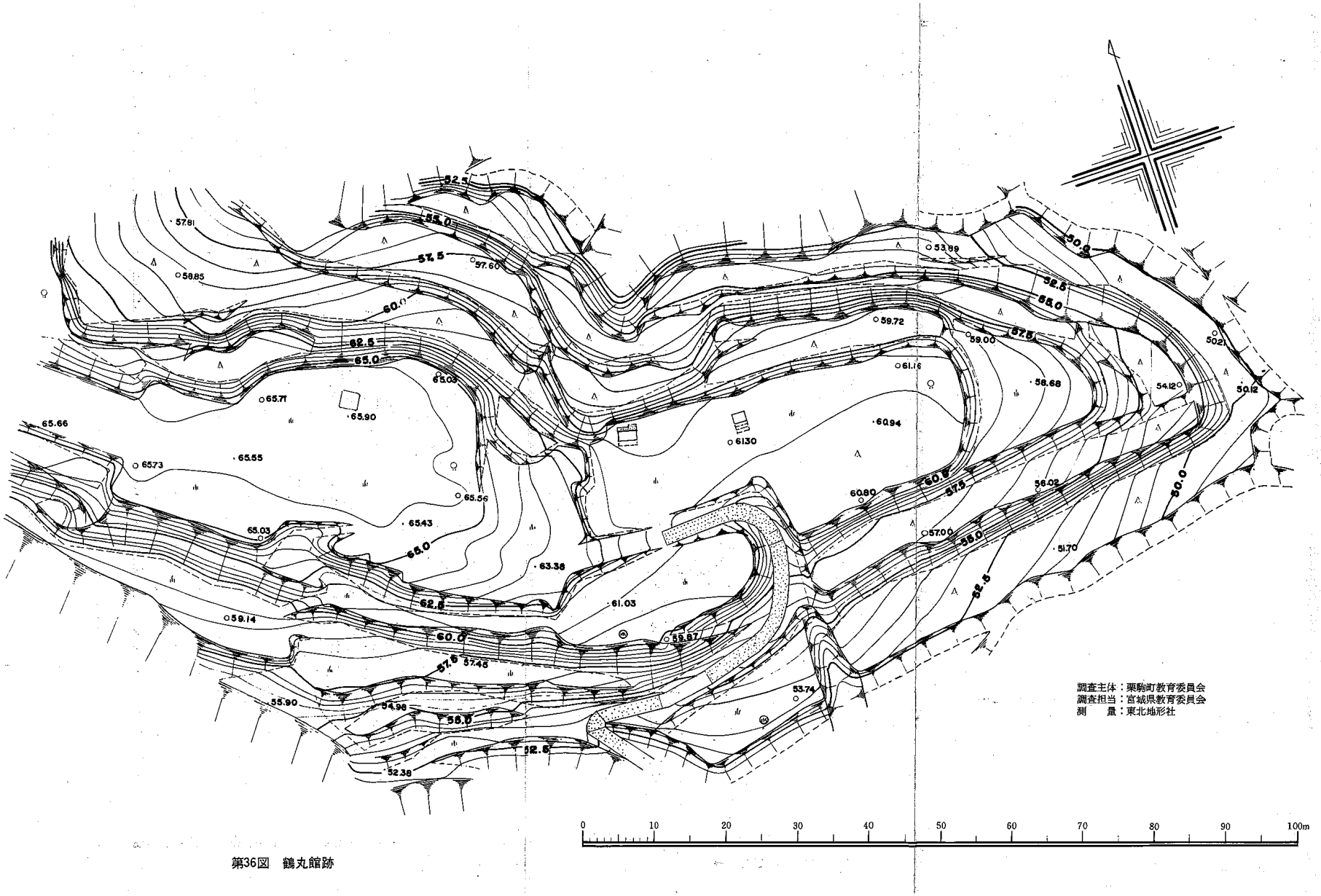
第33図　保呂羽館跡



第34図　丸山館跡


調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育委員会
測　　量：東北地形社
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100m

第35図　岩出山城跡


調査主体：栗駒町教育委員会
調査担当：宮城県教育委員会
測　　量：東北地形社
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100m

第36図　鶴丸館跡

第7表　宮城県文化財調査報告書刊行一覧

刊行年月日	報　告　書　名
１９５２ （昭和29年３月）	宮城県文化財調査報告書第１集「仙台東照宮・遠見塚・かめ塚古墳」
１９５４ （昭和31年３月）	宮城県文化財調査報告書第２集「菜切谷廃寺跡」
１９５６ （昭和33年３月）	宮城県文化財調査報告書第３集「高蔵寺阿弥陀堂・高蔵寺の仏像」
１９６０ （昭和33年３月）	「陸奥国分寺跡発掘調査報告書」
１９６２ （昭和37年３月）	「昭和36年度多賀城発掘調査概報」
１９６３ （昭和38年３月）	「昭和37年度多賀城跡発掘調査概報」
１９６４ （昭和39年３月）	「昭和38年度多賀城跡発掘調査概報」
１９６５ （昭和40年３月）	宮城県文化財調査報告書第８集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報 （崎山囲洞窟・糖塚古墳調査概報・田町裏遺跡・敷味遺跡・合戦原古墳群）」
１９６６ （昭和41年３月）	宮城県文化財調査報告書第９集「宮城県遺跡地名表」
１９６６ （昭和41年３月）	宮城県文化財調査報告書第10集「宮城の民俗（民俗資料緊急調査報告）」
１９６６ （昭和41年３月）	宮城県文化財調査報告書第11集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書（宇ノ崎古墳）」
１９６７ （昭和42年３月）	宮城県文化財調査報告書第12集「埋蔵文化財発掘調査報告書 （桝形横穴古墳群・鷹の巣古墳群・松崎古墳）」
１９６７ （昭和42年３月）	宮城県文化財調査報告書第13集「（新産業都市指定地区）埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 （西ノ浜貝塚・三十三間堂）」
１９６７ （昭和42年12月）	宮城県文化財調査報告書第14集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 陸奥国分寺跡東北部発掘調査報告」
１９６８ （昭和43年３月）	宮城県文化財調査報告書第15集「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報（南境貝塚）」
１９６８ （昭和43年３月）	宮城県文化財調査報告書第16集「埋蔵文化財第二次緊急発掘調査概報（西ノ浜貝塚）」
１９６８ （昭和43年３月）	宮城県文化財調査報告書第17集「埋蔵文化財緊急調査概報 （東北縦貫自動車道遺跡地名表・同試掘調査略報）」
１９６８ （昭和43年３月）	「蔵王山麓民俗図誌（釜房ダム水没地区）」
１９６９ （昭和44年３月）	宮城県文化財調査報告書第18集「埋蔵文化財緊急調査概報 東北縦貫自動車道遺跡地名表・湯ノ倉館試掘調査概報」
１９６９ （昭和44年３月）	宮城県文化財調査報告書第19集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報（長根貝塚）」
１９６９ （昭和44年３月）	宮城県文化財調査報告書第20集「埋蔵文化財第４次緊急発掘調査概報（南境貝塚）」
１９６９ （昭和44年３月）	宮城県文化財調査報告書第21集「蔵王山麓の社会と民俗」
１９７０ （昭和45年３月）	宮城県文化財調査報告書第22集「日の出山窯跡群」
１９７０ （昭和45年３月）	宮城県文化財調査報告書第23集「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 （下原田遺跡・二屋敷遺跡・持長寺遺跡）」
１９７１ （昭和46年３月）	宮城県文化財調査報告書第24集 「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）」

1 9 7 2 （昭和47年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第25集「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 （白石市：柴田郡村田町地区）」
1 9 7 2 （昭和47年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第26集「宮城県指定天然記念物球状斑れい岩調査報告」
1 9 7 2 （昭和47年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第27集「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書 （地名表・試掘調査概報〈白石・高清水地区〉」
1 9 7 3 （昭和48年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第28集「宮城県遺跡地名表」
1 9 7 3 （昭和48年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第29集「菅生田遺跡調査概報」
1 9 7 3 （昭和48年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第30集「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報」
1 9 7 3 （昭和48年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第31集「東北自動車道関係遺跡発掘調査略報 （白石市・仙台市～大和町地区）」
1 9 7 3 （昭和48年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第32集「山畑装飾横穴古墳群発掘調査概報」
1 9 7 3 （昭和48年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第33集「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」
1 9 7 4 （昭和49年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第34集「山中七ケ宿の民俗」
1 9 7 4 （昭和49年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第35集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ（荒屋敷横穴古墳群・山下横穴古墳群・北台遺跡・西野田遺跡・岩切鴻ノ巣遺跡・沢乙遺跡・中ノ茎Ａ遺跡）」
1 9 7 4 （昭和49年 3 月）	「宮城県の古民家」（宮城県民家緊急調査報告書）
	第37集欠　番
1 9 7 5 （昭和50年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第38集「宮前遺跡」
1 9 7 5 （昭和50年 3 月）	宮城県文化財報査報告書第39集「土平遺跡発掘調査概報」
1 9 7 5 （昭和50年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第40集「宮城県文化財発掘調査略報（昭和48・49年度分）」
1 9 7 5 （昭和50年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第41集「天然記念物ヨコグラノキ北限地帯調査報告書」
1 9 7 6 （昭和51年 3 月	宮城県文化財調査報告書第42集「宮城県文化財発掘調査略報（昭和50年度分）」
1 9 7 6 （昭和51年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第43集「貞山堀運河」
1 9 7 6 （昭和51年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第44集「砂山横穴古墳群調査報告書」
1 9 7 6 （昭和51年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第45集「特別名勝松島（保存管理計画策定書）」
1 9 7 6 （昭和51年10月）	宮城県文化財調査報告書第46集「宮城県遺跡地名表」
1 9 7 6 （昭和51年10月）	宮城県文化財調査報告書第47集「宮城県遺跡地図」
1 9 7 7 （昭和52年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第48集「宮城県文化財発掘調査略報（昭和51年度分）」
1 9 7 7 （昭和52年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第49集「清太原西遺跡・船渡前遺跡」
1 9 7 7 （昭和52年 3 月）	宮城県文化財調査報告書第50集「清水側遺跡」